茨城県教育財団文化財調査報告第266集

鍋山東原遺跡

つくば明野北部工業団地地内
埋蔵文化財調査報告書

平成18年3月

財団法人　茨城県開発公社
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第266集

鍋山東原遺跡

なべ やま ひがし はら

つくば明野北部工業団地地内 埋蔵文化財調査報告書

平成18年3月

財団法人　茨城県開発公社
財団法人　茨城県教育財団

遺跡遠景（南から）

鍋山東原遺跡出土遺物

序

茨城県は，21世紀の社会を展望し，県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るため，広域的な幹線道路網の整備と地域の活力を生む魅力ある拠点づくりなど，産業と生活の調和する新しい町づくりを推進しております。

つくば明野北部工業団地開発事業は，産業構造の変化に対応できる人材や新たな就業機会を確保するための地域振興事業として計画されたものです。この事業予定地内には鍋山東原遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，財団法人茨城県開発公社より埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，平成16年６月から平成16年10月にかけて発掘調査を実施しました。

本書は，鍋山東原遺跡の調査成果を収録したもので，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である財団法人茨城県開発公社から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，筑西市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　稲　葉　節　生

例　　　言

1　本書は，財団法人茨城県開発公社の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した，茨城県筑西市鍋山字東原788番地ほかに所在する鍋山東原遺跡（なべやまひがしはら）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調査　平成16年６月１日～平成16年10月31日

整理　平成17年４月１日～平成17年８月31日

3　発掘調査は，調査課長川井正一のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	江幡良夫
主任調査員	青木仁昌
主任調査員	照山大作

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長大森雅之のもと，主任調査員照山大作が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X軸＝＋29,480m，Y軸＝＋18,000mの交点を基準点（A１a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらにこの大調査区を東西南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「A１区」，「B２区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「A１a1区」，「B２b2区」のように呼称した。

2　本文・全測図・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　SI－住居跡　TM－古墳　TK－塚跡　SE－井戸跡　SK－土坑　SD－溝跡　PG－ピット群　P－柱穴　K－撹乱

遺物　P－土器　TP－拓本記録土器　DP－土製品　Q－石器・石製品　M－金属製品

土層　K－撹乱

3　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は縮尺400分の１とし，各遺構の実測図は，60分の１で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3)　遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

▭ 炉・旧表土・粘土　▭ 赤彩・焼土・赤色顔料　■ 煤

● 土器　○ 土製品　□ 石器・石製品　△ 金属製品　－・－・ 硬化面

5　「主軸方向」は，炉をもつ竪穴住居跡についてはそれを通る軸線とし，他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は，主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例N－10°－E）。

6　遺構一覧表・遺物観察表の表記は次のとおりである。

(1)　現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。計測値の単位はm，cm，ｇで示した。

(2)　遺物観察表の備考欄は，残存率や写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3)　遺物番号については，土器，拓本のみ掲載の土器片，土製品，石器・石製品，金属製品ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号は同一とした。

7　整理時に遺構名称・番号を変更した場合，旧遺構名称・番号を（　）を付して併記した。

抄　録

ふりがな	なべやまひがしはらいせき
書名	鍋山東原遺跡
副書名	つくば明野北部工業団地地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第266集
著者名	照山　大作
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310-0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL 029（225）6587
発行日	2006年（平成18年）３月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
鍋山東原遺跡（なべやまひがしはらいせき）	茨城県筑西市（いばらきけんちくせいし） 鍋山字東原（なべやまあざひがしはら） 788番地（ばんち）ほか	08502 － 033	36度 15分 55秒	140度 02分 01秒	28m	20040601 ～ 20041031	6,311㎡	つくば明野北部工業団地開発事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍋山東原遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡　１軒 土坑　３基	縄文土器（深鉢） 石器（凹石）	
		古墳	竪穴住居跡　16軒	土師器 須恵器 土製品（土玉，土錘） 石製品（管玉，紡錘車） 石器（砥石，磨石） 金属製品（不明鉄製品）	
	古墳	古墳	円墳　８基	土師器 須恵器 土製品（埴輪） 石製品（紡錘車） 金属製品（小刀ヵ）	
	塚	中世	塚跡　１基	石製品（五輪塔）	
	その他	中世	土坑　２基	陶器（甕）	
		時期不明	井戸跡　１基 土坑　30基 溝跡　１条 ピット群　１か所	土師器 土製品（紡錘車） 石器（石斧，片刃礫器，石鏃，尖頭器，彫器，石核，剥片）	

要約	縄文時代と古墳時代及び中世の複合遺跡である。特に，古墳時代前期から中期にかけて集落が営まれ，中期以降は古墳群が形成されている。

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第1章　調査経緯 ………… 1
　第1節　調査に至る経過 ………… 1
　第2節　調査経過 ………… 1
第2章　位置と環境 ………… 2
　第1節　地理的環境 ………… 2
　第2節　歴史的環境 ………… 2
第3章　調査の成果 ………… 7
　第1節　遺跡の概要 ………… 7
　第2節　基本層序 ………… 7
　第3節　遺構と遺物 ………… 8
　　1　縄文時代の遺構と遺物 ………… 8
　　(1)　竪穴住居跡 ………… 8
　　(2)　土坑 ………… 10
　　2　古墳時代の遺構と遺物 ………… 12
　　(1)　竪穴住居跡 ………… 12
　　(2)　古墳 ………… 51
　　3　中世の遺構と遺物 ………… 65
　　(1)　塚跡 ………… 65
　　(2)　土坑 ………… 68
　　4　その他の遺構と遺物 ………… 70
　　(1)　井戸跡 ………… 70
　　(2)　土坑 ………… 71
　　(3)　溝跡 ………… 75
　　(4)　ピット群 ………… 76
　　(5)　遺構外出土遺物 ………… 77
　第4節まとめ ………… 81
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県は，首都経済圏発展の一翼を担う北関東エリアの中心としての役割がますます増大しており，茨城県西部の筑西市につくば明野北部工業団地開発事業を推進している。

平成14年10月9日，茨城県開発公社理事長は，茨城県教育委員会教育長に対して，つくば明野北部工業団地開発事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成14年10月25日現地踏査を，平成14年11月13～15日に試掘調査を実施し，鍋山東原遺跡の所在を確認した。平成14年11月20日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県開発公社理事長あてに事業地内に鍋山東原遺跡が所在する旨回答した。

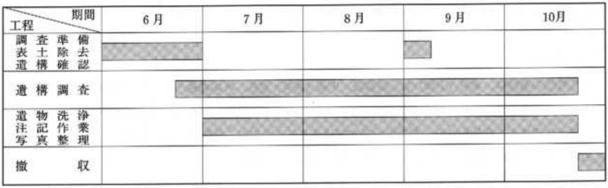
平成15年10月2日，茨城県開発公社理事長は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，計画変更が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，平成15年11月7日，茨城県開発公社理事長あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成15年12月17日，茨城県開発公社理事長は，茨城県教育委員会教育長に対して，つくば明野北部工業団地開発事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成16年1月7日，茨城県教育委員会教育長は，茨城県開発公社理事長あてに，鍋山東原遺跡について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県開発公社理事長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成16年6月1日から平成16年10月31日まで発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査経過

調査は，平成16年6月1日から平成16年10月31日まで実施した。その概要を表で記載する。なお，当初の調査面積は4,620㎡であったが，調査区域外にも古墳があったため，平成16年6月24日，茨城県教育委員会は追加の試掘調査を実施した。その結果，平成16年7月26日，発掘調査計画の変更を行い，調査面積1,691㎡を追加し，併せて調査期間を9月1日から10月31日まで2か月間延期した。



第2章　位 置 と 環 境

第1節　地 理 的 環 境

鍋山東原遺跡は，茨城県筑西市鍋山字東原788番地ほかに所在している。

筑西市（旧明野町）は，茨城県の西部，筑波山の西麓に位置している。旧明野町の地勢は，市の東側を南流する桜川と西側を緩流して利根川に合流する小貝川とにはさまれた洪積台地と桜川に合流する観音川をはじめとする小河川によって形成された沖積低地によってできている。この洪積台地は南に長く伸びる舌状の台地で，畑地として利用されており，小河川流域の沖積低地は，肥沃な田園地帯がひらけている。洪積台地と沖積低地との比高は４～６ｍである[1)]。

地質をみると，この洪積台地を形成している最も古い第三紀層の凝灰した砂礫層の上に，青灰色から灰色を呈する粘土ないし砂礫粘土層の茨城粘土層，その上に関東ローム層がほぼ水平に連続して堆積しており，最上層は，耕作するのに適した腐食土層となっている[2)]。

当遺跡は，南東に筑波山を望み，東を観音川，西を小貝川の支流である大川に挟まれた標高28ｍほどの台地の先端に立地している。調査前の現況は，山林である。

第2節　歴 史 的 環 境

当遺跡周辺からは，分布調査や発掘調査により多数の遺跡が確認されている[3)]。観音川や大川に面する台地や縁辺部には各時代の遺跡が集中しており，原始・古代から生活の適地であったことがうかがえる。ここでは，当遺跡に関連する主な遺跡を中心に時代を追って述べる。

旧石器時代の遺跡は，当財団が平成10年度に調査した赤町（中根）十三塚遺跡〈２〉と，中妻（倉持）遺跡〈３〉がある。前者からはナイフ形石器や剥片[4)]，後者からはナイフ形石器や尖頭器が出土している[5)]。これらの遺跡から遺構は検出されていないが，この地域に古くから生活していたことがうかがい知れる。

縄文時代の遺跡は，中妻（倉持）遺跡，山王堂遺跡〈４〉，台山遺跡〈５〉，館野遺跡〈６〉がある。中期から後期にかけての中妻（倉持）遺跡は，住居跡や土坑，埋甕などが検出されている。特に，埋甕２基からは骨片などが検出され，当時の埋葬方法や生死観を知る上で貴重な資料である。また，石錘・土器片錘なども出土している。山王堂遺跡では，中期から晩期の長期間にわたって集落が営まれており，その時期を代表する加曽利Ｅ式，称名寺式，堀之内式，大洞式の縄文土器をはじめ，石器（磨石，打製石斧，浮子など）が多量に検出されている[6)]。しかし，この後，弥生時代後期に入るまでの数百年間，集落の営まれた形跡が今までに認められていない[7)]。

弥生時代の遺跡は，赤町（中根）十三塚遺跡，中妻（倉持）遺跡，宮山遺跡〈７〉，館野遺跡，宮前遺跡〈８〉などがある。このうち明野町教育委員会によって２回の調査が行われた中妻（倉持）遺跡は，隅丸長方形を呈する竪穴住居跡が３軒検出され，群馬県や栃木県にみられる後期の二軒屋式土器が検出されている。館野遺跡においても，同様の二軒屋式土器の広口壺や土製紡錘車などが確認されている[8)]。

古墳時代は当遺跡の中心となる時期であり，市内においても多数の遺跡が知られているが調査された例は少ない。主な遺跡として赤町（中根）十三塚遺跡，中妻（倉持）遺跡，館野遺跡，山王堂遺跡，宮山遺跡，宮前遺跡，灯火山古墳〈９〉，台畑古墳〈10〉，八坂神社古墳〈11〉，宮山観音古墳〈12〉，鷲島古墳群〈13〉，藤塚

古墳群〈14〉，稲荷塚古墳〈15〉などが確認されている。古墳時代前期には，中妻（倉持）遺跡，宮山遺跡，宮前遺跡などで弥生時代から継続して集落が営まれている。中期では，赤町（中根）十三塚遺跡で一辺が約7.5mもある大形の竪穴住居跡１軒と土坑１基が検出されている。また，山王堂遺跡では，住居跡８軒が検出されている。後期では，館野遺跡から初期竈を持つ竪穴住居跡が２軒検出されている。この時期になると集落は次第に台地の縁辺部から低地へと移動していることが，遺跡の立地からもうかがい知ることができる。前期から後期にかけての集落の営みとともに，古墳の築造も行われるようになる。旧明野町域では，中期初頭の古墳とみられる灯火山古墳（全長100mの前方後円墳）[9]が最初の首長層の墓として登場する。それに続いて台畑古墳（未調査，前方後円墳），宮山観音古墳（全長約92mの前方後円墳）[10]が相次いで登場することなどから，中期頃にはこの地域を支配する首長層が出現したことがわかる。後期になると，藤塚古墳群（円墳８基）や鷲島古墳群（円墳２基，埴輪が出土）など，いずれも径10m前後の円墳を中心とする古墳群が各地で造られるようになる。このことから中期と比べると地域の各有力者の中からも新たに古墳をつくる階層が生まれてきたことがわかる[11]。

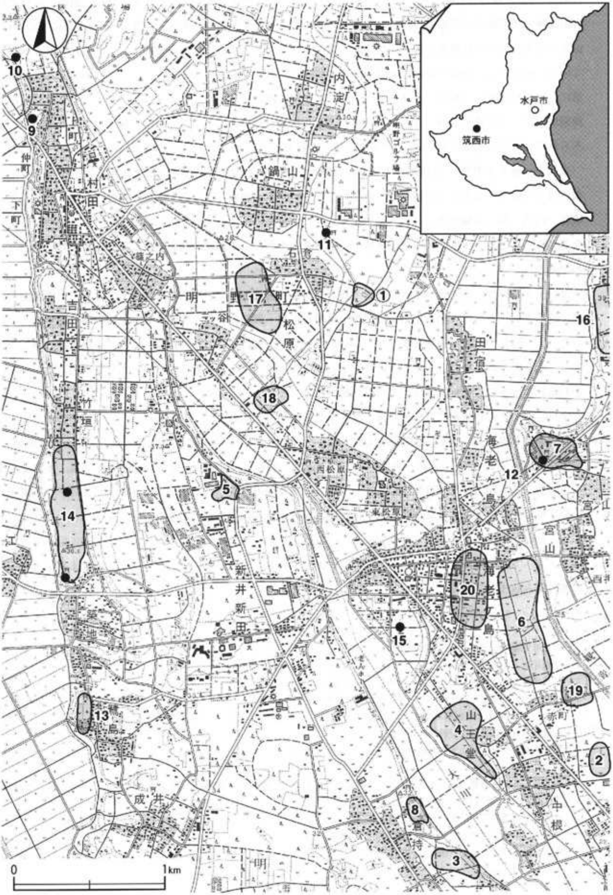
奈良・平安時代になると，地方には国・郡がおかれて統治され，旧明野町域は，延暦年間に白壁郡から真壁郡に改称され，さらに天平12年頃には，郡・里制から郡・郷制の改称に伴い大林（大村）郷に属することとなった。この時代の遺跡は天神遺跡〈16〉，赤町（中根）十三塚遺跡，石倉西遺跡〈17〉，中根遺跡〈18〉などがあり，現在の水田に面して立地している。平安時代の様子を伝える文献はないが，当町域周辺には平将門にかかわる伝承が多く，東石田には，平国香の館があったといわれている。

中世になると，12世紀には村田荘域として多気氏の勢力下にあったと考えられるが，多気氏の没落後，小山氏が地頭職を得，その庶流の村田氏の支配下にあったと考えられる。また，遺跡数は減少するが赤町遺跡〈19〉，海老ヶ島東原遺跡〈20〉，赤町（中根）十三塚遺跡などがある。赤町（中根）十三塚遺跡では，多数の土壙から土師質土器，陶器などの遺物が検出されている。室町時代には，当遺跡より1.2kmほど南に下った場所（現松原字城の内）に海老ヶ島城が築城され，旧明野町域は結城氏系の城主海老原氏の支配下におかれていた。しかし，1546年に小田氏によって落城し，その後城主となった小田氏被官の平塚氏は，1556年に山王堂村（現大字山王堂）で起きた山王堂合戦で結城氏に破れ海老ヶ島城を奪われている。その後も戦は収まらず，戦国時代の波に飲み込まれていく。

※　文中の〈　〉内の番号は，第１図及び表１の該当番号と同じである。

註）

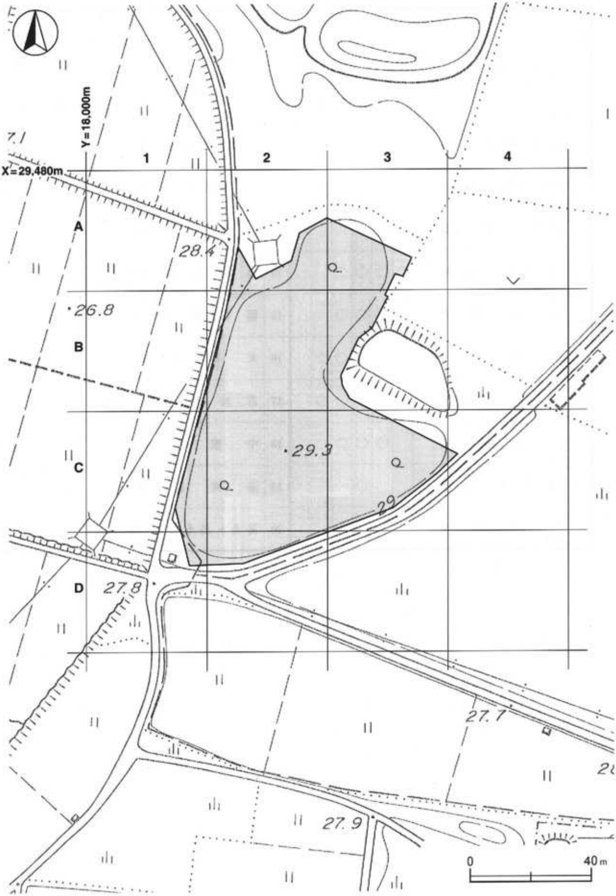
1）明野町史編さん委員会『明野町史』1985年７月
2）蜂須紀夫『茨城県　地学ガイド』1986年11月
3）茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編，地図編）』茨城県教育委員会　2001年３月
4）野田良直「主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　中根十三塚遺跡」『茨城県教育財団調査報告』第154集　茨城県教育財団　1999年７月
5）明野町教育委員会『倉持遺跡』1983年３月
6）明野町教育委員会『山王堂遺跡発掘調査報告書』1992年９月
7）註１）と同じ
8）茂木悦夫「館野遺跡　主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書２」『茨城県教育財団調査報告』第189集　茨城県教育財団　2002年３月
9）明野町教育委員会『灯火山古墳確認調査報告書』1990年12月
10）茨城大学人文学部考古学研究室『常陸の円筒埴輪』2002年３月
11）明野町史編さん委員会『明野町の遺跡と遺物』1983年７月



第１図　鍋山東原遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院２万５千分の１「真壁・筑波」）

表1　鍋山東原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	鍋山東原遺跡		○		○	○	○		11	八坂神社古墳				○			
2	赤町(中根)十三塚遺跡	○		○	○	○	○		12	宮山観音古墳				○			
3	中妻（倉持）遺跡	○	○	○					13	鷲島古墳群			○	○	○		
4	山王堂遺跡		○	○	○	○			14	藤塚古墳群				○			
5	台山遺跡		○		○	○			15	稲荷塚古墳				○			
6	館野遺跡		○	○	○	○	○		16	天神遺跡		○		○	○	○	○
7	宮山遺跡		○	○	○	○	○		17	石倉西遺跡				○	○		
8	宮前遺跡			○	○	○			18	中根遺跡				○	○		
9	灯火山古墳				○				19	赤町遺跡				○	○	○	
10	台畑古墳				○				20	海老ヶ島東原遺跡				○	○	○	



第２図　鍋山東原遺跡調査区設定図

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

鍋山東原遺跡は，筑西市（旧明野町）の東部に位置し，大川左岸の標高28mほどの台地上に立地している。

調査の結果，古墳時代中期を主体とした縄文時代から古墳時代及び中世にかけての複合遺跡であることが確認された。調査前の現況は山林であり，調査対象面積は，6,311m²である。

今回の調査によって，竪穴住居跡17軒（縄文時代1，古墳時代16），古墳8基，土坑35基（縄文時代3，中世2，時期不明30），井戸跡1基（時期不明），溝跡1条（時期不明），塚跡1基（中世），ピット群1か所が検出された。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に33箱出土しており，遺物の大半は古墳時代のものである。主な出土遺物は，縄文土器片（深鉢），土師器（坏・高坏・椀・甕・坩・甑・器台・ミニチュア土器・手捏土器），須恵器（坏・蓋・高坏），陶器（甕），土製品（土玉・紡錘車），石器（石核・剥片・石鏃），石製品（管玉・紡錘車・五輪塔）などである。

第2節　基本層序

調査区南東部（C４e1）にテストピットを設定し，基本層序の観察を行った（第3図）。土層は，７層に分層され，第Ⅰ層が表土，第Ⅱ層がローム漸移層，第Ⅲ～第Ⅴ層が関東ローム層，第Ⅵ層は砂層への漸移層，第Ⅶ層は砂礫層である。土層の観察結果は以下の通りである。

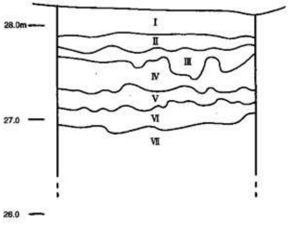
第Ⅰ層は黒褐色で，炭化物・ローム粒子を少量含んでいる。層厚は24～32cmである。

第Ⅱ層は灰褐色で，ローム粒子を少量含み，粘性は普通で締まりはやや弱い。層厚は7～18cmである。

第Ⅲ層は褐色のソフトローム層で，粘性は普通で締まりはやや弱い。層厚は6～34cmである。

第Ⅳ層はにぶい褐色のハードローム層で，粘性は普通で締まりは強い。層厚は6～37cmである。

第Ⅴ層はにぶい褐色のソフトローム層で，砂粒を少量含み，粘性・締まりともに普通である。層厚は6～24cmである。



第3図　基本土層図

第Ⅵ層はにぶい褐色のローム層から砂層への漸移層で，粘性は普通で締まりは強い。層厚は10～26cmである。

第Ⅶ層は，にぶい黄褐色の砂礫層で，粘性は弱く，締まりは強い。層厚は不明である。

なお，遺構は，第Ⅲ層上面で確認されている。

第3節　遺 構 と 遺 物

1　縄文時代の遺構と遺物

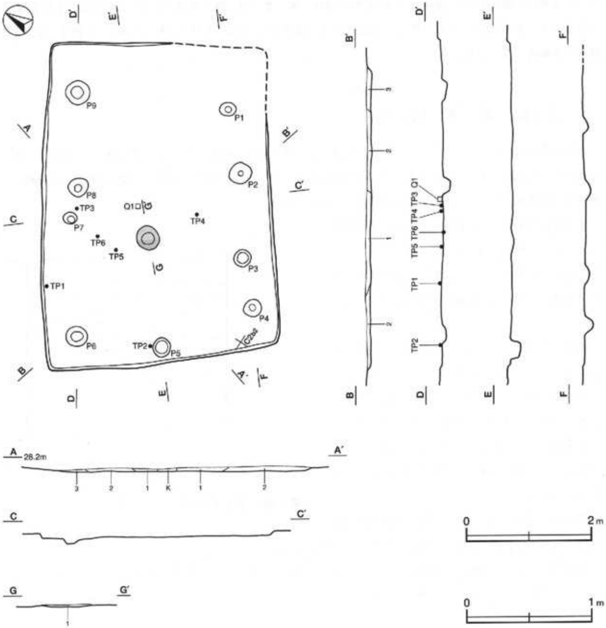
竪穴住居跡1軒，土坑3基を確認した。以下，遺構と遺物について記述する。

(1)　竪穴住居跡

第17号住居跡（第4・5図）

位置　調査区西部のC2a2区で，標高28mの台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.15m，短軸3.65mの長方形で，主軸方向はN－35°－Eである。壁高は6～8cmで，各壁とも外傾して立ち上がっている。



第4図　第17号住居跡実測図

床　ほぼ平坦で，硬化面は確認できなかった。

炉　中央部やや北西寄りに位置している。径約38cmの円形を呈し，床面を５cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱でわずかに赤変している。

炉土層解説
1　灰　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量

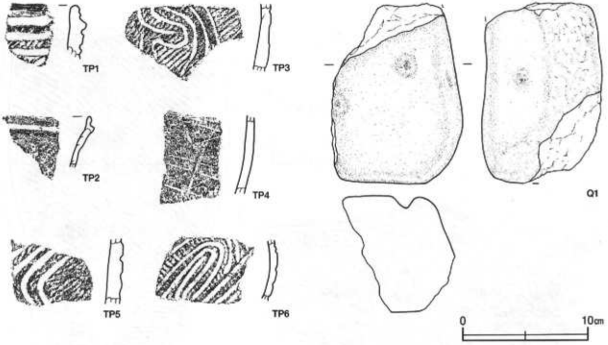
ピット　９か所。P１～P９は径23～37cm，深さ７～16cmで，規模及び配置から柱穴と考えられる。

覆土　３層からなる。全体的に周囲から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片209点（口縁部９，胴部196，底部４），石器３点（凹石１，敲石２）が，床面を中心に全体的に出土している。TP１は西壁際寄り，TP２は南西壁寄りのP５近く，TP３・TP５・TP６は炉の北側，TP４は炉の東側の床面からそれぞれ出土している。Q１は中央部の床面から出土している。遺物はすべて破片で，床面から散在して出土していることから，廃絶直後に投棄された可能性が考えられる。

所見　時期は，出土土器から後期前葉の堀之内式期と考えられる。



第５図　第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第５図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP１	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部直下に横位の沈線区画後刺突文施文及び区画内に単節ＬＲ縄文充填	床面	5%未満 PL18
TP２	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に沈線を周回　頸部に単節ＲＬ縄文施文	床面	5%未満 PL18
TP３	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	単節ＬＲ縄文を地文とし蕨手文を施文	床面	5%未満 PL18
TP４	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	石英・長石	浅黄橙	普通	直線的な沈線で文様を構成	覆土中	5%未満 PL18
TP５	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	単節ＬＲ縄文上に曲線的な沈線で文様を構成	床面	5%未満 PL18
TP６	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	単節ＲＬ縄文を地文とし沈線で渦巻文を施文	床面	5%未満 PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Q 1	凹石	(14.1)	(10.5)	9.1	(1,760)	閃緑岩	2面を研磨　表面に2か所側面に1か所穿孔	床面	PL19

(2) 土坑

第19号土坑（第6図）

位置　調査区南部のC 2 d8 区で，台地平坦部に位置している。

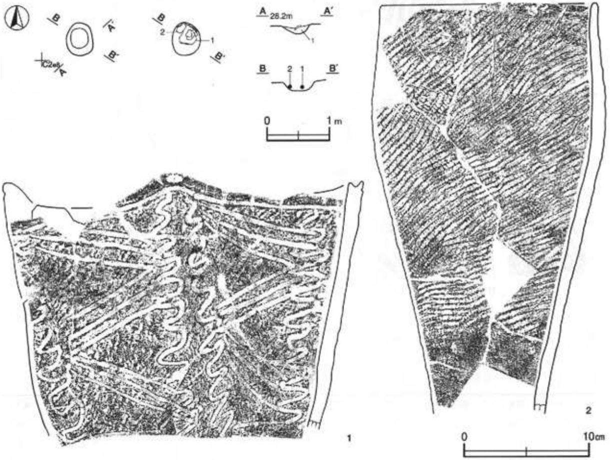
規模と形状　長径0.51m，短径0.42mほどの楕円形で，深さ14cmである。底面は北東部がややへこみ，壁は南側に緩やかに傾斜しながら立ち上がっている。長径方向はN－4°－Wである。

覆土　単一層で，ローム粒子をごく少量含み，締まりは弱い。堆積状況は不明である。

土層解説
1　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片39点(口縁部5，胴部34)が出土している。1は，横位でつぶれた状態で出土し，2は1に折り重なるように出土している。

所見　確認面で縄文土器が出土しており，底面に横位で置かれた状態で出土したことから埋設されたと考えられる。時期は，出土土器から後期前葉の堀之内式期と考えられる。



第6図　第19号土坑・出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表（第６図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[27.9]	(20.9)	－	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	４単位の波状口縁で波頂部に刺突文　口唇部に沿うように沈線が巡る　胴部には地文に縄文が粗く施文されその上に斜位の沈線及び蛇行沈線施文	底面	30%　PL15
2	縄文土器	深鉢	[17.3]	(32.5)	－	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁から胴下半部にかけて単節ＬＲ縄文を充填　胴下半部内面炭化物付着	底面	40%　PL15

第20号土坑（第７図）

位置　調査区南部のＣ２f9区で，台地平坦部に位置している。

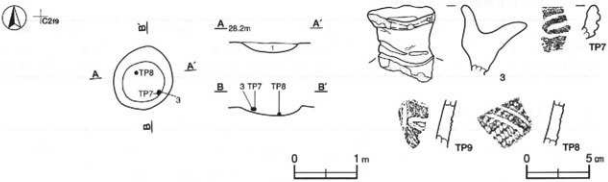
規模と形状　長径1.01m，短径0.93mの楕円形で，深さ13cmである。底面は中央部がややへこみ，壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がっている。長径方向はＮ－０°である。

覆土　単一層でローム粒子を少量含み，締まりは普通である。堆積状況は不明である。

土層解説
１　黒　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片10点（口縁部２，胴部８）が出土している。確認面で縄文土器が出土していたが，検出できたのは破片のみである。３，ＴＰ７は南東部壁際の覆土上層，ＴＰ８は北西部の床面，ＴＰ９は覆土中から出土した。

所見　時期は，出土土器及び状況から後期前葉の堀之内式期と考えられる。



第７図　第20号土坑・出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	浅鉢	－	(6.1)	－	石英	にぶい褐	普通	口縁把手外面に沈線　内外面ヘラ削り後ナデ調整	確認面	5%未満
TP７	縄文土器	深鉢	－	(2.6)	－	石英・長石	橙	普通	口縁部直下にＵ字文を横位に施文	確認面	5%未満 PL18
TP８	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	石英・長石・赤色粒子	灰褐	普通	単節ＬＲ縄文上に曲線的な２本の沈線を平行に施文	確認面	5%未満 PL18
TP９	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	石英・長石	灰褐	普通	縦方向の直線的な沈線と蛇行沈線で文様を構成	確認面	5%未満 PL18

第34号土坑（第８図）

位置　調査区北部のＢ２a0区で，台地平坦部に位置している。

重複関係　北側を第13号住居に，南側を第５号墳に掘り込まれている。

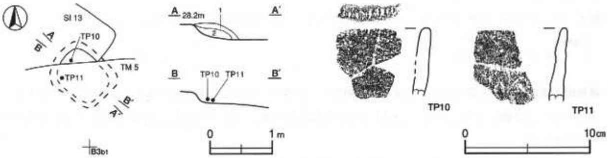
規模と形状　長径1.00m，短径0.81mの楕円形と推定される。深さ18cmほどで，底面は平坦である。壁は，緩やかに外傾しながら立ち上がっている。長径方向はＮ－55°－Ｗである。

覆土　２層からなる。周囲から土砂が流入した様相を呈していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片41点（口縁部３，胴部38）が覆土下層を中心に出土している。TP11には条痕文があるがTP10や他の破片はすべて無文であり，口縁部には刻みがみられる。

所見　覆土下層から深鉢の破片がまとまって出土していることから投棄されたものと思われる。時期は，出土土器から前期以降と考えられる。



第８図　第34号土坑・出土遺物実測図

第34号土坑出土遺物観察表（第８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP10	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	石英･長石･雲母	にぶい褐	普通	口縁部に刻みを施す	下層	5%未満 PL18
TP11	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	石英･長石･雲母	にぶい褐	普通	表裏両面に細密な条痕文　摩滅が著しい	下層	5%未満 PL18

表２　縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
19	Ｃ２d8	Ｎ－４°－Ｗ	楕円形	0.51×0.42	14	緩斜	皿状	不明	縄文土器（深鉢）	
20	Ｃ２f9	Ｎ－０°	楕円形	1.01×0.93	13	緩斜	皿状	不明	縄文土器（深鉢）	
34	Ｂ２a0	Ｎ－55°－Ｗ	［楕円形］	(1.00×0.81)	18	外傾	平坦	自然	縄文土器（深鉢）	本跡→SI13→TM５

２　古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡16軒，古墳８基が確認された。以下，それぞれの遺構と遺物について記述する。

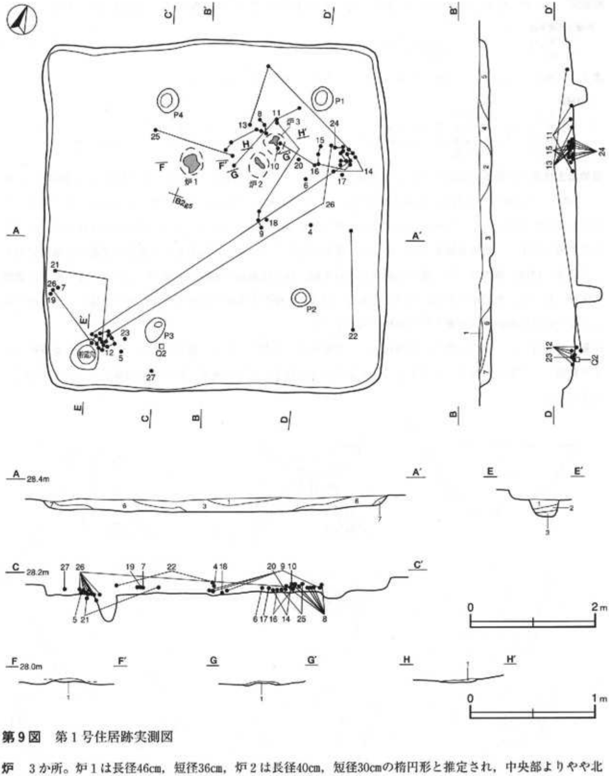
(1)　竪穴住居跡

第１号住居跡（第９～12図）

位置　調査区西部のＢ２g5区で，台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.58m，短軸5.46mの方形で，主軸方向はＮ－19°－Ｗである。壁高は７～22cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。



第9図　第1号住居跡実測図

炉　3か所。炉1は長径46cm，短径36cm，炉2は長径40cm，短径30cmの楕円形と推定され，中央部よりやや北側に位置している。炉3は長径35cm，短径33cmの円形と推定され，炉2のやや北側に位置している。すべて地床炉で掘り込みはなく，炉床は火熱により赤変硬化している。

炉1土層解説
1　灰　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量

炉2土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

炉3土層解説
1　灰　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　4か所。深さは11～43cmで，配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴　1か所。南西コーナー部に位置し，径49cmの円形で，深さは38cmである。底面は平坦である。

貯蔵穴土層解説

1　灰　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　褐　　　色　ロームブロック少量

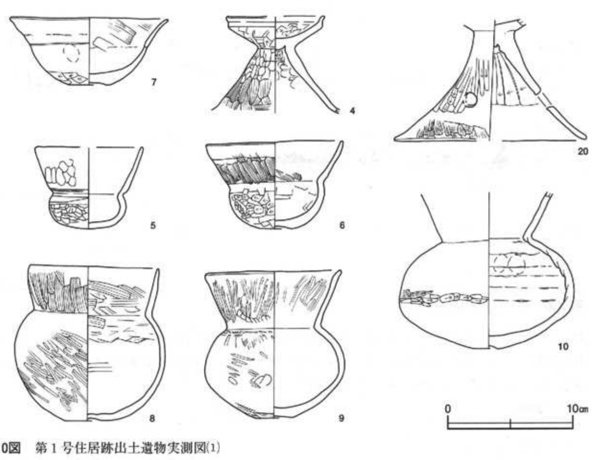
覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

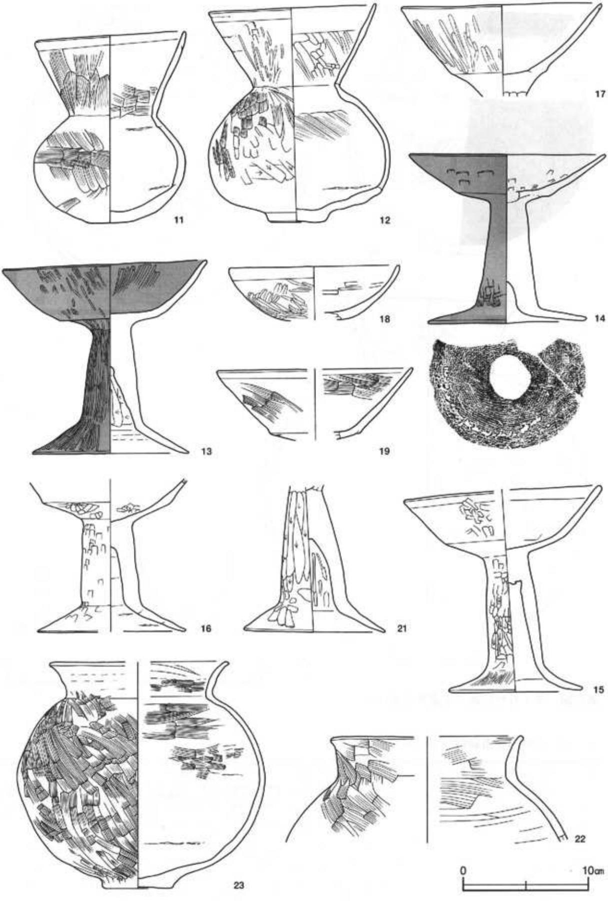
1　黒　褐　色　ローム粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　灰　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　灰　褐　色　ローム粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　灰　褐　色　ローム粒子微量
7　灰　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片683点（器台1，坩167，高坏161，壺12，甕341，ミニチュア土器1），石製品1点（管玉），鉄滓1点が炉2・3付近と貯蔵穴付近を中心に覆土下層から床面にかけて出土している。特に炉2・3付近には高坏や坩などが，貯蔵穴付近には壺や甕などが集中している。10・11は，北東部の床面から正位で並んだ状態で出土し，その東側から14～16・20が横位で出土している。9は中央より東部の床面から横位で出土している。12は，南西コーナー部の貯蔵穴付近の床面，Q2は南部の床面から出土している。また，8は北部の床面，13・26は北部から南部にかけての床面，24は北東壁際の床面に散在していた破片が接合したものであることから住居廃絶時に遺棄された様相がうかがえる。

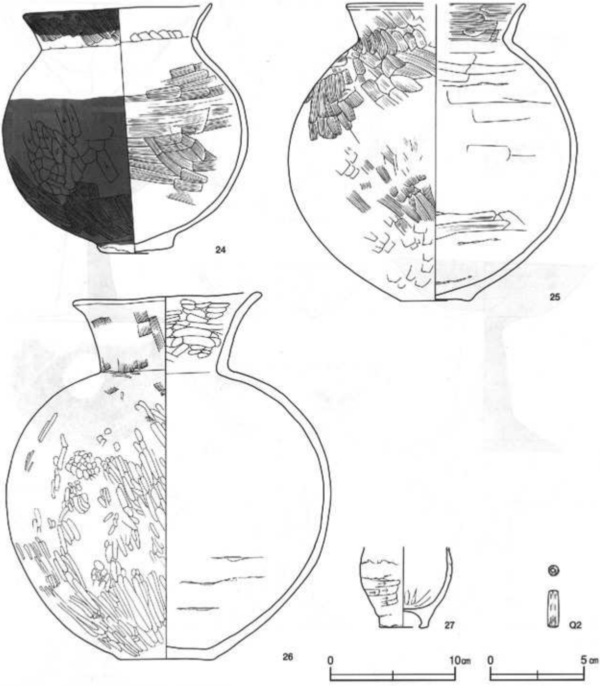
所見　時期は，出土した土器から中期初頭（5世紀初頭）と考えられる。遺存状況から炉2・3の廃絶後，炉1を使用したと推定される。また出土した土器の状況や様子から住居廃絶に伴う当時の様子をうかがい知ることができる。



第10図　第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)



第12図　第１号住居跡出土遺物実測図(3)

第１号住居跡出土遺物観察表（第10～12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
7	土師器	椀	12.6	5.3	3.2	石英・長石	明赤褐	普通	頸部外面輪積痕　内面ハケ目　体部外面指圧痕 体部外面下端ヘラ削り　内面輪積痕	下層	70%　PL12
4	土師器	器台	[7.6]	(7.8)	−	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ　坏部内外面ヘラ削り　脚部外面ハケ目調整後ヘラ削り　内面ヘラ削り後ヘラナデ	床面	85%　PL14
20	土師器	器台	−	(9.6)	[15.2]	石英・長石・雲母	橙	普通	３孔　脚部中央部外面ヘラ削り後ナデ　下半部ハケ目後ナデ　内面ヘラ削り後ナデ	床面	30%
5	土師器	坩	[8.3]	6.4	−	雲母・長石	橙	普通	口辺部横ナデ　頸部横方向にヘラ磨き後ナデ 体部内面摩滅調整不明	床面	85%　PL12
6	土師器	坩	10.8	7.0	2.3	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ　口辺部外面ハケ目　内面ナデ一部ハケ目　体部内外面ヘラ削り後ナデ	床面	90%
8	土師器	坩	10.2	12.3	3.4	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部内外面ハケ目調整後ナデ　頸部外面輪積痕 体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き	床面	80%　PL13
9	土師器	坩	10.6	11.6	2.9	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口辺部内外面ヘラ磨き　頸部外面ヘラのあたり痕　体部外面ヘラ磨き後ナデ　内面ナデ調整	床面	90%　PL13

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	土師器	坩	−	(12.4)	1.8	長石	橙	普通	口辺部内外面摩滅調整不明　体部外面ヘラ削り　ハケ目痕　内面指圧痕　輪積痕	床面	85%　PL13
11	土師器	坩	11.7	15.3	3.5	石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子	浅黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ　口辺部内外面ハケ目調整後ナデ　体部外面ハケ目　内面輪積痕	床面	90%　PL13
12	土師器	坩	13.0	17.4	4.5	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ　口辺部内外面ヘラ磨き後ナデ　内面ヘラ削り後ナデ　体部外面ハケ目後ヘラ削り　ヘラナデ　輪積痕　内面斜め方向のハケ目調整　輪積痕	床面	90%　PL13
13	土師器	高坏	16.3	15.4	12.5	長石・雲母	赤	良好	坏部内外面ヘラ磨き　脚部〜裾部外面ヘラ磨き　脚部内面削り　裾部内面ナデ	床面	80%　PL14
14	土師器	高坏	15.7	13.6	12.7	長石・雲母	橙	普通	坏部内外面ヘラ痕　脚部ハケ目痕　底部ハケ目　輪積痕　全体的に摩滅により調整不明	床面	80%　PL14
15	土師器	高坏	[15.3]	16.3	10.6	石英・長石・小礫	明褐	普通	口縁部内外面ナデ　坏部内外面ヘラ痕　内面摩滅により調整不明　脚部外面ヘラ削り後ナデ　裾部外面ヘラ磨き	床面	75%　PL14
16	土師器	高坏	−	(12.2)	[11.7]	長石・小礫・赤色粒子	橙	不良	内外面ヘラ痕　脚部〜裾部内面輪積痕	床面	60%
17	土師器	高坏	15.8	(7.3)	−	長石・赤色斑点	浅黄橙	普通	坏部外面ヘラ磨き　内面摩滅により調整不明	床面	40%　PL14
18	土師器	高坏	13.4	(4.3)	−	石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面ナデ　坏部外面ヘラ磨き　内面ナデ	覆土中〜床面	30%
19	土師器	高坏	[15.4]	(5.6)	−	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ナデ　坏部内外面ハケ目	下層	20%
21	土師器	高坏	−	(11.7)	11.3	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	脚部内外面ヘラ削り　裾部外面ヘラナデ	下層〜床面	50%
22	土師器	甕	[14.8]	(8.5)	−	石英・長石	灰黄褐	普通	口縁部〜体部内外面ハケ目　体部内面ヘラナデ	下層	5％未満
23	土師器	甕	[13.9]	18.0	5.6	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口辺部内外面ナデ　頸部〜体部外面斜め方向のハケ目　頸部〜体部内面横方向のハケ目　輪積痕	床面	60%　PL17
24	土師器	甕	14.8	19.9	5.7	石英・長石・小礫	にぶい黄橙	普通	口辺部外面ハケ目　内面ヘラナデ　頸部輪積痕　体部外面中央部ヘラ削り後ヘラナデ　下半部ハケ目　内面ハケ目　煤付着	床面	50%
25	土師器	甕	[14.1]	23.7	5.6	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面ナデ　頸部〜体部上半部ハケ目　内面横方向のハケ目　体部外面ハケ目後ヘラナデ　内面中央部ヘラナデ　下半部ハケ目　輪積痕	床面	65%　PL17
26	土師器	壺	14.5	29.2	7.9	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部外面ナデ　頸部外面ハケ目痕　内面ヘラナデ　体部外面磨き　内面輪積痕	床面	95%　PL16
27	土師器	ミニチュア	−	(6.5)	3.8	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　輪積痕　内面ナデ　ヘラ痕　底部上げ底	床面	95%　PL12

番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備考
Q 2	管玉	1.93	0.53	0.25	1.12	滑石	両面穿孔　擦痕あり	床面	PL20

第２号住居跡（第13図）

位置　調査区西部のＢ２ j3 区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第35号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.58m，短軸3.44mの方形で，主軸方向はＮ－27°－Ｅである。壁高は13〜18cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，北壁際から東壁際にかけて，６cmほどのテラス状の高まりがみられる。中央部から炉の周辺は踏み固められている。

炉　１か所。中央部からやや東に位置し，長径85cm，短径53cmの楕円形と推定され，床面を17cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
１　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
２　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　５か所。Ｐ１〜Ｐ４は，深さ14〜26cmで，配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ32cmで，炉と対峙し南壁寄りに位置し，硬化面にも接していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　２か所。貯蔵穴１は，南東コーナー部に位置し，長径55cm，短径48cmの楕円形で，深さは19cmである。貯蔵穴２は，南西コーナー部に位置し，一辺が68cmの方形で，深さは52cmである。ともに底面は平坦である。

貯蔵穴１土層解説
１　灰　褐　色　ローム粒子微量
２　灰　褐　色　ロームブロック少量

貯蔵穴２土層解説
１　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
２　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
３　黒　褐　色　ロームブロック少量

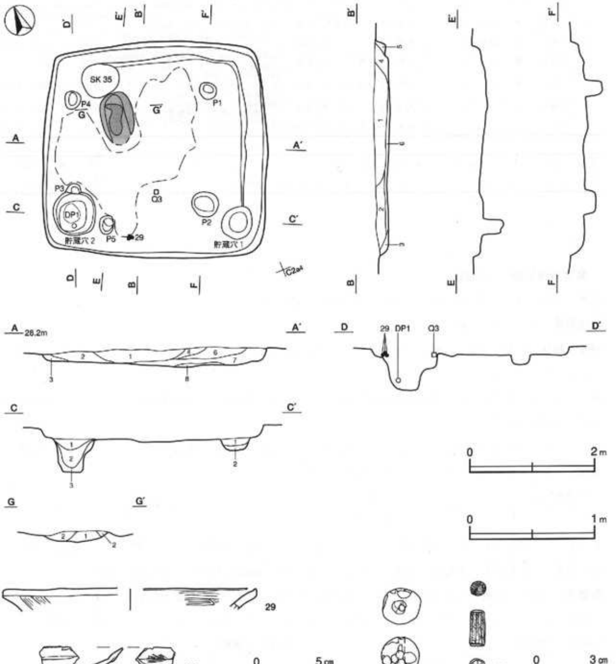
覆土　8層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量，締まり弱い	
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量，締まり普通	
3	黒褐色	ロームブロック微量	
4	黒褐色	ロームブロック少量	
5	灰褐色	ローム粒子少量	
6	褐色	ロームブロック微量	
7	暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	
8	黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	

遺物出土状況　土師器片26点（器台1，坩2，高坏7，甕16），石製品1点（管玉），土製品1点（球状土錘）が中央部から南部を中心に覆土下層から床面にかけて出土している。28は北西部の覆土中層，29は南壁付近の床面から出土している。Q3は未製品で中央部やや南側の床面から，DP1は貯蔵穴2の覆土下層から出土している。

所見　出土遺物は少なく明確な時期区分は困難だが，前期後半（4世紀後半）と推定される。



第13図　第2号住居跡・出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	土師器	器台	－	(1.8)	－	長石	橙	普通	器受部外面輪積痕　内面ヘラ磨き	上層	５％未満
29	土師器	甕	[19.8]	(1.7)	－	石英・長石	橙	普通	口縁部外面斜め方向のハケ目　内面横方向のハケ目	床面	５％未満

番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	胎土	特　　徴	出土位置	備考
DP１	球状土錘	1.9	2.0	0.41	7.85	石英	ナデ　工具による削り　片面穿孔	貯蔵穴下層	PL19

番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備考
Q３	管玉	1.84	0.85	－	2.50	滑石	穿孔の痕がわずかに残る未製品　擦痕	床面	PL20

第３号住居跡（第14・15図）

位置　調査区中央部のＣ２a5区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　南部を第１号墳に掘り込まれている。

規模と形状　長軸8.22m，短軸6.88mの長方形で，主軸方向はＮ－25°－Ｅである。壁高は９～15cmで，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

炉　２か所。炉１は中央部よりやや北側に位置し，長径48cm，短径45cmの円形である。炉２は炉１の南西に位置し，径44cmほどの円形である。炉１，炉２とも床面を２～４cm掘り込んだ地床炉であり，炉床は赤変硬化があまり見られない。

炉１土層解説
１　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量

炉２土層解説
１　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

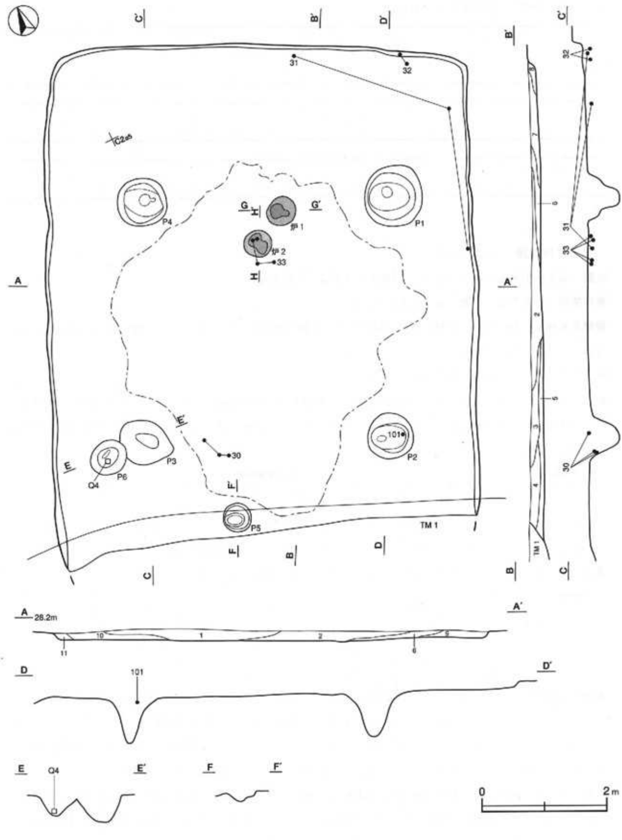
ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ46～72cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ12cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は深さ32cmで，Ｐ３の外側に位置し補助柱穴と考えられる。

覆土　11層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

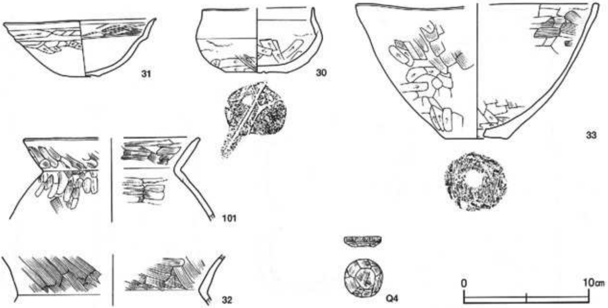
土層解説
１　黒　　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
２　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
３　黒　褐　色　ローム粒子微量
４　黒　褐　色　炭化粒子微量
５　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
６　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
７　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
８　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
９　灰　褐　色　ローム粒子微量
10　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
11　灰　褐　色　ロームブロック微量

遺物出土状況　土師器片402点（坩38，高坏94，甕258，甑12），石製品１点（紡錘車）が中央部を中心として覆土上層から床面にかけて出土している。30は南西部の床面，33は炉２付近の床面から出土している。31は破片が北東から南東部にかけての壁際付近の床面に散在して出土しており，廃絶直後に投棄された可能性がある。Ｑ４はＰ６の覆土下層から出土している。また，101はＰ２の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土した土器から前期末（４世紀末）と考えられる。遺構の規模は他の住居より格段に大きく，柱穴間もほぼ一定で規則的に配置され，堅牢な構造であったことが想定される。また，炉の赤変硬化は弱く，使用期間が短い様相を呈していることから生活の場として使用されたとは考えにくい。以上のことから集会所的な役割を担う建物だった可能性が考えられる。



第14図　第３号住居跡実測図



第15図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	土師器	椀	[8.8]	5.2	5.0	長石・赤色粒点	浅黄橙	普通	口縁部内外横面ナデ　体部外面ヘラ削り後一部ハケ目　輪積痕　内面縦方向の削り　輪積痕　底部ヘラ記号	床面	70%　PL12
31	土師器	椀	12.1	4.7	2.7	石英･長石･小礫	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　輪積痕　内面横方向の磨き　横ナデ	床面	60%　PL12
32	土師器	甕	－	(4.0)	－	石英・長石	灰黄褐	普通	口辺部～頸部内外面斜め方向のハケ目調整	床面	５%未満
101	土師器	甕	[13.8]	(6.7)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口辺部内外面ハケ目後ナデ頸部～体部外面縦方向のハケ目後ナデ　内面横方向のハケ目後ナデ	Ｐ２下層	５%未満
33	土師器	甑	[19.4]	10.9	5.0	石英･長石･黒色粒子･小礫	にぶい橙	普通	口辺部内外面ナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　一部ハケ目痕　内面上半部ヘラナデ後ハケ目　下半部削り後ヘラナデ　底部外面ハケ目　１孔	炉直上	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Ｑ４	紡錘車	2.97	0.73	－	11.0	チャート	研磨による微細な線無数　中央部に穿孔のない未製品	Ｐ６下層	PL20

第４号住居跡（第16図）

位置　調査区南部のＣ２b8区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　東部を第２号墳に掘り込まれている。

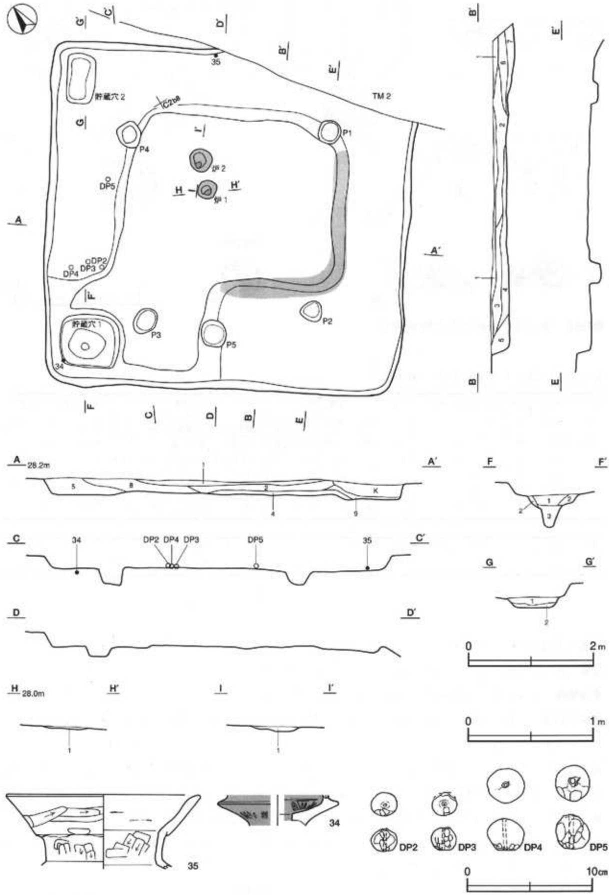
規模と形状　長軸5.80m，短軸5.44mの方形で，主軸方向はＮ－32°－Ｅである。壁高は18～24cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，中央部から南西コーナー部にかけて４cmほどの高まりが見られる。また，中央部の高まり端部に粘土混じりの土がＬ字状に貼られている。

炉　２か所。炉１は中央部よりやや北側に位置し，長径32cm，短径28cmの楕円形，炉２は炉１の北西に位置し，長径38cm，短径36cmの円形である。いずれも３～４cm皿状に掘り込んだ地床炉である。炉１の炉床は，赤変硬化しているが，炉２の炉床の赤変硬化は弱い。

炉１土層解説
１　灰　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量

炉２土層解説
１　灰　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量



第16図　第 4 号住居跡・出土遺物実測図

ピット　5か所。中央部の高まりを囲むようにP1～P4が配列されており，深さは15～30cmで，主柱穴と考えられる。P5は深さ16cmで，炉と対峙し南壁寄りに位置していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は，南西コーナー部に位置し，長軸94cm，短軸86cmの方形で，深さは50cmである。貯蔵穴2は，北コーナー部に位置し，長軸80cm，短軸46cmの隅丸長方形で，深さは18cmである。ともに底部は平坦であるが，貯蔵穴1の底部中央はU字状に深くなっている。

貯蔵穴1土層解説
1　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子少量
3　褐　　　色　ローム粒子微量

貯蔵穴2土層解説
1　褐　　　色　ローム粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

覆土　9層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，締まり強い
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量，締まり弱い
5　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量，締まり普通
6　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，締まり普通
7　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
8　褐　　　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
9　灰　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片74点（器台1，坩6，高坏19，壺1，甕47），土製品4点（球状土錘）が北部から南部を中心に覆土下層から床面にかけて出土している。34は貯蔵穴1の覆土上層，35は北東壁際の覆土下層から出土している。DP2～DP5は北西部から南西部にかけての床面から出土している。

所見　時期は，出土した土器から前期後葉（4世紀末）と考えられる。主柱穴と壁の間が1段低く床が軟弱であることから，中央部の高まりとの使い分けを考えることのできる住居跡である。

第4号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
34	土師器	器台	－	(2.4)	－	長石・雲母	橙	普通	器受部内外面放射状のヘラ磨き　中央部穿孔	貯蔵穴1上層	5％未満
35	土師器	壺	15.0	(5.9)	－	石英・長石	橙	普通	口辺部～頸部内外面ヘラ削り　横ナデ　頸部外面輪積痕　有段口縁　口辺部内面輪積痕	下層	10%

番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	胎土	特　徴	出土位置	備考
DP2	球状土錘	1.8	2.1	0.2	7.1	長石・雲母	ヘラナデ　中央部片面穿孔	床面	PL19
DP3	球状土錘	1.8	2.0	0.3	(6.8)	長石	ヘラナデ　中央部片面穿孔	床面	PL19
DP4	球状土錘	2.6	2.9	0.5	21.9	石英・長石	ヘラナデ　中央部片面穿孔	床面	PL19
DP5	球状土錘	2.7	2.7	0.5	19.6	石英・長石・雲母	ヘラナデ　中央部片面穿孔	床面	PL19

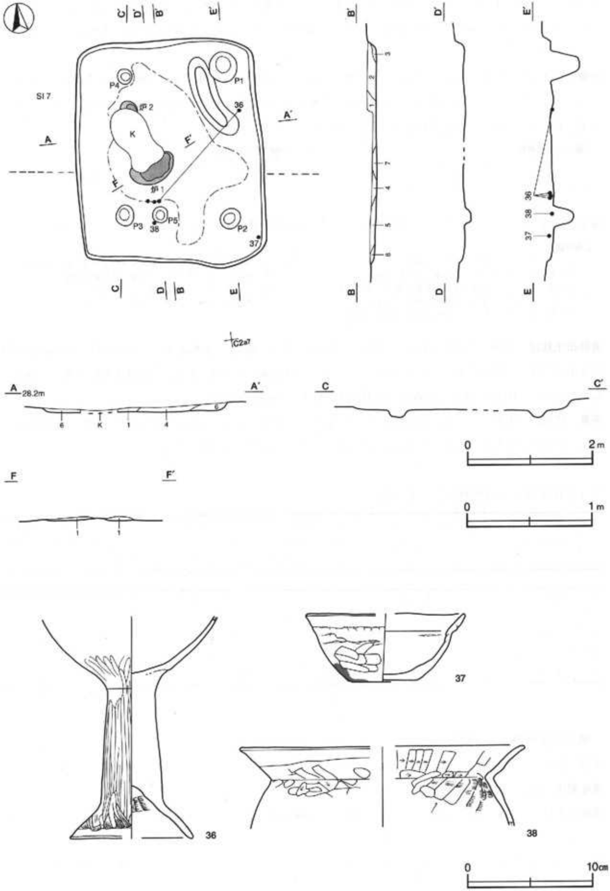
第5号住居跡（第17図）

位置　調査区中央部のB2j6区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第7号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸3.57m，短軸2.95mの長方形で，主軸方向はN－7°－Eである。壁高は5～15cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，北東コーナー部のP1寄りに楕円形状の高まりが見られる。主柱穴の内側を中心として，踏み固められている。



第17図　第５号住居跡・出土遺物実測図

炉　2か所。炉1，炉2とも攪乱を受けており，規模は不明である。炉1は，中央部からやや西に位置し，炉2は炉1の北側に位置している。いずれも掘り込みのない地床炉で，炉床は火熱により赤変硬化している。

炉1土層解説
1　灰　褐　色　焼土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　5か所。P1～P4は深さ10～45cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ11cmで炉の南側に位置しており，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　灰　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
6　灰　褐　色　ローム粒子微量
7　黒　褐　色　ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片85点（高坏17，甕68）が南西コーナー部を中心に覆土中層から床面にかけて出土している。36は，南部の床面と東部の床面に散在していた破片が接合したものである。37は南東コーナー部の覆土中層，38は南部の床面から出土している。散在した遺物の状況から廃絶直後に投棄された可能性が考えられる。

所見　時期は，出土した土器から中期初頭（5世紀初頭）と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
37	土師器	椀	[12.5]	5.4	5.4	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	口辺部内外面横ナデ　頸部内外面輪積痕　体部外面ヘラナデ　内面摩滅により調整不明　底部外面煤付着	中層	80%　PL12
36	土師器	高坏	－	(17.7)	[9.8]	長石・赤色斑点	橙	普通	坏底部～脚部外面ヘラ磨き　裾部外面ハケ目横ナデ　内面櫛状ヘラ痕　ナデ調整	床面	70%
38	土師器	甕	[22.4]	(6.5)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口辺部外面ヘラナデ　内面横方向に削り後ナデ　頸部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面ハケ目後ヘラナデ	床面	5%未満

第6号住居跡（第18・19図）

位置　調査区中央部のB2h7区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第7号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸4.28m，短軸3.90mの長方形で，主軸方向はN－2°－Eである。壁は削平されているために確認できない。

床　ほぼ平坦であるが，中央部から北側にかけて凸凹が見られる。

炉　2か所。炉1は長径63cm，短径44cmの楕円形と推定され，掘り込みのない地床炉である。炉2は長径43cm，短径38cmの楕円形で，床面を1～3cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉1は中央部に位置し，炉床は火熱により赤変硬化している。炉2は，中央部よりやや北東に位置し，炉床は火熱により赤変硬化している。

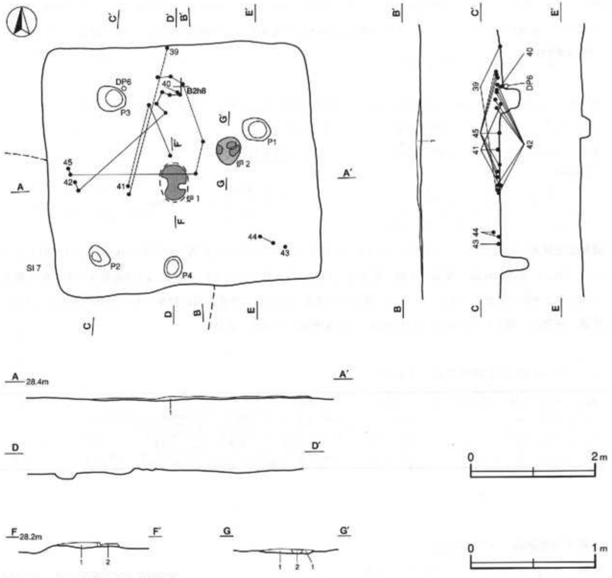
炉1土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

炉2土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　4か所。P1～P3は深さ14～45cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。P4は深さ9cmで炉の南側に位置しており，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　削平されているため1層のみであり，堆積状況は不明である。

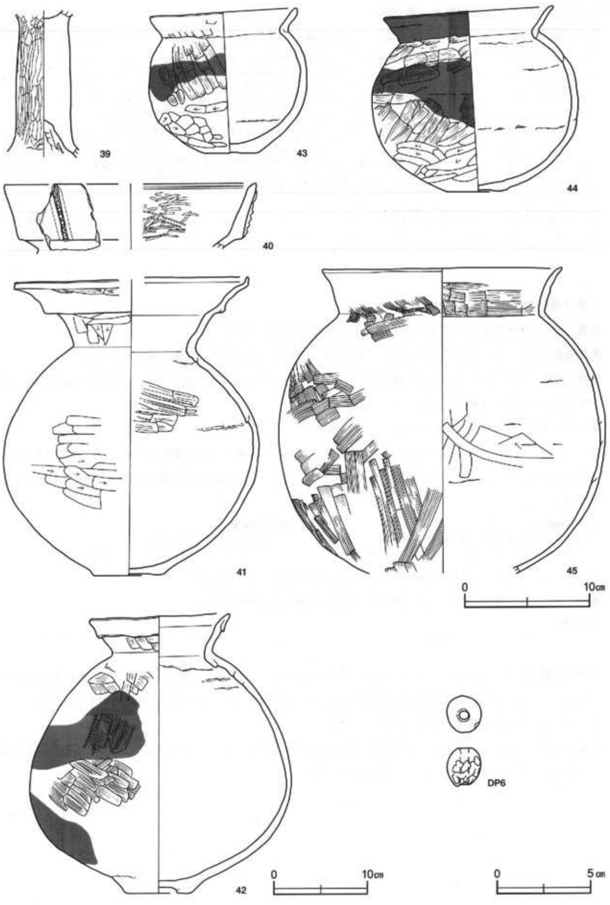
土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量



第18図　第６号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片785点（坩２，高坏58，甕725），土製品１点（土玉）が北壁際や西壁際及び南東コーナー部の覆土中から床面にかけて，まとまって出土している。39は北壁際の床面と中央部の床面，41は中央部付近の床面，42は北部の覆土中や西部の床面，45は中央部から北西部にかけて散在して出土した土器片がそれぞれ接合したものである。43は南東コーナー部の床面から逆位で出土している。44は43の西部の床面から出土しており，ともに同じ土器の形態である。出土位置が近いことから43とセットで置かれていた可能性がある。また，DP６はＰ３付近の床面から出土している。完形品に近い土器も出土していることから，廃絶時に遺棄された可能性が考えられる。

所見　時期は，出土した土器から前期末（４世紀末）と考えられる。



第19図　第６号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土師器	高坏	-	(11.7)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	脚部外面ヘラ磨き　裾部内面ヘラナデ	床面及び覆土上層	20%
40	土師器	壺	[19.8]	(5.2)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部内外面ナデ　口辺部外面ナデ　粘土紐縦位に貼り付け　内面磨き	床面	5%未満 PL18
41	土師器	壺	[19.8]	23.6	5.8	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	有段口縁部内外面ナデ　頸部外面縦方向の削り後ヘラナデ　体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ハケ目　輪積痕	覆土中	60%　PL16
42	土師器	壺	14.8	29.5	7.3	石英・長石・小礫	にぶい黄橙	普通	折り返し口縁部内外面ナデ　頸部外面ハケ目　輪積痕　内面輪積痕　体部外面ハケ目　煤付着　内面摩滅により調整不明	覆土中～床面	90%　PL16
43	土師器	小形甕	11.4	11.6	4.3	石英・長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　頸部外面輪積痕　体部外面ハケ目　ヘラ削り後ヘラナデ　内面横ナデ　輪積痕	床面	100% PL15
44	土師器	小形甕	13.1	14.8	4.8	石英・長石・小礫	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ　頸部外面輪積痕　体部外面ハケ目後ヘラ削り　煤付着　内面ナデ調整　輪積痕	床面	60%　PL15
45	土師器	甕	19.1	(24.3)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ　口辺～頸部内外面ハケ目　体部外面ハケ目調整　内面ヘラナデ後ナデ　輪積痕	下層～床面	40%

番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	胎土	特　　徴	出土位置	備考
DP６	土玉	1.9	1.9	0.5	5.90	長石	ナデ　中央部両面からの穿孔	床面	PL19

第７号住居跡（第20・21図）

位置　調査区中央部のＢ２i7区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　北コーナー部を第６号住居に，南部を第５号住居と第２号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と形状　削平されており遺存状態は不良である。残存している床面の範囲から一辺が約8.4mの方形の可能性が考えられる。主軸方向はＮ－８°－Ｅである。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

炉　２か所。炉１は長径50cm，短径40cmの楕円形で，床面を４cm掘り下げた地床炉である。炉２は長径56cm，短径39cmの楕円形で，床面を３cm掘り下げた地床炉である。どちらもほぼ中央部に位置し，炉床は火熱により赤変硬化している。

炉１土層解説
１　暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化粒子微量
２　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量

炉２土層解説
１　暗赤褐色　焼土粒子少量
２　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

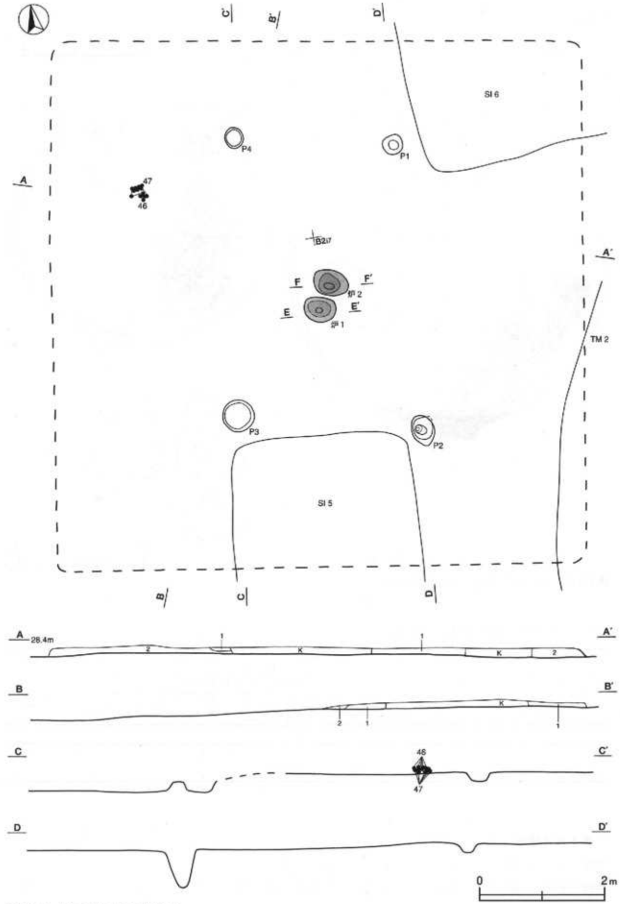
ピット　４か所。深さは12～59cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。

覆土　薄いために確認できたのは２層のみであり，堆積状況は不明である。

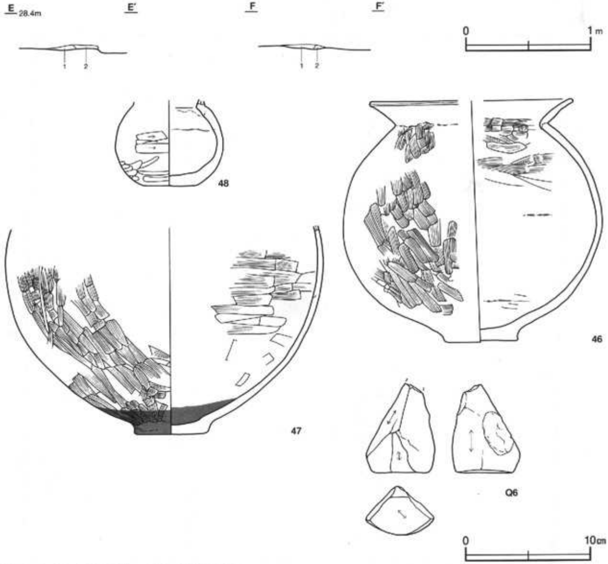
土層解説
１　灰　褐　色　ローム粒子・炭化物微量
２　灰　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片269点（椀６，坩６，高坏30，甕227），石器１点（砥石）が覆土上層から床面にかけて出土している。46は，北西部の覆土下層から47の上に折り重なるようにつぶれた状態で出土している。48・Ｑ６はともに南東部の覆土下層から出土している。

所見　時期は，出土した土器から前期中葉（４世紀中葉）と考えられる。炉１と炉２は近接しており，赤変硬化の様相から同時に使用されていた可能性が考えられる。



第20図　第7号住居跡実測図



第21図　第７号住居跡・出土遺物実測図

第７号住居跡出土遺物観察表（第21図）

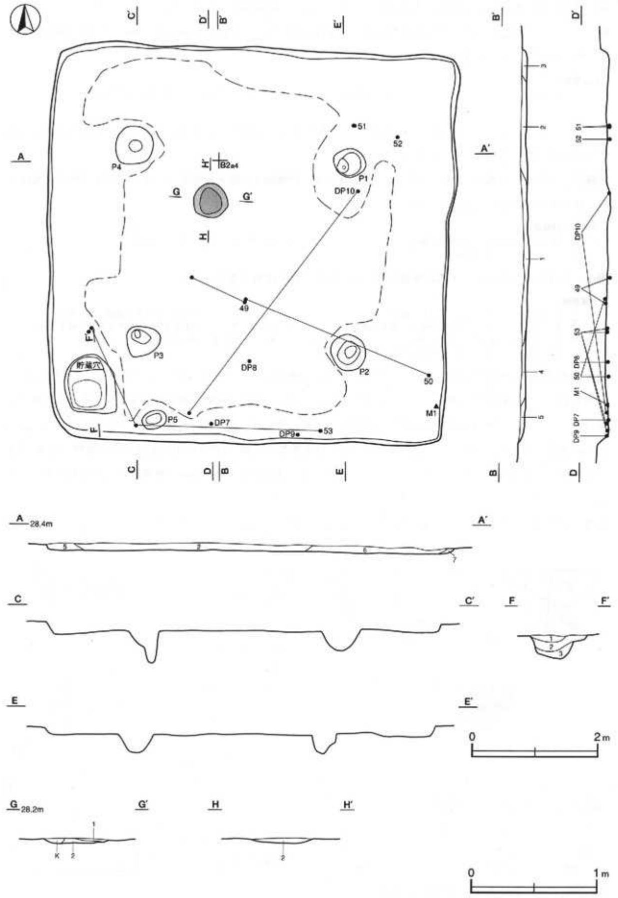
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	坩	－	(6.9)	3.9	石英・長石	橙	普通	体部外面上半部ヘラ削り　下半部ヘラナデ　内面摩滅により調整不明　輪積痕	下層	70%
46	土師器	甕	[15.8]	19.2	5.8	石英・長石	明赤褐	普通	口辺部内外面ナデ　頸部外面輪積痕　体部外面ハケ目　内面ハケ目後ヘラナデ　輪積痕	下層	50%　PL17
47	土師器	甕	－	(16.4)	5.7	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目後ヘラナデ　内面ハケ目後ナデ　煤付着　輪積痕	下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備考
Q 6	砥石	(7.0)	5.4	3.9	(136)	砂岩	自然礫を利用　砥面４面	下層	

第８号住居跡（第22・23図）

位置　調査区北西部のＢ２a4 区で，台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸6.50ｍ，短軸6.35ｍの方形で，主軸方向はＮ－４°－Ｅである。壁高は，13～20cmで外傾して立ち上がっている。



第22図　第８号住居跡実測図

床　ほぼ平坦であるが，中央部が４cmほど高くなっており，踏み固められている。

炉　１か所。中央部からやや北西寄りに位置し，径54cmの円形で，床面を４cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱により赤変している。

炉土層解説
１　黒　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
２　灰　褐　色　焼土ブロック少量，炭化粒子微量

ピット　５か所。P１～P４は深さ28～49cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。P５は深さ11cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　１か所。南西コーナー部に位置し，長軸93cm，短軸80cmの隅丸長方形で，深さは37cmである。底面は段を伴い中央部がややくぼんでいる。

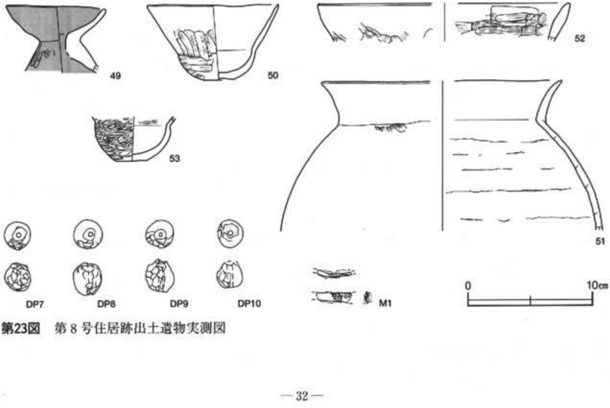
貯蔵穴土層解説
１　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
２　黒　褐　色　ローム粒子微量
３　灰　褐　色　ロームブロック微量

覆土　７層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
１　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
２　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量，締まり普通
３　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
４　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，締まり弱い
５　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量，締まり弱い
６　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量，締まり強い
７　褐　　　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片358点(器台６，坩19，高坏33，甕293，ミニチュア土器７)，土製品５点(球状土錘)，不明鉄製品１点が北部から南部にかけて出土している。50は中央部の床面と南東部の床面から出土した破片が接合したもので，53は南西部から南部の壁際付近の床面に散在していた破片が接合したものである。51・52はP１の北側の床面から出土している。DP７・DP９は南壁際の床面，DP８は中央部よりやや南側の床面，DP10は北東部の床面からそれぞれ出土している。遺物の出土状況から，廃絶直後に廃棄された可能性が考えられる。

所見　時期は，出土した土器から前期末（４世紀末）と考えられる。



第23図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
49	土師器	器台	7.9	(5.1)	－	長石・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ削り後ハケ目　中央部穿孔	床面	35%
50	土師器	坩	10.4	6.0	2.2	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部外面ナデ　頸部～体部外面ハケ目　内部摩滅により調整不明	床面	65%　PL13
53	土師器	坩	－	(3.5)	2.3	石英·長石·雲母	浅黄橙	普通	頸部内外面～体部外面ヘラ削り後細かいヘラ磨き　体部内面ナデ	床面	90%
51	土師器	甕	[18.9]	(11.8)	－	石英・長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　頸部外面ハケ目　体部内外面摩滅により調整不明　内面輪積痕	床面	20%
52	土師器	甕	[19.7]	(3.0)	－	石英·長石·雲母	にぶい褐	普通	口辺部外面横ナデ　内面ハケ目　頸部外面斜め方向のハケ目	床面	５%未満

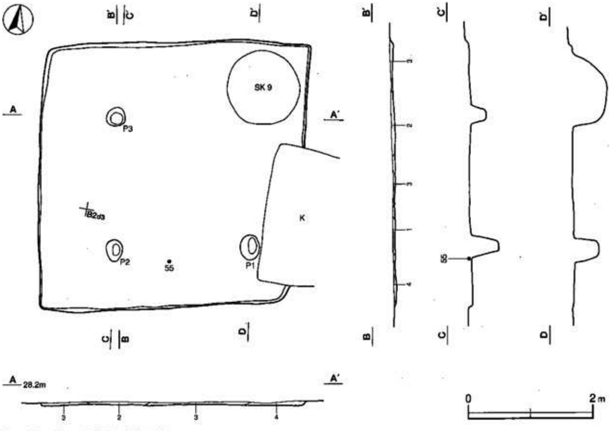
番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	胎土	特　　徴	出土位置	備考
DP７	球状土錘	2.2	2.0	0.3	9.65	長石・小礫	ヘラナデ後ナデ　中央部片面からの穿孔後ナデ調整	床面	PL19
DP８	球状土錘	2.5	2.3	0.4	12.9	長石・雲母	ヘラナデ　中央部両面からの穿孔	床面	PL19
DP９	球状土錘	2.6	2.1	0.4	11.9	長石・石英	ヘラナデ　中央部片面からの穿孔	床面	PL19
DP10	球状土錘	(2.0)	2.0	0.4	(9.60)	長石·石英·小礫	ナデ　指圧痕あり　中央部片面からの穿孔	床面	PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備考
M１	不明鉄製品	(2.8)	(0.9)	0.2	(1.44)	鉄	２面に木質遺存	覆土中	

第９号住居跡（第24・25図）

位置　調査区北西部のＢ２c3 区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第９号土坑に掘り込まれている。



第24図　第９号住居跡実測図

規模と形状　一辺が4.22mの方形で，主軸方向はN－11°－Wである。壁高は5～9㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

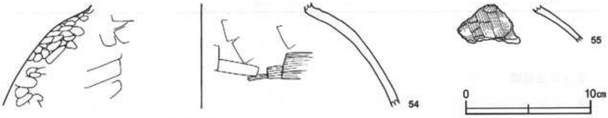
ピット　3か所。深さは25～42㎝で，位置と形状から主柱穴と考えられる。

覆土　4層からなる。薄いがレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　灰　褐　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片16点（甕）が出土している。すべて破片で，54は南東部の覆土中，55は南部の床面から出土している。

所見　時期は出土土器から前期後半（4世紀後半）と推定されるが，遺物が少ないため明確な時期区分は困難である。



第25図　第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
54	土師器	甕	－	(8.3)	－	石英・長石・小礫	明赤褐	普通	体部上半部外面ヘラナデ後ナデ　内面ハケ目　ヘラナデ	覆土中	5％未満
55	土師器	甕	－	(3.1)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目　内面ナデ	床面	5％未満

第10号住居跡（第26・27図）

位置　調査区北西部のB2c5区で，台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸3.64m，短軸3.24mの長方形で，主軸方向はN－5°－Eである。壁高は7～12㎝で，外傾して立ち上がっている。撹乱により，南部の壁は遺存しない。

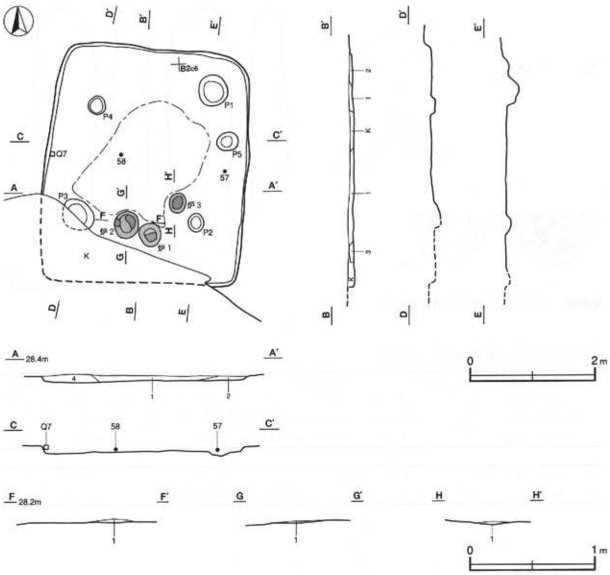
床　ほぼ平坦である。主柱穴の内側を中心に踏み固められている。

炉　3か所。炉1は長径36㎝，短径33㎝の円形，炉2は長径44㎝，短径39㎝の楕円形，炉3は長径31㎝，短径27㎝の楕円形で，いずれも掘り込みがほとんど見られない地床炉である。炉1，2は中央部より南側に，炉3は中央部よりやや東側に位置しており，ともに炉床は火熱により赤変硬化している。

炉1土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック少量

炉2土層解説
1　黒　褐　色　焼土粒子微量

炉3土層解説
1　灰　褐　色　焼土粒子微量



第26図　第10号住居跡実測図

ピット　5か所。P1～P4は深さ4～18cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ4cmで，炉と対峙し硬化面に接していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

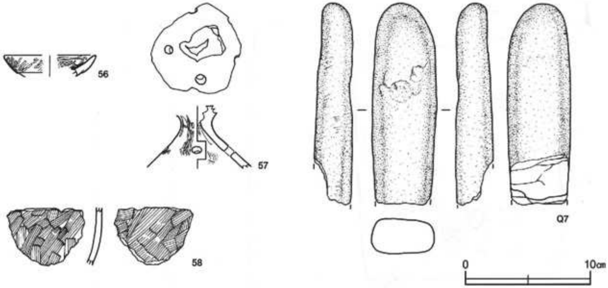
覆土　4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1	灰褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
2	灰褐色	ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片93点（器台3，坩3，高坏17，甕70），石器2点（磨石，砥石）が中央部の西側から東側にかけて散在した状態で出土している。56はP1の覆土中，57は東壁付近の床面，58は中央部付近の床面，Q7は西壁際の覆土上層から出土している。散在した遺物の状況から住居の廃絶直後に投棄された可能性がある。

所見　時期は，出土した土器から前期中葉（4世紀中葉）と考えられる。



第27図　第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
56	土師器	器台	[7.2]	(1.7)	−	石英・長石	橙	普通	器受部内外面ヘラ磨き後ナデ　外面折り返し痕	P１覆土中	10%
57	土師器	器台	−	(4.9)	−	石英・長石	にぶい橙	普通	脚部外面ヘラ磨き　透かし孔５　内面ヘラ状工具痕　ハケ目後ナデ	床面	40%
58	土師器	甕	−	(4.6)	−	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部内外面ハケ目調整	床面	５%未満

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Q７	磨石	(16.0)	5.0	3.0	(417)	安山岩	自然礫素材　裏表面側面に研磨痕あり	覆土上層	PL20

第11号住居跡（第28・29図）

位置　調査区北部のＢ２c7 区で，台地上の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸4.42m，短軸4.05mの方形で，主軸方向はＮ－８°－Ｅである。壁高は６～14cmで，緩やかに傾斜しながら立ち上がっている。

床　中央部と南西コーナー部が８～14cmほど緩やかなカーブを描いて高くなっている。主柱穴の内側に硬化した面がみられる。また，炉１の南側には焼土の塊が確認できた。

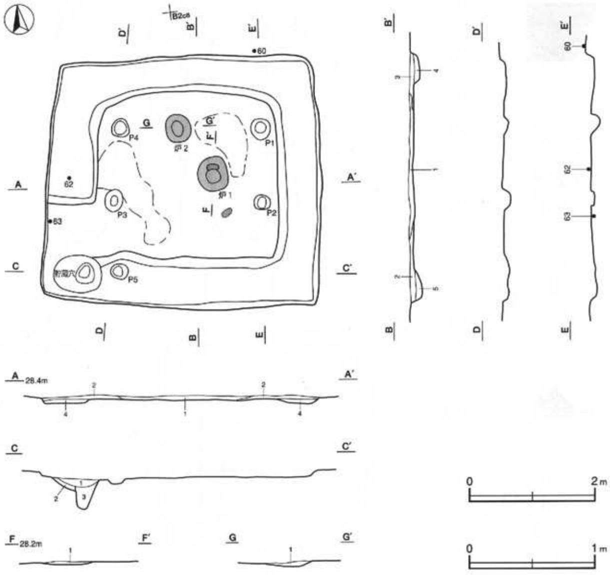
炉　２か所。炉１は長径54cm，短径47cmの楕円形で，床面を２cm皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉２は長径47cm，短径41cmの楕円形で，床面を４cm掘りくぼめた地床炉である。炉１は中央部よりやや東側に位置し，炉床は火熱により赤変硬化している。炉２は炉１のやや北側に位置し，炉床は火熱により赤変している。

炉１土層解説
１　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量

炉２土層解説
１　灰　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　５か所。P1～P4 は深さ７～13cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。P5 は深さ８cmで南側に位置し，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　１か所。南西コーナー部に位置し，長径75cm，短径60cmの楕円形で，深さは47cmである。底面は段を伴い東側がくぼんでいる。



第28図　第11号住居跡実測図

貯蔵穴土層解説

1　黒　　色　ローム粒子微量
2　灰 褐 色　ローム粒子少量
3　灰 褐 色　ロームブロック少量

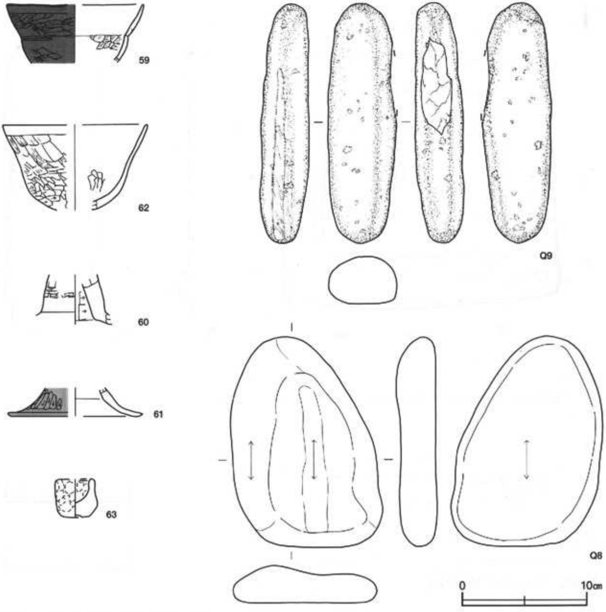
覆土　５層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　灰 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量・締まり普通
3　灰 褐 色　ローム粒子・炭化粒子微量・締まり強い
4　灰 褐 色　ロームブロック微量
5　黒 褐 色　ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片84点（坩４，高坏24，鉢８，甕47，手捏土器１），石器２点（磨石，砥石）が中央部から西部にかけて散在した状態で出土している。59・61は北西部の覆土中，62は西部の一段低い床面，63は西壁際の床面，Ｑ８・Ｑ９は，北東部の覆土下層から出土している。破片が多いことから廃絶直後に投棄された可能性が考えられる。また，60は北部の確認面で出土している。

所見　時期は，出土した土器から前期末（４世期末）と考えられる。第４号住居跡と同様に，主柱穴と壁の間が１段低く軟弱な床であることから，中央部の高まりと使い分けが考えられる住居跡である。



第29図　第11号住居跡出土遺物実測図

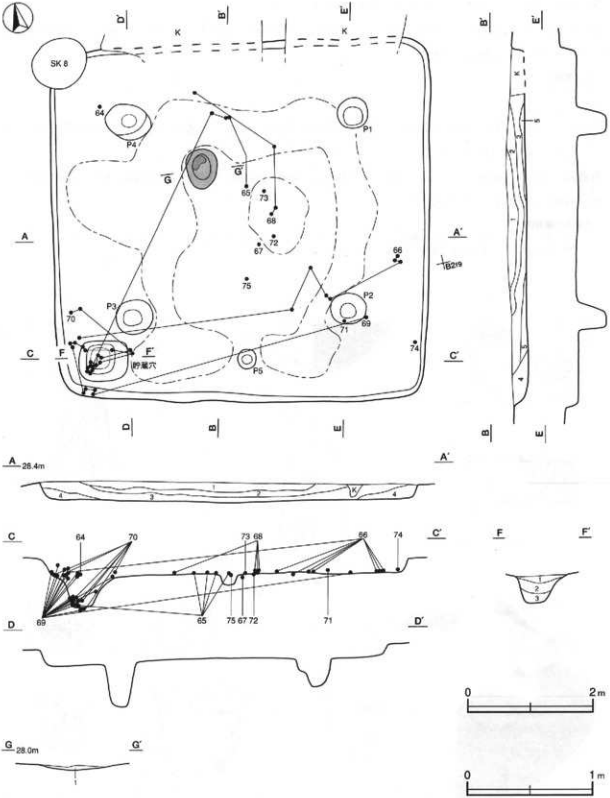
第11号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
59	土師器	坩	[10.7]	(4.6)	−	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ　口辺部～体部ヘラナデ　一部ハケ目 口縁部内面横ナデ　体部内面ハケ目後ナデ　煤付着	覆土中	15%
62	土師器	坩	[11.3]	(6.8)	−	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部内外面ナデ　口辺部～頸部外面ハケ目後ナデ 体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面縦方向のナデ	床面	20%
60	土師器	高坏	−	(4.0)	−	長石・赤色粒子	橙	普通	脚部外面縦方向にヘラ痕　内面横方向にヘラ削り	確認面	5％未満
61	土師器	高坏	−	(2.3)	[10.7]	石英・長石	橙	普通	脚部外面縦方向のヘラ削り後横ナデ　内面横ナデ　裾部外面横ナデ	覆土中	5％未満
63	土師器	手捏	[2.5]	3.1	2.3	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部内外面指圧痕　底部ナデ	床面	75%　PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Q 8	砥石	16.8	12.1	3.1	915	砂岩	3面を使用　特に表には1.5×13cm程度帯状に擦痕が残る	下層	PL20
Q 9	磨石	18.9	5.5	3.8	(622)	安山岩	縁端部に敲打痕　反対の縁端部に帯状の研磨痕	下層	PL20

第12号住居跡（第30～33図）

位置　調査区中央部のＢ２e8区で，台地上の平坦部に位置している。



第30図　第12号住居跡実測図

重複関係　第８号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸6.03m，短軸5.75mの方形で，主軸方向はN－12°－Eである。壁高は14～26㎝で，各壁とも外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，炉の周辺と主柱穴の内側が踏み固められている。

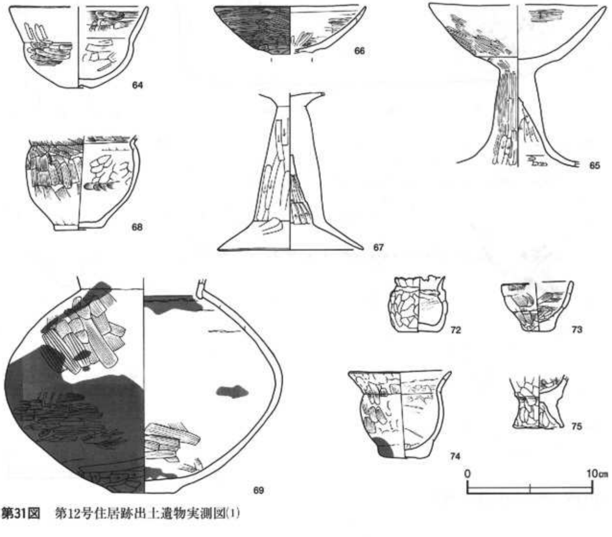
炉　１か所。中央部よりやや北側に位置し，長径63㎝，短径50㎝の楕円形で，床面を３㎝掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱により赤変している。

炉土層解説
１　黒　褐　色　焼土ブロック微量

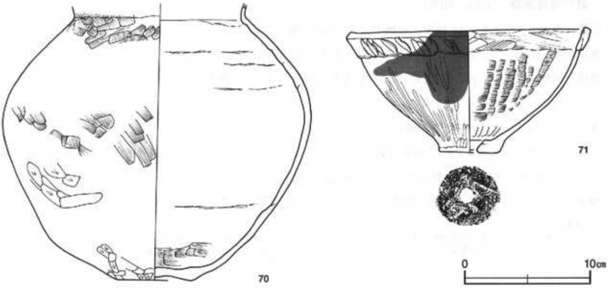
ピット　５か所。P１～P４は深さ45～70㎝で，位置と形状から主柱穴と考えられる。P５は深さ15㎝で，位置と形状から出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　１か所。南西コーナー部に位置し，長軸78㎝，短軸62㎝の長方形で深さは42㎝である。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説
１　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
２　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
３　黒　褐　色　ロームブロック微量



第31図　第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第32図　第12号住居跡出土遺物実測図(2)

覆土　5層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量，粘性弱い
2　黒　褐　色　ローム粒子微量，粘性普通
3　灰　褐　色　ロームブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片354点（坩14，高坏67，壺46，甕216，甑3，ミニチュア土器8）が覆土上層から床面にかけて出土している。67は中央部の床面，71はＰ２の直上から逆位で，72・73・75は中央部付近の床面，74は南東壁際の床面からそれぞれ出土している。65・66・68は，北部から南部にかけての床面に散在していた破片が接合したものである。また，69・70は南部の床面や貯蔵穴付近の覆土中層，貯蔵穴内の底面にかけて散在していた破片が接合したことから廃絶直後に投棄されたと考えられる。

所見　時期は，出土した土器から中期初頭（５世紀初頭）と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
64	土師器	坩	[10.8]	6.5	2.1	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口辺部外面ヘラナデ後ナデ　内面ハケ目後横ナデ　体部外面ハケ目　内面ヘラナデ	覆土中～中層	30%
65	土師器	高坏	[14.1]	(12.8)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	坏部～脚部外面磨き　坏部内面磨き　脚部内面ヘラ削り　裾部内外面ヘラ削り後ナデ	床面	50%
66	土師器	高坏	12.1	(3.8)	－	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口縁部内面ナデ　坏部内外面ヘラ磨き　内面輪積痕　坏底部外面ヘラ削り	覆土中～床面	40%
67	土師器	高坏	－	(12.4)	11.6	石英・長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	脚部内外面ヘラ削り　裾部内外面ナデ	床面	60%　PL14
69	土師器	壺	－	(17.0)	4.6	長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外面上半部ハケ目　中央部ハケ目後磨き　下半部ヘラ削り後ナデ　煤付着　内面ハケ目　輪積痕	中層	60%　PL16
68	土師器	小形甕	－	(7.4)	3.8	石英・長石・小礫	橙	普通	頸部～体部外面ハケ目　頸部内面ハケ目　体部内面ヘラナデ　ハケ目　輪積痕	床面	60%　PL15
70	土師器	甕	－	(21.9)	6.1	石英・長石・小礫	橙	普通	体部外面上半部ハケ目　下半部ヘラ削り後ヘラナデ　内面下半部ハケ目痕　内面ナデ　輪積痕	下層	50%
71	土師器	甑	18.8	9.9	4.7	石英・長石・雲母・小礫	橙	普通	口辺部外面ヘラ状工具の押圧痕　体部外面ヘラ磨き　煤付着　内面ハケ目調整　下半部ヘラナデ　底部1孔	Ｐ２直上	60%　PL15
72	土師器	ミニチュア	4.0	4.4	3.1	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面ヘラナデ後ナデ　体部内外面ヘラナデ後ナデ調整	床面	95%　PL12
73	土師器	ミニチュア	[5.7]	4.0	2.4	石英・長石・小礫	橙	普通	内外面ハケ目後ナデ　外面輪積痕	床面	70%　PL12
74	土師器	ミニチュア	8.0	7.0	3.9	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口辺部外面ナデ　指圧痕　内面ヘラナデ後ナデ　体部外面ハケ目後ナデ　煤付着　内面ナデ　輪積痕	床面	70%　PL12
75	土師器	ミニチュア	－	(4.2)	4.1	石英・長石	にぶい黄橙	普通	体部～脚部外面ヘラナデ後ナデ　内面ハケ目後ナデ　脚部内面ヘラナデ	床面	25%

第13号住居跡（第33・34図）

位置　調査区北部のＢ２a0区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第34号土坑を掘り込み，第５号墳と第６号墳に掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.82ｍ，短軸は5.35ｍの長方形と推測される。主軸方向はＮ－30°－Ｅである。壁高は３～８㎝で外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

ピット　５か所。深さはＰ１・２は推定値で13～15㎝，Ｐ３・４は13～25㎝で，位置と形状から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ８㎝で，南側に位置しており出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　４層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

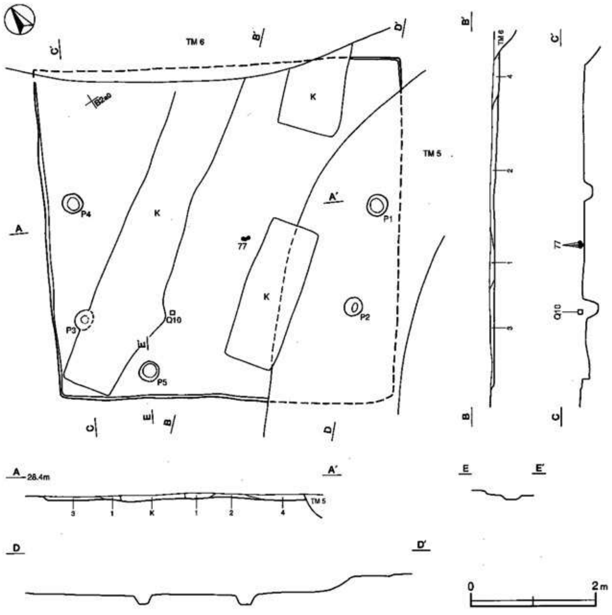
土層解説

１　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

２　灰　褐　色　ローム粒子少量

３　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

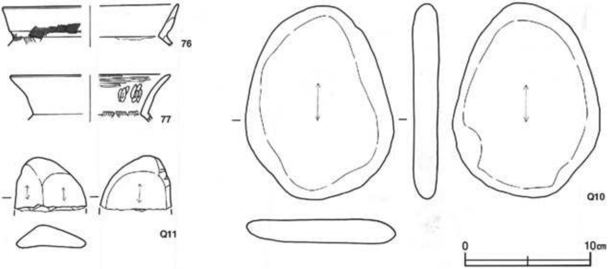
４　黒　褐　色　ローム粒子少量



第33図　第13号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片48点（甕），石器２点（砥石）が中央部を中心に覆土上層から床面にかけて出土している。76は覆土中，77は中央部の覆土下層から床面にかけて，Ｑ10は南西部の覆土中層，Ｑ11は北東部の覆土中から出土している。

所見　出土土器から前期後半（４世紀後半）と推定されるが，細片のため明確な時期区分は困難である。



第34図　第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	土師器	甕	[14.0]	(3.3)	－	石英・長石・赤色粒子	黄橙	普通	有段口縁　頸部外面ハケ目痕　煤付着　内面輪積痕　摩滅により調整不明	覆土中	５％未満
77	土師器	甕	[12.6]	(3.8)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口辺部外面摩滅により調整不明　内面ヘラ磨き　ヘラ削り　頸部にハケ目痕	下層～床面	５％未満

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Q10	砥石	15.4	11.7	2.1	576	砂岩	両面に研磨痕	中層	PL20
Q11	砥石	(4.4)	5.7	1.8	(52)	砂岩	自然礫素材　砥面３面	覆土中	

第14号住居跡（第35図）

位置　調査区北東部のＢ２e9区で，台地上の平坦部に位置している。

確認状況　削平されており，検出されたときは床面が露出していた。

規模と形状　全体の規模は不明である。ピットや残存している床面の状況から一辺が約５ｍの方形と考えられる。主軸方向はＮ－19°－Ｅである。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

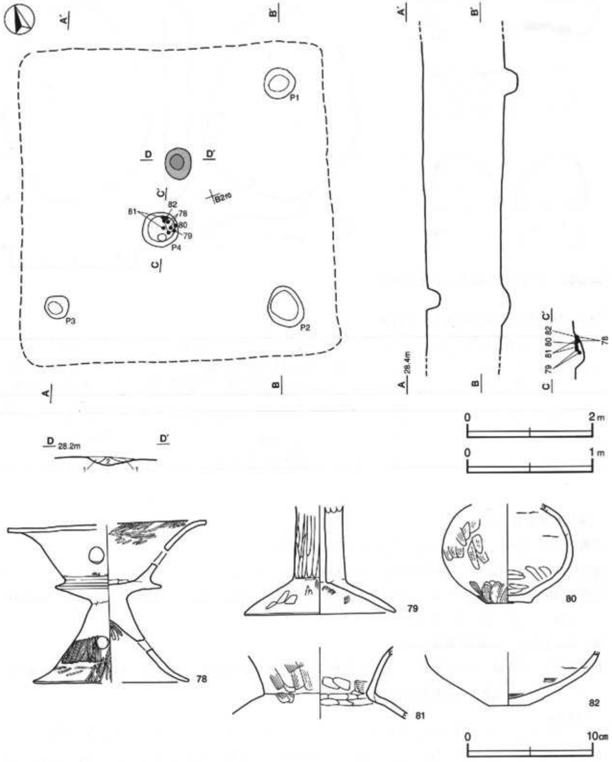
炉　１か所。中央部よりやや北側に位置し，長径50cm，短径41cmの楕円形で，床面を５cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は，火熱による赤変がみられる。

炉土層解説
１　灰 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量　　　２　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ11～21cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。Ｐ４は深さ15cmで，ほぼ中央部に位置しているが性格は不明である。

遺物出土状況　土師器片86点（器台２，高坏36，壺７，甕41）が中央部の床面から出土している。78～82は，P４の覆土上層から中層にかけて集中して出土している。いずれも破片であり，廃絶直後に廃棄したものと考えられる。

所見　時期は，出土した土器から前期中葉（４世紀中葉）と考えられる。



第35図　第14号住居跡・出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表（第35図）

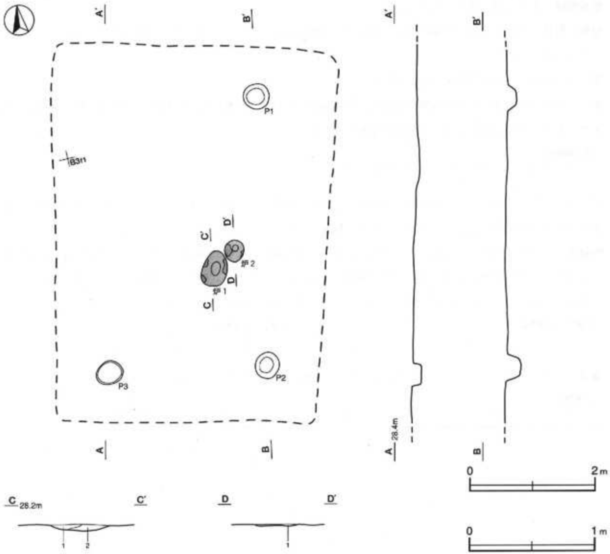
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
78	土師器	器台	[15.7]	12.8	[12.4]	石英・長石・雲母・小礫	明赤褐	良好	口縁部内面ヘラ磨き後ナデ　器受部ナデ　3孔 脚部外面ハケ目後磨き　内面ヘラ削り後ナデ	P4上層～中層	70%　PL14
79	土師器	器台	－	(8.7)	12.1	雲母・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラ削り　内面中空　裾部外面ヘラ痕 内面ハケ目痕	P4上層～中層	30%
80	土師器	小形壺	－	(7.9)	3.5	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目一部ナデ消し　内面ヘラナデ痕 輪積痕	P4上層～中層	30%
81	土師器	壺	－	(5.7)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい褐	普通	口辺部～頸部外面ハケ目　輪積痕　内面ハケ目 後ヘラナデ	P4上層～中層	10%
82	土師器	壺	－	(4.3)	3.0	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	底部外面摩滅により調整不明　内面輪積痕 ハケ目痕	P4上層～中層	10%

第15号住居跡（第36図）

位置　調査区北東部のＢ３ｆ１区で，台地上の平坦部に位置している。

確認状況　削平されており，検出されたときは床面が露出していた。

規模と形状　全体の規模は不明である。ピット，残存している床面の状況から長軸約６ｍ，短軸約4.3ｍの長方形と推測される。主軸方向はＮ－13°－Ｅである。



第36図　第15号住居跡実測図

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

炉　2か所。炉1は長径55cm，短径39cmの楕円形で，地面を5cm掘り込んだ地床炉である。炉2は長径35cm，短径30cmの楕円形で，掘り込みのない地床炉である。炉1は中央部に位置し，炉床は火熱により赤変硬化している。炉2は炉1の北東に位置し，炉床は火熱により赤変している。

炉1土層解説
1　灰　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　焼土ブロック少量，炭化粒子微量

炉2土層解説
1　灰　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量

ピット　3か所。深さは13〜23cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。

所見　出土遺物がなく時期の判断は困難であるが，第14号住居跡と近接しており主軸方向や主柱穴の配置や大きさなどに共通点が見られることから，ほぼ同時期の前期中葉（4世紀中葉）と考えられる。また，炉2は炉1に近接しており，規模が小さく炉床の状況からも補助的な役割を果たした炉と考えられる。

第16号住居跡（第37〜39図）

位置　調査区北東部のA3j4区で，台地上の平坦部に位置している。

重複関係　第6号墳に掘り込まれている。

規模と形状　長軸6.45m，短軸6.34mの方形で，主軸方向はN−127°−Wである。壁高は20〜25cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，北西部が踏み固められている。

炉　1か所。中央部よりやや南側に位置し，長径36cm，短径32cmの楕円形で，地面を2cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱によりわずかに赤変している。

炉土層解説
1　褐　　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・赤色粒子微量

ピット　5か所。P1〜P4は深さ47〜56cmで，位置と形状から主柱穴と考えられる。P5は深さ45cmで，位置と形状から出入口施設に伴うピットと考えられる。

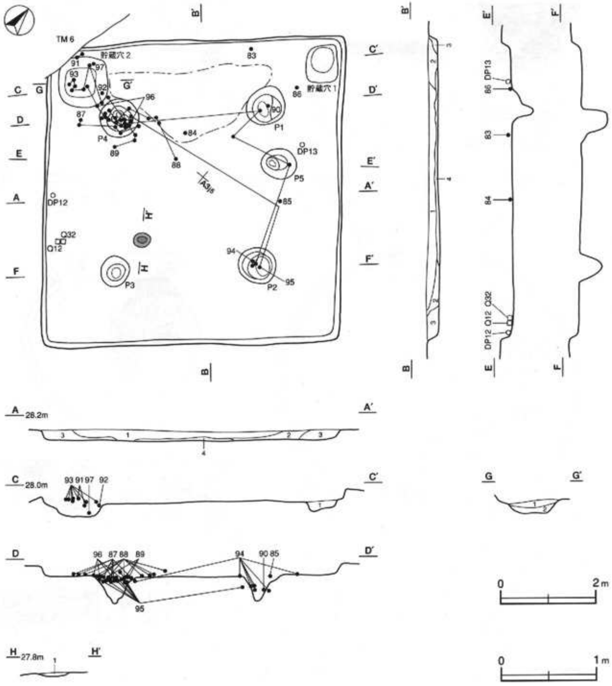
貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は北コーナー部に位置し，長軸80cm，短軸65cmの長方形で，深さは22cmである。底面は平坦であるが西側に段差があり，壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は西コーナー部に位置し，一辺108cmの方形で，深さは25cmである。底面はほぼ平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴1土層解説
1　黒　　　色　ロームブロック微量

貯蔵穴2土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量

覆土　4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

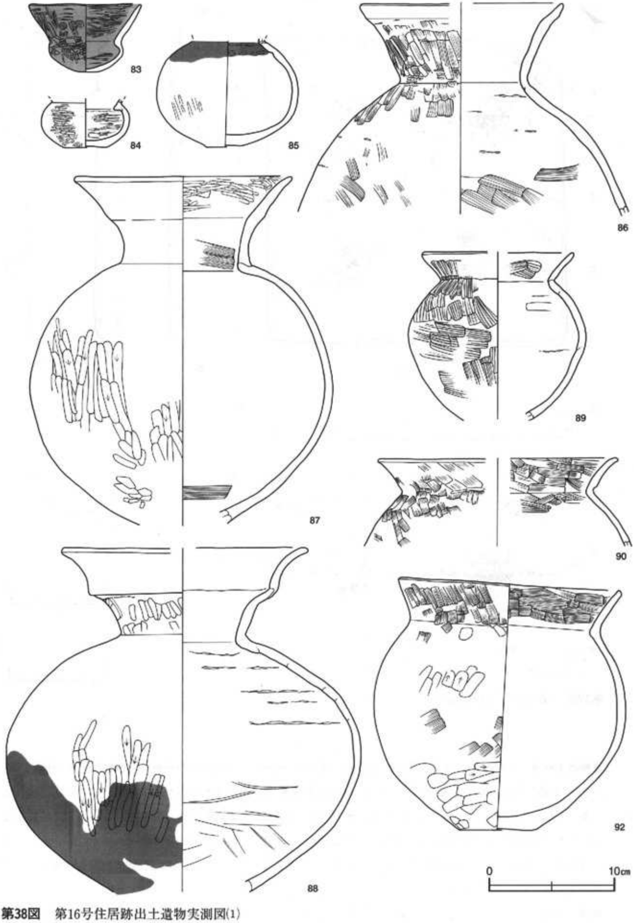
土層解説
1　黒　　　色　赤色粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・赤色粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量



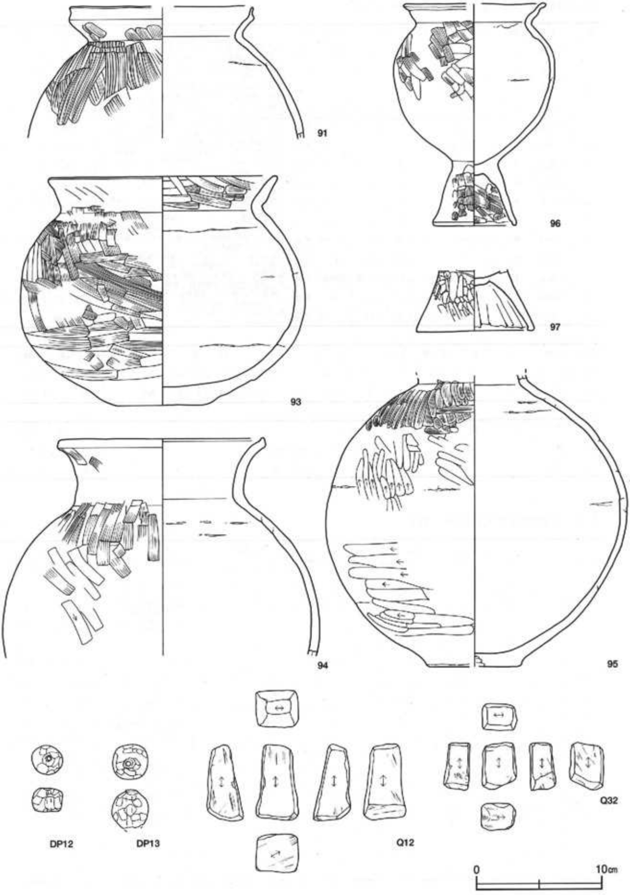
第37図　第16号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片1,130点（坩52，高坏35，壺139，甕904），石器２点（砥石），土製品２点（球状土錘）がＰ4，貯蔵穴２から集中して出土している。83は完形品で北壁際の覆土下層から正位で，92・93は貯蔵穴２の覆土上層から出土している。87・88・96はＰ4の覆土上層やその周辺の床面，覆土中から出土した破片が接合したものである。Q12は南壁際，DP12・DP13は南壁際とＰ5付近の床面からそれぞれ出土している。ピット内覆土中から出土した土師器甕片が床面から出土した破片と接合したことから，住居廃絶直後に廃棄したものが流れ込んだと考えられる。

所見　時期は，出土した土器から前期後半（４世紀後半）と考えられる。



第38図　第16号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図　第16号住居跡出土遺物実測図(2)

第16号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
83	土師器	坩	8.7	5.4	–	長石・雲母	赤褐	良好	口辺部内外面細かい磨き　外面ハケ目痕　体部外面ハケ目後磨き　ヘラ痕　内面細かい磨き	下層	100% PL13
84	土師器	坩	–	(3.9)	3.2	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面細かい磨き　内面細かい線状の磨き　ヘラナデ痕	床面	60%
85	土師器	坩	–	(8.5)	2.9	石英・長石・雲母	橙	普通	頸部内外面煤付着　体部外面磨き　体部内面指圧痕　輪積痕　摩滅により調整不明	床面	60%
86	土師器	壺	[16.3]	(16.9)	–	石英・長石・小礫	橙	普通	口縁部内外面ナデ　口辺部～体部外面ハケ目　輪積痕　内面ハケ目後ナデ　輪積痕	床面	40%
87	土師器	壺	17.0	(27.6)	–	石英・長石・小礫	橙	普通	有段口縁部外面ナデ内面磨き　頸部外面ナデ内面ハケ目　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面ハケ目痕	P4上層～床面	70%　PL16
88	土師器	壺	19.3	(27.4)	–	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	有段口縁部内外面ナデ　頸部外面ヘラナデ　内面ナデ　体部外面ヘラ削り　煤付着　内面ヘラナデ　輪積痕	P4上層～床面	60%　PL16
89	土師器	甕	[11.9]	(13.3)	–	石英・長石・小礫	にぶい赤褐	普通	口辺部内外面ハケ目　体部外面ハケ目　内面ヘラナデ　輪積痕	P4上層	30%
90	土師器	甕	[19.0]	(7.0)	–	石英・長石	橙	普通	口辺部内外面ハケ目後一部ナデ　頸部～体部内外面ハケ目	P1中層	5%未満
91	土師器	甕	[14.5]	(10.5)	–	小礫・石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ　頸部～体部外面ハケ目調整　体部内面輪積痕　摩滅により調整不明	貯蔵穴上層～下層	25%　PL17
92	土師器	甕	17.3	20.2	6.2	石英・長石	灰褐	普通	口縁部外面縦方向にハケ目　内面横方向にハケ目調整　体部外面ハケ目後ヘラナデ　内面摩滅調整不明	貯蔵穴上層	95%　PL17
93	土師器	甕	18.2	18.3	7.4	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口辺部～頸部内外面ハケ目後ヘラナデ　体部外面ハケ目　内面輪積痕	貯蔵穴上層	85%　PL17
94	土師器	甕	16.0	(17.4)	–	石英・長石	橙	普通	口縁部外面ハケ目　内面ナデ　頸部～体部外面ハケ目後ヘラナデ　内面輪積痕　摩滅により調整不明	床面～P3中層	30%
95	土師器	甕	–	(23.2)	[7.5]	長石・雲母・小礫	明赤褐	普通	頸部外面ハケ目後ナデ　体部外面ヘラ削り　輪積痕　頸部～体部内面輪積痕　摩滅により調整不明	P2中層～P4上層	70%
96	土師器	台付甕	[11.2]	17.7	6.5	石英・長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面ハケ目調整後ヘラナデ　内面輪積痕　脚台部内外面ハケ目調整後ナデ	P4上層～床面	70%　PL14
97	土師器	台付甕	–	(4.9)	9.3	石英・長石	にぶい赤褐	普通	脚部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面横方向にヘラナデ痕	貯蔵穴下層	10%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP12	球状土錘	1.9	2.4	0.4	22.0	石英・長石・小礫	ナデ　中央部片面からの穿孔後ナデ調整	床面	PL19
DP13	球状土錘	(3.1)	2.7	0.5	(9.8)	長石・雲母	ナデ　中央部片面からの穿孔後ナデ調整	床面	PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	砥石	6.1	3.4	2.9	42.0	トロトロ石	砥面6面	床面	PL20
Q32	砥石	3.7	2.7	2.1	18.0	トロトロ石	砥面6面	床面	PL20

表3　古墳時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）（長軸×短軸）	壁高（cm）	床面	内部施設					覆土	出土遺物	備考（時期）	新旧関係（旧→新）
							主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴	炉				
1	B2g5	N－19°－W	方形	5.58×5.46	7～22	平坦	4	–		1	3	自然	土師器　管玉	5世紀初頭	
2	B2j3	N－27°－E	方形	3.58×3.44	13～18	平坦	4	1	–	2	1	自然	土師器　管玉　球状土錘	4世紀後半	本跡→SK35
3	C2a5	N－25°－E	長方形	(8.22)×6.88	9～15	平坦	5	1	–	–	2	自然	土師器　未完の紡錘車	4世紀末	本跡→TM1
4	C2b8	N－32°－E	方形	5.80×5.44	18～24	平坦	4	1	–	2	2	自然	土師器　球状土錘	4世紀末	本跡→TM2
5	B2j6	N－7°－E	長方形	3.57×2.95	5～15	平坦	4	1	–	–	2	自然	土師器	5世紀初頭	SI7→本跡
6	B2h7	N－2°－E	長方形	4.28×3.90	–	平坦	3	1	–	–	2	不明	土師器　球状土錘	4世紀末	SI7→本跡
7	B2i7	[N－8°－E]	[方形]	[8.44×8.38]	–	平坦	4	–	–	–	2	不明	土師器　敲石	4世紀中葉	本跡→SI5・6, TM2
8	B2a4	N－4°－E	方形	6.50×6.35	13～20	平坦	4	1	–	1	1	自然	土師器　球状土錘　不明鉄製品	4世紀末	
9	B2c3	N－11°－W	方形	4.22×4.22	5～9	平坦	3	–	–	–	–	自然	土師器	4世紀後半	本跡→SK9
10	B2c5	N－5°－E	長方形	3.64×3.24	7～12	平坦	4	1	–	–	3	自然	土師器　砥石　磨石	4世紀中葉	
11	B2c7	N－8°－E	方形	4.42×4.05	6～14	平坦	4	1	–	1	2	自然	土師器　砥石　磨石	4世紀末	
12	B2e8	N－12°－E	方形	6.03×5.75	14～26	平坦	4	1	–	1	1	自然	土師器	5世紀初頭	本跡→SK8
13	B2a0	N－30°－E	長方形	5.82×[5.35]	3～8	平坦	4	1	–	–	–	自然	土師器　砥石	4世紀後半	SK34→本跡→TM5・6
14	B2e9	[N－19°－E]	[方形]	[5.00×5.00]	–	平坦	3	–	1	–	1	不明	土師器	4世紀中葉	
15	B3f1	[N－13°－E]	[長方形]	[6.02×4.33]	–	平坦	3	–	–	–	2	不明		4世紀中葉	
16	A3j4	N－127°－W	方形	6.45×6.34	20～25	平坦	4	1	–	2	1	自然	土師器　砥石　球状土錘	4世紀後半	本跡→TM6

(2) 古墳

調査前には，墳丘の高まり等は確認できなかったが，遺構確認作業時に古墳８基の周溝が確認された。これらは調査区の南北に広がり，古墳群を呈している。以下，それぞれの遺構と出土遺物について記述する。

第１号墳（第40～42図）

位置　調査区南部のＣ１～Ｄ２区で，標高27.7mの台地平坦部から端部に位置している。

確認状況　これまで周知されていなかったが，表土除去後に周溝が確認された。周溝の西部は，調査区域外に延びている。

重複関係　周溝が第３号住居跡を掘り込み，第１号塚，第２号土坑に掘り込まれている。

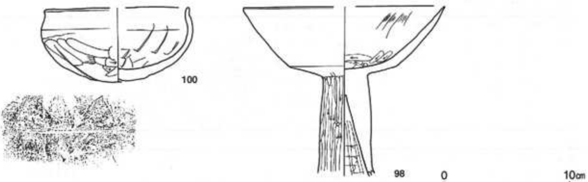
規模と形状　周溝を含む長径40.4m，短径38.0mの円墳と考えられる。主軸方向はＮ－45°－Ｗである。

周溝　南部は14mにわたって周溝が途切れ，平面形はアルファベットの「Ｃ」字形をしている。北部から東部は，上幅3.5～6.2m，下幅1.9～4.4m，深さ39～72cmである。南部から西部は，上幅4.3～5.5m，下幅3.2～4.5m，深さ29～50cmである。壁はいずれも緩やかに外傾しながら立ち上がり，断面形はＵ字状を呈している。また，北部，東部，西部には土橋状の高まりがみられる。覆土は，黒色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。第２層は旧表土である。

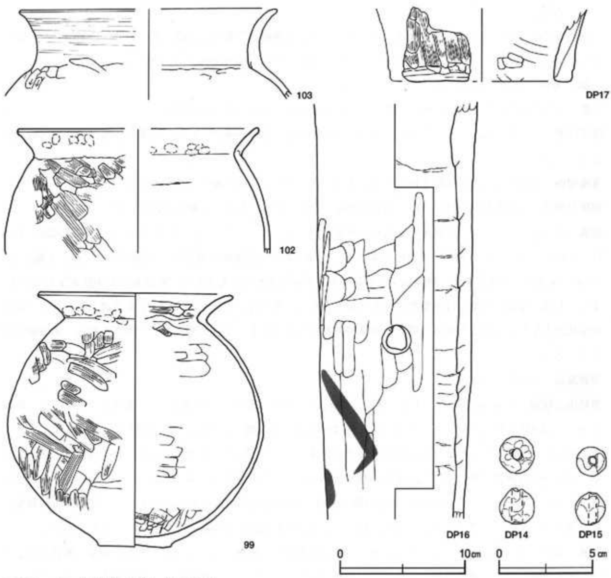
埋葬施設　確認されなかった。

遺物出土状況　土師器片644点（坏９，坩５，高坏286，壺８，甕335，台付甕１），土製品52点（土玉２，埴輪片50）が周溝内を中心に出土している。98・99は中央部より南側（Ｃ２i４区）の旧表土上層から出土している。99は逆位の底部片にその体部を横位に被せた状態で出土していることから，遺棄された可能性が考えられる。100・102は西部の覆土下層と北東部の覆土下層から出土した破片が，接合したものである。103は西部の覆土下層から出土している。DP16は北部の覆土下層，DP17は西部の覆土中層から出土しており，古墳構築以降に流れ込んだものと考えられる。また，DP14・DP15は北東部及び西部の覆土上層から出土している。

所見　遺物の多くが混入と考えられるため，明確な時期区分は困難であるが，出土土器や埴輪の脚部及び主体部が地山を掘り込んで構築されていることが認められないことから，中期後半（５世紀後半）と考えられる。また，周溝が巡っていない南部には，造出し部があった可能性も考えられる。



第40図　第１号墳出土遺物実測図(1)



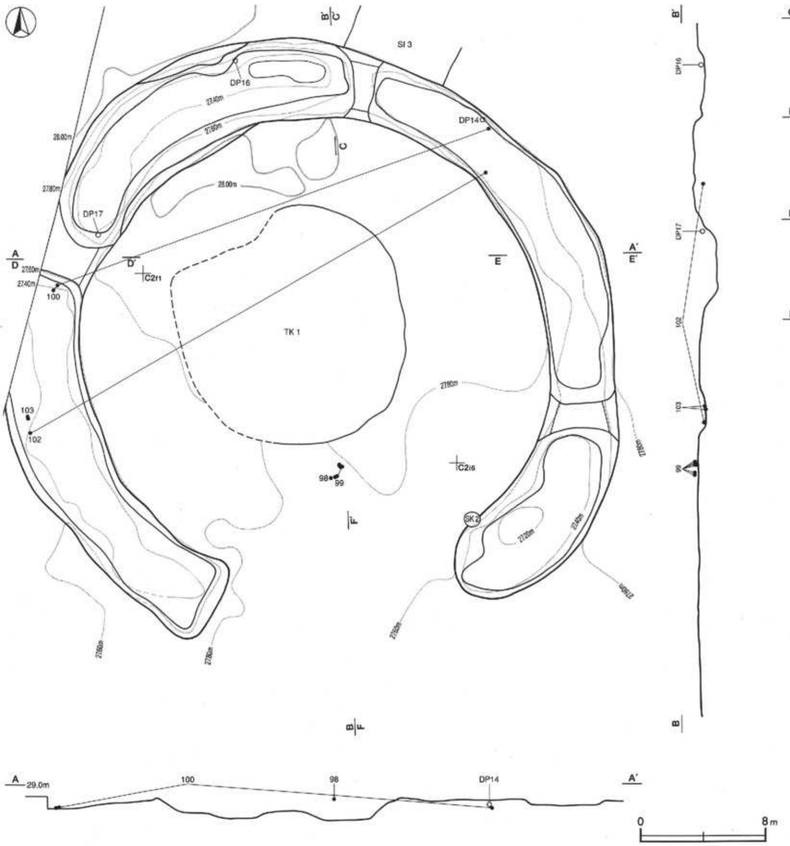
第41図　第１号墳出土遺物実測図(2)

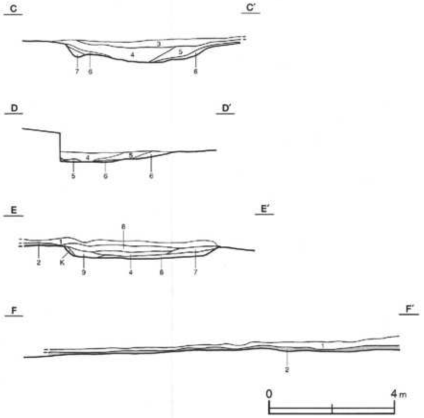
第１号墳出土遺物観察表（第40・41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
100	土師器	坏	[11.4]	5.8	－	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口縁部内外横ナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　一部ハケ目　内面ヘラナデ　底部ヘラ記号	周溝西部～北東部下層	70%　PL11
98	土師器	高坏	[15.8]	(13.4)	－	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部外面摩滅により調整不明　内面削り後ナデ　ハケ目痕　脚部外面ヘラ削り　内面縦横方向にヘラナデ	南部旧表土	30%
99	土師器	甕	14.9	20.2	5.7	石英・長石・小礫	にぶい赤褐	普通	頸部外面指圧痕　内面ハケ目後ナデ　体部外面ハケ目後一部ナデ　内面ナデ　ハケ目痕	南部旧表土	50%
102	土師器	甕	[19.0]	(9.9)	－	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	口辺部内外面ナデ　指圧痕　頸部外面輪積痕　体部外面ハケ目　内面ナデ　輪積痕	周溝北東部下層	5％未満
103	土師器	甕	[20.0]	(7.2)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内外面強い横ナデ　頸部外面ヘラ削り後ナデ　内面輪積痕	周溝西部下層	5％未満

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特　徴	出土位置	備考
DP14	土玉	1.9	1.8	0.55	5.6	長石・小礫	ヘラナデ　中央部片面からの穿孔	周溝北東部上層	PL19
DP15	土玉	1.7	1.6	0.3	3.4	雲母・小礫	ヘラナデ　中央部片面からの穿孔	周溝西部上層	PL19

番号	器種	幅	器高	底径	胎土	色調	焼成	特　徴	出土位置	備考
DP16	埴輪	(33.1)	－	－	石英・長石・小礫・赤色粒子	橙	普通	外面ヘラ削り後ナデ　内面輪積痕　透かし孔1　煤付着	周溝北部下層	PL18
DP17	埴輪	(16.7)	(5.8)	[14.2]	石英・長石・小礫	橙	普通	基部外面ハケ目調整　内面ヘラナデ	周溝西部中層	PL18





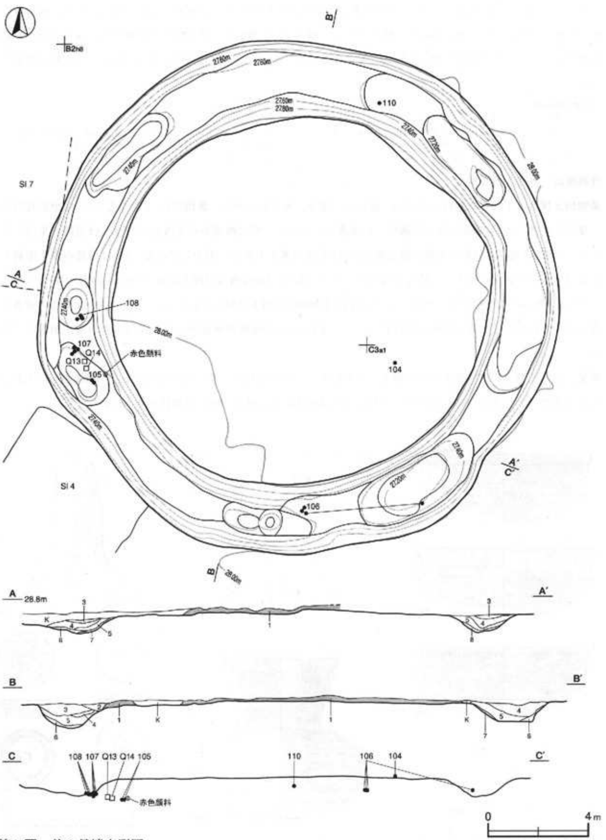
周溝土層解説

1	黒　　色	ローム粒子微量
2	灰　褐　色	ローム粒子微量
3	黒　　色	ロームブロック・砂粒微量
4	黒　　色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	黒　　色	鉄分粒子少量，ローム粒子・炭化粒子・赤色粒子微量
6	黒　褐　色	ローム粒子・黒色土粒子微量
7	黒　　色	鉄分粒子中量，ローム粒子微量
8	灰　褐　色	ロームブロック中量，焼土ブロック微量
9	灰　褐　色	ロームブロック中量

第42図　第１号墳実測図

第２号墳（第43・44図）

位置　調査区中央部のＢ２～Ｃ３区で，標高28.0mの台地平坦部に位置している。



第43図　第２号墳実測図

重複関係　周溝が第４・７号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　周溝を含む長径20.6m，短径20.3mの円墳である。

周溝　北部から東部は，上幅2.3～3.4m，下幅1.0～1.7m，深さ68～100cmである。南部から西部は，上幅2.3～3.1m，下幅0.8～1.9m，深さ53～95cmである。壁はいずれも緩やかに外傾しながら立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。底部は凸凹が確認できる。覆土は，黒褐色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。第１層は旧表土である。

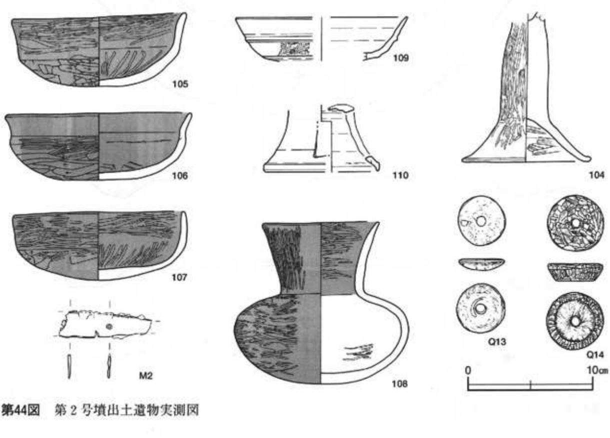
周溝土層解説

1　灰　褐　色	ローム粒子少量	5　黒　褐　色	ロームブロック少量
2　黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6　灰　褐　色	粘土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　　　色	ロームブロック微量	7　灰　褐　色	粘土ブロック中量，ローム粒子少量
4　黒　褐　色	ローム粒子少量	8　褐　　　色	ローム粒子・砂粒・粘土粒子微量

埋葬施設　確認されなかった。

遺物出土状況　土師器片597点（坏159，器台１，坩30，高坏48，壺４，甕類354，手捏土器１），須恵器片32点（甕27，高坏５），石製品２点（紡錘車）が周溝から出土し，特に西部から南西部にかけては遺物が集中している。104は中央部よりやや南側の確認面，110は北部の覆土上層から出土している。106は南部の覆土中層と南東部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。108は西部の覆土中層，109は北西部の覆土中，105・107は南西部の覆土中層及び下層，Q13・Q14は南西部の覆土下層から出土している。M２は南部の周溝の覆土中から出土しているが遺存状態は良くない。また，105の東側の底面からは，赤色顔料の塊が出土している。

所見　出土土器や古墳の状況から中期末（５世紀末）と考えられる。赤色顔料については，周溝内から赤彩された坏や坩などが出土しているため，これらの土器の赤彩等に使用された可能性が考えられる。



第44図　第２号墳出土遺物実測図

第２号墳出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
105	土師器	坏	13.6	5.9	－	長石・雲母	赤褐	良好	口辺部内外面横方向の磨き　体部～底部外面ヘラ削り　ヘラナデ　内面放射状の磨き	周溝南西部中層	95%　PL11
106	土師器	坏	14.5	5.3	5.2	長石	赤	良好	口辺部内外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　底部外面ヘラナデ　内面ヘラナデ後ナデ　輪積痕	周溝南部～南東部中層	90%　PL11
107	土師器	坏	13.3	5.4	－	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	良好	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　底部外面ヘラナデ　内面放射状の磨き	周溝南西部下層	80%　PL11
108	土師器	坩	9.2	13.0	－	長石	赤	普通	口辺部外面縦方向のヘラ磨き　内面横方向のヘラ磨き　体部内外面横方向のヘラ磨き	周溝西部中層	85%　PL13
104	土師器	高坏	－	(11.9)	10.3	長石・雲母	橙	普通	脚部外面磨き　裾部外面磨き　内面横方向にハケ目後ナデ	中央部確認面	30%
109	須恵器	高坏	[13.6]	(3.4)	－	長石	灰	良好	坏部外面ロクロナデ　波状文	周溝北西部覆土中	5%未満 PL18
110	須恵器	高坏	－	(5.3)	[8.8]	長石・黒色粒子	灰	良好	脚部外面ロクロナデ　内面ナデ　輪積痕　４本スリットの可能性あり	周溝北部上層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Q13	紡錘車	3.9	0.9	0.8	18.6	滑石	円錐台形　上下面に繊細な線刻　側面に工具による調整痕	周溝南西部下層	PL20
Q14	紡錘車	4.4	1.3	0.8	42.5	滑石	円錐台形　上面に繊細な放射状の線刻　側面に工具による調整痕	周溝南西部下層	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備考
M２	小刀ヵ	(7.4)	(2.1)	0.2	(10.15)	鉄	刃部の破損　刃先及び茎部欠損	周溝南部覆土中	PL18

第３号墳（第45図）

位置　調査区西部のＢ３～Ｃ３区で，標高28.0mの台地平坦部に位置している。

確認状況　これまで周知されていなかったが表土除去後，周溝が確認された。北東部は調査区域外に延びている。

重複関係　周溝が第36号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　周溝を含む径約14.1mの円墳と推定される。主軸方向は不明である。

周溝　北東部は確認できないが，全周していたと予想される。南西部は上幅1.3～1.9m，下幅0.5～1.0m，深さ42～66cmで，壁は外傾しながら緩やかに立ち上がり，断面形はＵ字状を呈している。覆土は黒色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。

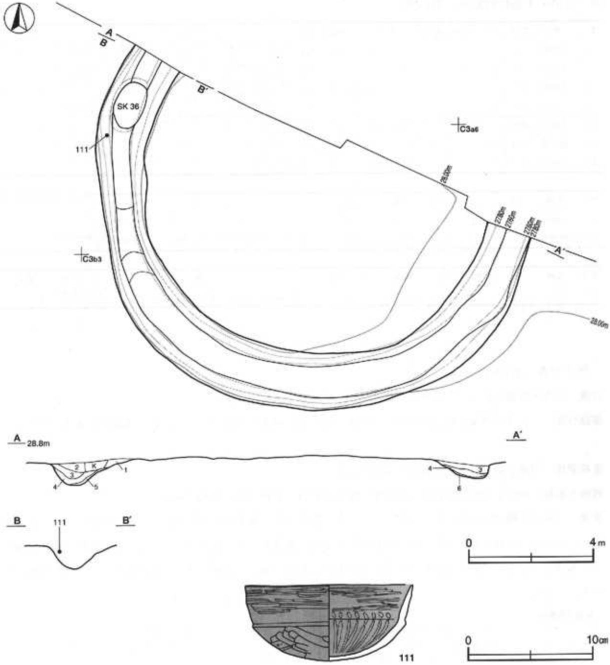
周溝土層解説

１	黒　　色	ローム粒子・炭化粒子微量，締まり普通	
２	灰 褐 色	ローム粒子・炭化粒子微量，締まり弱い	
３	黒　　色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	
４	黒　　色	ローム粒子少量	
５	黒　　色	ローム粒子少量，粘土ブロック微量	
６	黒　　色	ロームブロック少量	

埋葬施設　確認されなかった。

遺物出土状況　土師器片242点（坏３，坩１，高坏84，甕類154），須恵器片１点（甕）が周溝から出土している。111は西部の覆土中層から割れた状態で出土した破片が接合したものである。

所見　出土土器や古墳の形状から後期初頭（６世紀初頭）と考えられる。



第45図　第３号墳・出土遺物実測図

第３号墳出土遺物観察表（第45図）

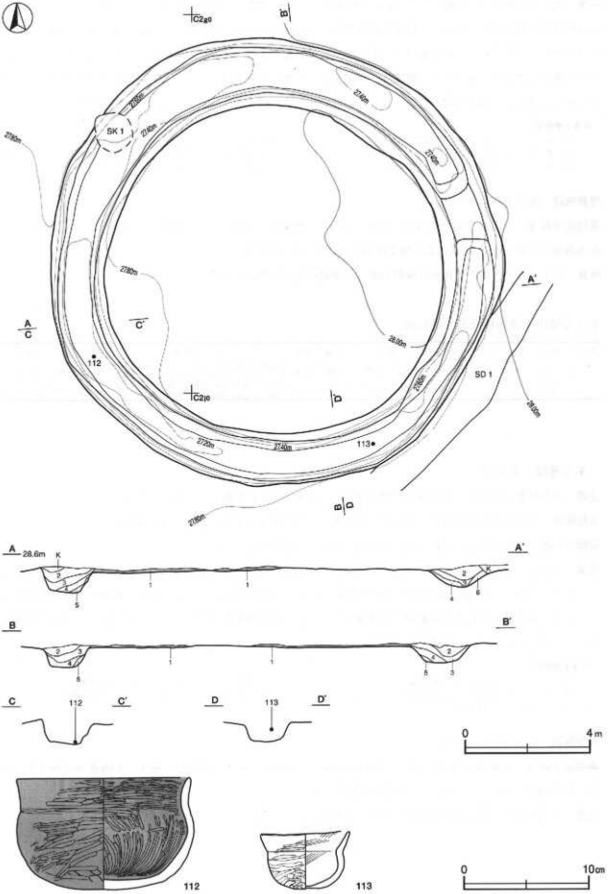
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
111	土師器	坏	13.3	6.0	－	雲母・赤色粒子	橙	良好	口辺部内外面横方向のヘラ磨き　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　体部内面放射状のヘラ磨き	周溝西部中層	90%　PL11

第４号墳（第46図）

位置　調査区南部のＣ２～Ｃ３区で，標高27.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係　周溝が第１号土坑，第１号溝に掘り込まれている。

規模と形状　周溝を含む長径14.6m，短径約14.4mの円墳である。



第46図　第４号墳・出土遺物実測図

周溝 北部から東部は，上幅1.7～2.2m，下幅0.6～1.4m，深さ52～59cmである。壁は外傾して立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。南部から西部は，上幅1.6～2.2m，下幅0.6～1.1m，深さ64～80cmである。壁は外傾して立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。また，東部には幅1.0～1.1m，長さ1.4～1.8mほどの土橋状の高まりがみられる。覆土は，黒褐色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘上と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。第1層は旧表土である。

周溝土層解説

1 灰褐色 ローム粒子少量，しまり普通
2 黒褐色 ローム粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
4 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
5 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・砂粒・粘土粒子微量
6 灰褐色 ローム粒子少量，しまり弱い

埋葬施設 確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片64点（坏23，坩8，高坏12，甕類20，台付甕1）が周溝から出土している。112は周溝南西部の底面，113は周溝南部の覆土中層から出土したものである。

所見 出土土器や古墳の形状から後期初頭（6世紀初頭）と考えられる。

第4号墳出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
112	土師器	椀	13.6	8.8	－	長石・雲母	赤褐	普通	口辺部内外面横方向のヘラ磨き 体部外面横方向のヘラ磨き 体部下端ヘラ削り 体部内面放射状のヘラ磨き	周溝南西部底面	70% PL11
113	土師器	坩	7.0	4.5	2.2	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部～体部外面ヘラ磨き 体部下端ヘラ削り 内面ハケ目痕 摩滅により調整不明	周溝南部中層	70% PL12

第5号墳（第47図）

位置 調査区北部のB2～B3区で，標高28.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 周溝が第13号住居跡，第34号土坑を掘り込み，第4号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 周溝を含む長径15.6m，短径約14.8mの円墳である。

周溝 北部から東部は，上幅1.4～2.2m，下幅0.6～1.7m，深さ36～44cmである。南部から西部は，上幅1.5～2.4m，下幅0.5～1.5m，深さ36～45cmである。壁はいずれも外傾して立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。覆土は，黒色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。

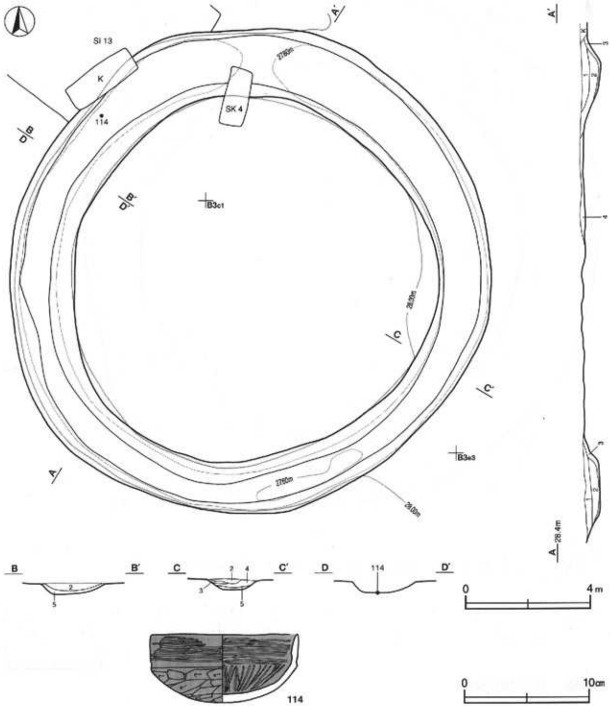
周溝土層解説

1 黒　色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
3 灰褐色 ローム粒子微量
4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
5 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量

埋葬施設 確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片110点（坏7，器台1，坩5，高坏18，壺1，甕類77，甑1）が周溝から出土している。114は北西部の底面から出土した坏の完形品である。

所見 出土土器や古墳の形状から後期初頭（6世紀初頭）と考えられる。



第47図　第５号墳・出土遺物実測図

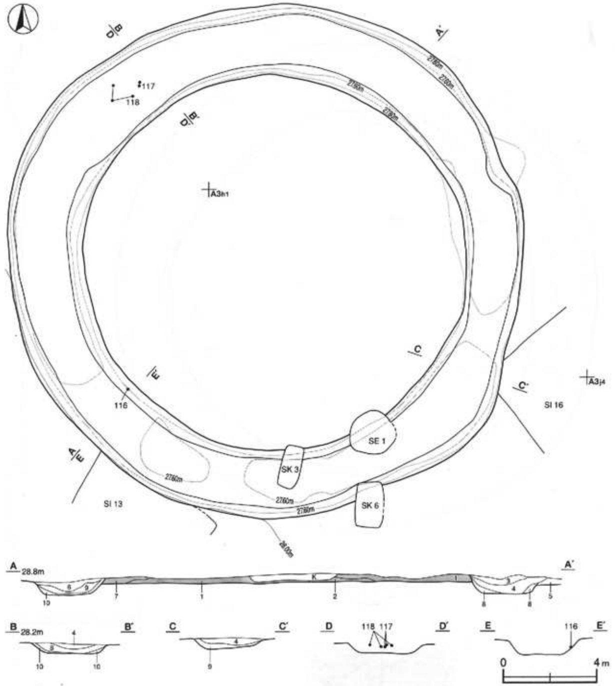
第５号墳出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
114	土師器	坏	11.4	5.7	－	石英・長石・雲母	赤褐	良好	口辺部内外面横方向のヘラ磨き　体部下端ヘラ削り　体部内面放射状のヘラ磨き	周溝北西部底面	100%　PL11

第６号墳（第48・49図）

位置　調査区北部のＡ２～Ｂ３区で，標高28.0ｍの台地平坦部に位置している。

重複関係　周溝が第13・16号住居跡を掘り込み，第３・６号土坑及び第１号井戸に掘り込まれている。



第48図 第６号墳実測図

規模と形状 周溝を含む長径22.6m，短径21.8mの円墳である。

周溝 北部から東部は，上幅2.2～3.3m，下幅1.3～2.4m，深さ50～56cmである。南部から西部は，上幅2.9～3.5m，下幅2.0～2.8m，深さ32～52cmである。壁はいずれも外傾して立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。覆土は，黒褐色と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。第１・２・７層は旧表土である。

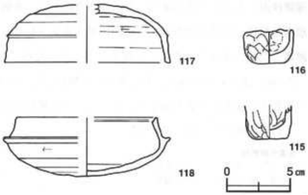
周溝土層解説

1	灰褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	
2	褐色	ローム粒子微量	
3	黒色	ローム粒子微量	
4	黒色	ロームブロック微量	
5	黒褐色	ロームブロック少量	
6	黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	
7	灰褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	
8	黒褐色	ロームブロック微量，しまり弱い	
9	黒褐色	ロームブロック微量，しまり普通	
10	灰褐色	ローム粒子少量	

埋葬施設　確認されなかった。

遺物出土状況　土師器片341点（坏21，器台１，坩19，高坏61，甕類234，台付甕３，ミニチュア２），須恵器片17点（坏９，蓋７，甕１）が周溝から出土している。115は北東部の覆土中，116は南西部の覆土中層，117・118は北西部の覆土中層から出土している。

所見　出土土器や古墳の形状から後期前葉（６世紀前葉）と考えられる。



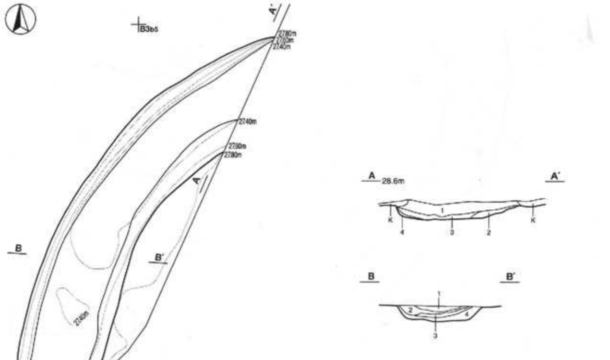
第49図　第６号墳出土遺物実測図

第６号墳出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
117	須恵器	坏蓋	[13.6]	4.6	−	長石	灰	良好	口辺部外面ロクロナデ　内面ナデ　体部外面回転ヘラ削り	周溝北西部中層	30%　PL11
118	須恵器	坏身	[11.0]	4.6	−	長石	灰	良好	口辺部外面ロクロナデ　内面ナデ　体部外面回転ヘラ削り	周溝北西部中層	50%　PL11
115	土師器	ミニチュア	−	(2.7)	2.7	細砂	橙	普通	体部〜底部内外面ヘラナデ後ナデ調整	周溝北東部覆土中	40%
116	土師器	ミニチュア	3.6	2.7	2.4	長石	橙	普通	体部〜底部内外面ナデ調整　指頭痕	周溝南西部中層	80%　PL12

第７号墳（第50図）

位置　調査区北東部のＢ３区で，標高27.8mの台地平坦部に位置している。



第50図　第７号墳実測図

確認状況　表土除去後周溝の一部が確認されたが，遺構のほとんどが調査区域外に延びている。

規模と形状　周溝を含む径約24mの円墳と推定される。主軸方向は不明である。

周溝　全体の4分の1程度しか確認できなかったが，全周していたと考えられる。上幅2.4～2.7m，下幅1.2～2.0m，深さ43～49cmで，壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。覆土は，黒褐色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。

周溝土層解説

1	黒　　色	ローム粒子微量	
2	黒 褐 色	ローム粒子微量	
3	黒 褐 色	ローム粒子少量	
4	灰 褐 色	ローム粒子少量	

埋葬施設　確認されなかった。

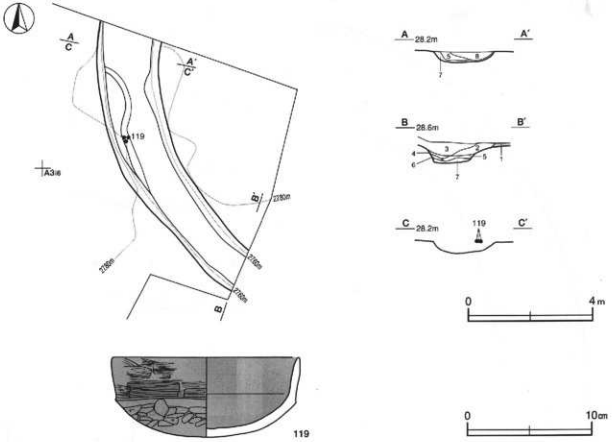
遺物出土状況　土師器片44点（坩1，高坏15，甕28）が出土しているが，混入した遺物と考えられる。

所見　古墳の形状から後期前葉（6世紀前葉）以降と推定されるが，本跡に伴う出土土器がないため明確な時期区分は困難である。

第8号墳（第51図）

位置　調査区北東部のA3区で，標高27.8mの台地平坦部に位置している。

確認状況　これまで周知されていなかったが，表土除去後周溝の一部が確認された。遺構の大半が調査区域外に延びている。



第51図　第8号墳・出土遺物実測図

規模と形状　周溝を含む径約17.6mの円墳と推定される。主軸方向は不明である。

周溝　全体の５分の１程度しか確認できなかったが，全周していたと考えられる。上幅1.3～2.1m，下幅0.5～1.6m，深さ32～44cmで，壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。覆土は，黒色土と灰褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，墳丘と周溝外側からの流入によって自然堆積したと考えられる。第１層は旧表土である。

周溝土層解説

1	灰褐色	ローム粒子微量	
2	黒色	ローム粒子・炭化粒子微量	
3	黒褐色	ローム粒子微量	
4	黒色	ローム粒子微量	
5	黒色	ローム粒子少量	
6	黒褐色	ローム粒子少量	
7	灰褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	
8	黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	

埋葬施設　確認されなかった。

遺物出土状況　土師器片45点（坏36，坩１，甕類８）が周溝から出土している。119は周溝西部の覆土上層からまとまって出土した破片が接合したものである。

所見　出土土器や古墳の形状から後期前葉（６世紀前葉）と考えられる。

第８号墳出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
119	土師器	坏	14.8	6.4	－	長石・石英・礫	明赤褐	普通	口辺部外面ハケ目後ナデ　体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面摩滅により調整不明	周溝西部上層	70%　PL11

表４　古墳一覧表

番号	位置	墳形	主軸方向	規模（m）（周溝の外側）		周溝規模（m）			埋葬施設	主な出土遺物	時期	新旧関係
				長径	短径	最大上幅	最大下幅	深さ（cm）				
1	C１b0～D２a7	円	N－45°－W	40.4	38.0	6.2	4.5	29～72	－	土師器片　埴輪片　土玉	５世紀後半	SI3→本跡→SK2,TK1
2	B２h8～C３b1	円	－	20.6	20.3	3.4	1.9	53～100	－	土師器片　須恵器片　紡錘車　赤色顔料	５世紀末	SI4・7→本跡
3	B３j3～C３a6	[円]	－	14.1	－	(1.9)	(1.0)	(42～66)	－	土師器片　須恵器片	６世紀初頭	本跡→SK36
4	C２g9～C３j1	円	－	14.6	14.4	2.2	1.4	52～80	－	土師器片	６世紀初頭	本跡→SK1,SD1
5	B２a0～B３e2	円	－	15.6	14.8	2.4	1.7	36～45	－	土師器片	６世紀初頭	SK34→SI13→本跡→SK4
6	A２g9～B３a3	円	－	22.6	21.8	3.5	2.8	32～56	－	土師器片　須恵器片	６世紀前葉	SI13・16→本跡→SK3・6,SE1
7	B３b5～B３e4	[円]	－	[24.0]	－	(2.7)	(2.0)	(43～49)	－	土師器片	６世紀前葉以降	
8	A３g6～A３i7	[円]	－	[17.6]	－	(2.1)	(1.6)	(32～44)	－	土師器片	６世紀前葉	

３　中世の遺構と遺物

中世の遺構として，塚跡１基と土坑２基を確認した。以下それぞれの遺構と遺物について記述する。

(1)　塚跡

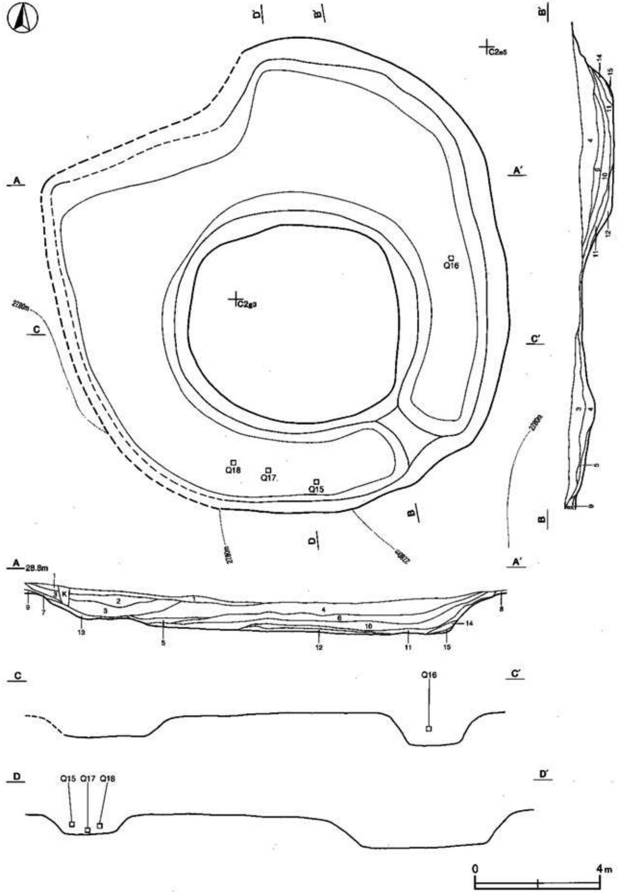
第１号塚跡（第52～54図）

位置　調査区南部のＣ２区で，標高27.9mの第１号墳中央部に位置している。

確認状況　これまで周知されていなかったが表土除去後，周溝が確認された。

重複関係　第１号墳の中央部をドーナツ状に掘り込んでいる。

規模と形状　基底部の平面形は長径15.6m，短径15.0mの隅丸方形状を呈し周溝を伴っている。



第52図　第１号塚跡実測図

構築状況　第１号墳の中央部に構築していることから，墳丘を利用して塚を構築した可能性が考えられる。

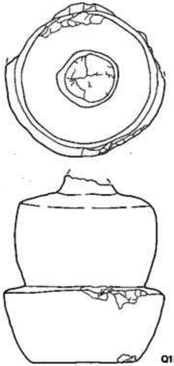
周溝　東西14.8m，南北15.2mにわたりほぼ全周しており，掘り込みは砂礫粘土層まで達している。北側から東側は，上幅2.7～6.0m，下幅1.5～3.9m，深さ100～108cmである。南側から西側は，上幅2.9～5.6m，下幅1.6～3.9m，深さ64～104cmで，壁はいずれも外傾して立ち上がり，断面形は逆台形状を呈している。西部の底部には，円形の窪みが数か所みられ，南東部の１か所には，土橋状の高まりが確認できる。覆土は，黒褐色土と褐色土を基調とし，レンズ状の堆積状況を呈していることから，自然堆積したと考えられる。

周溝土層解説

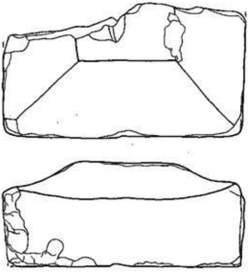
1	にぶい黄褐色	川原石・砂粒少量，ローム粒子微量
2	灰　褐　色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
3	灰　褐　色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	黒　褐　色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
5	暗　褐　色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
6	褐　　　色	ローム粒子・炭化粒子微量
7	黒　褐　色	ローム粒子少量
8	黒　　　色	ローム粒子微量
9	灰　褐　色	ローム粒子微量
10	黒　褐　色	ローム粒子少量，炭化粒子・黒色粒子微量
11	黒　　　色	ローム粒子・炭化粒子微量
12	褐　　　色	ローム粒子少量
13	黒　褐　色	砂粒中量，ローム粒子・黒色粒子微量
14	褐　　　色	ローム粒子少量，炭化粒子・砂粒微量
15	灰　褐　色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量

遺物出土状況　五輪塔片29点（空風輪１，火輪２，地輪１，部位不明25）が出土している。Q16は東部の覆土中層，Q15・Q18は南部の覆土中層，Q17は南部の覆土下層から出土していることから，周溝へ流れ込んだものと考えられる。他にも縄文土器片，土師器片が出土しているが混入した遺物と考えられる。

所見　盛土は湮滅していたが，周溝とそこから出土した遺物から塚と判断した。時期は，出土遺物から中世以降と考えられる。



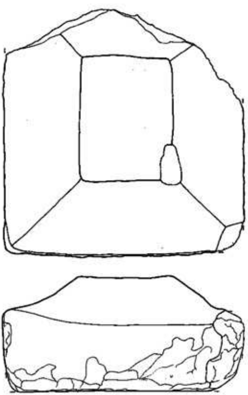
Q15



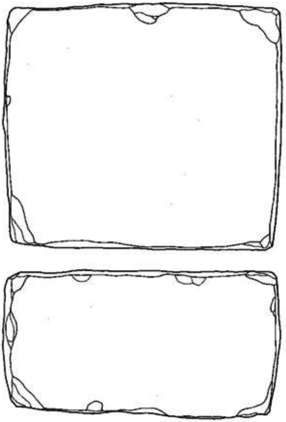
Q17

0　10cm

第53図　第１号塚跡出土遺物実測図(1)



Q16



Q18

0 10cm

第54図 第1号塚跡出土遺物実測図(2)

第1号塚跡出土遺物観察表（第53・54図）

番号	器種	奥行	幅	厚さ	重量	材質	特　徴	出土位置	備考
Q15	五輪塔	(16.3)	16.9	(19.6)	(6,700)	花崗岩	空風輪　空輪部円形　風輪部逆台形　表面は風化顕著	周溝南部中層	PL20
Q16	五輪塔	(25.5)	(26.2)	12.2	(12,200)	花崗岩	火輪　軒先軽く外反　表面は風化顕著	周溝東部中層	PL20
Q17	五輪塔	(14.2)	25.6	11.0	(6,340)	花崗岩	火輪　軒先軽く外反　表面は風化顕著	周溝南部下層	PL20
Q18	五輪塔	26.3	29.4	15.6	(25,600)	花崗岩	地輪　側面は長方形状を呈する　表面は風化顕著	周溝南部中層	PL20

(2) 土坑

第1号土坑（第55図）

位置　調査区南部のＣ２g9区で，台地の平坦部に位置している。

重複関係　第4号墳の周溝を掘り込んでいる。

規模と形状　長径約1.30m，短径1.25mの円形で，深さは160cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。長径方向はＮ－60°－Ｗである。

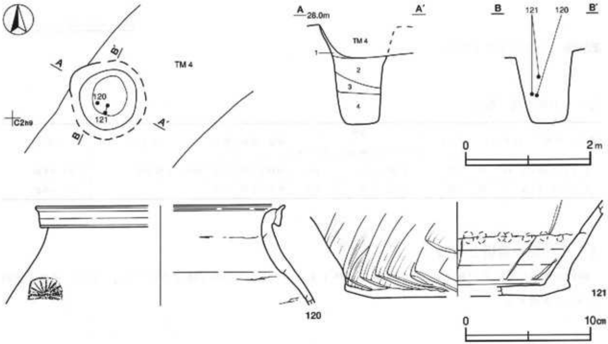
覆土　4層に分層される。ロームブロックを少量含み，不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック微量
4　黒　褐　色　ローム粒子微量

遺物出土状況　陶器片９点（常滑焼甕の口縁部１・体部４・底部４），五輪塔の破片と推定される石１点（花崗岩）が出土している。120・121は，覆土中層からともに折り重なるようにして出土していることから，これらの遺物は投棄されたと考えられる。

所見　時期は，出土遺物から中世以降（13世紀後半以降）と考えられる。



第55図　第１号土坑・出土遺物実測図

第１号土坑出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
120	陶器	甕	[19.6]	(8.0)	－	石英・長石・小礫	灰褐	良好	折り返し口縁部内外面横ナデ　頸部外面にスタンプ文及び自然釉付着　内面ナデ　輪積痕	中層	20%
121	陶器	甕	－	(7.5)	[17.8]	石英・長石・小礫	灰	良好	体部外面下端縦方向のヘラナデ痕　内面横方向のヘラナデ痕　底部外面砂付着　内面指圧痕　自然釉溜まり　輪積痕	中層	10%

第２号土坑（第56図）

位置　調査区南部のＣ２i6区で，台地の平坦部に立地している。

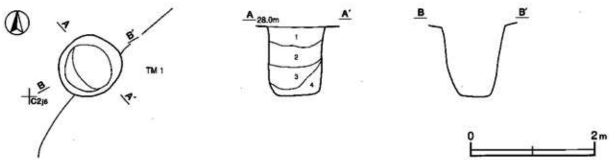
重複関係　第１号墳の周溝を掘り込んでいる。

規模と形状　長径1.02m，短径0.98mの円形で，深さは111cmである。底面は平坦で，壁はほぼ直立している。長径方向はＮ－41°－Ｗである。

覆土　４層に分層される。各層にロームブロックを含み，埋め戻されている様相を呈していることから人為堆積と考えられる。

土層解説
１　黒　褐　色　ロームブロック少量，黒色ブロック微量
２　黒　褐　色　ロームブロック中量・黒色ブロック微量
３　黒　褐　色　ロームブロック多量，黒色ブロック・焼土粒子微量
４　黒　褐　色　ロームブロック微量

所見　出土遺物がなく時期を決めるのは困難であるが，第１号土坑と近い位置にあり，形状などから第１号土坑と同じ時期の中世以降が想定される。



第56図　第２号土坑実測図

表５　中世土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	C 2 g9	N－60°－W	円形	(1.30×1.25)	160	外傾	平坦	人為	陶器　五輪塔片	TM 4→本跡
2	C 2 i6	N－41°－W	円形	1.02×0.98	111	垂直	平坦	人為	－	TM 1→本跡

4　その他の遺構と遺物

時期が明確でない井戸跡１基，土坑30基，溝跡１条，ピット群１か所が確認されている。以下，遺構と遺物について記述する。

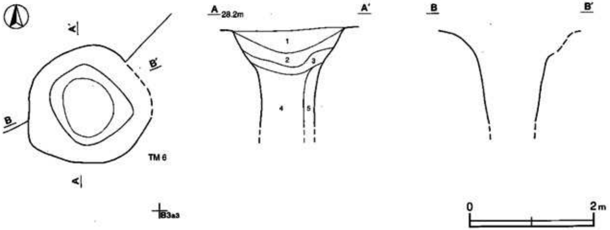
(1)　井戸跡

第１号井戸跡（SK 7）（第57図）

位置　調査区北部のＡ３ j2 区で，標高28.0mの平坦な台地上に位置している。

重複関係　第６号墳の周溝を掘り込んでいる。

規模と形状　長径2.04m，短径1.84mの楕円形で，漏斗状に掘り込まれている。長径方向はＮ－30°－Ｗである。確認面から1.5mまで掘り下げたが，湧水のためそれ以上確認することができなかった。



第57図　第１号井戸跡実測図

覆土　5層からなる。第1～3層はレンズ状に堆積した自然堆積であり，第4層以下は縦方向の堆積状況から壁の崩落層と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量
4　黒　　　色　ローム粒子微量
5　黒　　　色　ローム粒子少量

所見　時期は不明である。

(2) 土　坑

時期が明確でない土坑30基が検出された。これらの土坑の多くが人為堆積であり，墓坑が含まれている可能性もあるが，人骨や副葬品などが出土していないため判然としない。また，円形や楕円形を呈する土坑は，規模や形状，配置などに規則性がなく，遺物もほとんど出土していないため時期・性格ともに不明である。以下，これらの土坑について一覧表で紹介し，併せて実測図(第59～61図)と土層解説を記載する。

第3号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第4号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第5号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子微量

第6号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　　　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　黒　　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

第8号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量・炭化粒子微量

第9号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　灰　褐　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子微量

第10号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ロームブロック少量
3　褐　　　色　ロームブロック中量

第11号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量

第12号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第13号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量

第14号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　灰　褐　色　ロームブロック少量

第15号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　灰　褐　色　ロームブロック少量

第16号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ロームブロック微量

第17号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第18号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

第21号土坑土層解説
1　黒　　　色　ローム粒子微量

第22号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量

第23号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

第24号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

第25号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック少量

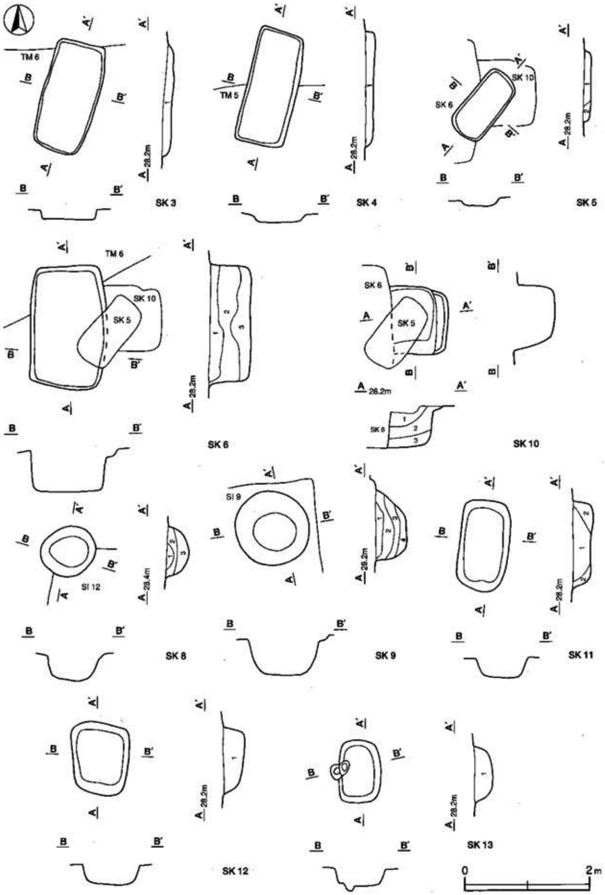
第26号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

第27号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

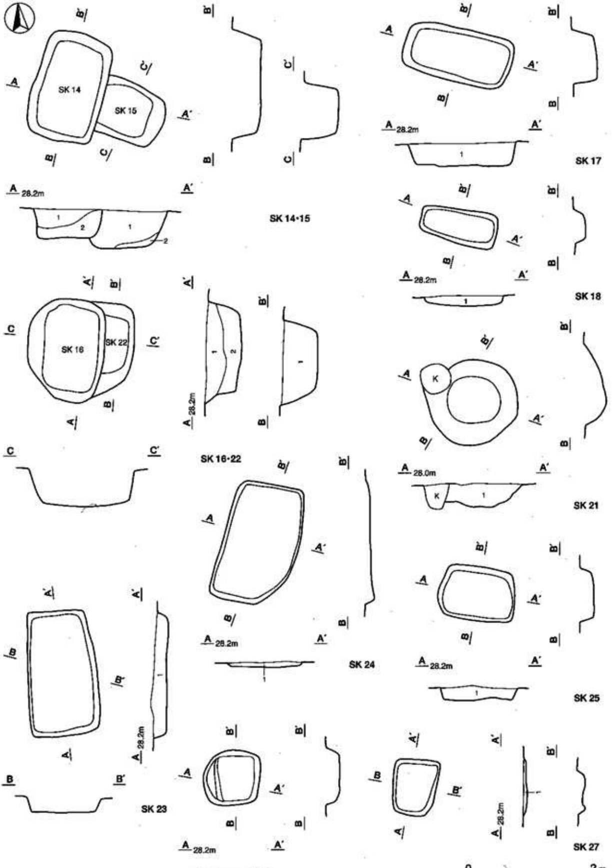
第28号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

第29号土坑土層解説
1　灰　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

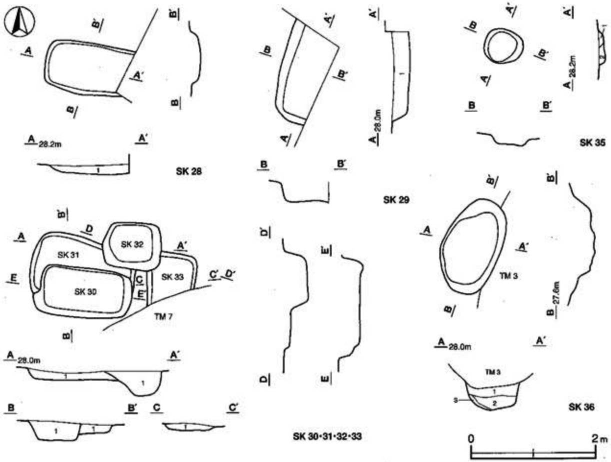
第30号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量


TM 6
SK 3
TM 5
SK 4
SK 10
SK 6
SK 5
28.2m
SK 6
SK 10
SI 12
28.4m
SK 8
SI 9
SK 9
SK 11
SK 12
SK 13
0
2m

第58図　土坑実測図(1)


SK 14
SK 15
SK 14・15
SK 17
SK 18
SK 16
SK 22
SK 16・22
SK 21
SK 24
SK 25
SK 23
SK 26
SK 27
28.2m
28.0m
0
2 m

第59図　土坑実測図(2)



第60図 土坑実測図(3)

第31号土坑土層解説
1 灰 褐 色 ローム粒子少量

第32号土坑土層解説
1 灰 褐 色 ロームブロック少量

第33号土坑土層解説
1 灰 褐 色 ロームブロック中量

第35号土坑土層解説
1 灰 褐 色 ローム粒子微量
2 黒 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第36号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子・砂粒微量
2 にぶい褐色 砂粒多量，ローム粒子微量
3 灰 褐 色 砂粒多量

表6 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
3	A 3 j1	N－15°－E	長方形	1.80 × 0.87	14	垂直	平坦	人為	－	TM6→本跡
4	B 3 b1	N－11°－E	長方形	1.87 × 0.80	9	垂直	平坦	人為	－	TM5→本跡
5	B 3 a2	N－40°－E	長方形	1.18 × 0.57	7	垂直	平坦	人為	－	SK10→SK6→本跡
6	B 3 a2	N－2°－W	長方形	1.97 × 1.22	69	垂直	平坦	人為	－	TM6→SK10→本跡→SK5
8	B 2 d7	N－71°－E	楕円形	0.88 × 0.76	40	外傾	皿状	自然	－	SI12→本跡
9	B 2 c3	N－17°－W	円 形	1.20 × 1.12	56	外傾	平坦	自然	－	SI9→本跡
10	B 3 a2	N－0°	[長方形]	1.05 ×(0.90)	65	垂直	平坦	人為	－	本跡→SK6→SK5
11	B 3 a3	N－5°－E	長方形	1.42 × 0.79	28	外傾	平坦	人為	－	
12	B 3 a3	N－0°	長方形	1.12 × 0.92	33	外傾	平坦	人為	－	
13	B 3 a4	N－7°－W	長方形	0.96 × 0.80	29	外傾	平坦	人為	－	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
14	B 3 a3	N－10°－E	長方形	1.75 × 1.12	43	垂直	平坦	人為	－	SK15→本跡
15	B 3 a4	N－63°－W	[長方形]	(1.05) × 0.92	56	垂直	平坦	人為	－	本跡→SK14
16	B 3 a2	N－5°－E	長方形	1.65 × 1.23	60	外傾	平坦	人為	－	SK22→本跡
17	C 2 a6	N－76°－W	長方形	1.72 × 0.86	38	外傾	平坦	人為	－	
18	C 2 b6	N－78°－W	長方形	1.23 × 0.56	16	外傾	平坦	人為	－	
21	D 2 a2	N－70°－W	円　形	1.50 × 1.38	38	緩斜	皿状	自然	－	
22	B 3 a2	N－4°－E	[長方形]	1.50 × (0.46)	56	外傾	平坦	－	－	本跡→SK16
23	B 3 c3	N－6°－W	長方形	1.98 × 1.10	26	外傾	平坦	人為	－	
24	B 3 b4	N－19°－E	長方形	1.96 × 1.20	9	外傾	平坦	人為	－	
25	B 3 b4	N－80°－W	長方形	1.20 × 0.85	21	外傾	平坦	人為	－	
26	B 3 a5	N－80°－W	方　形	0.90 × 0.87	23	外傾	平坦	人為	－	
27	B 3 a5	N－8°－E	長方形	0.90 × 0.70	4～10	外傾	凸凹	人為	－	
28	B 3 a6	N－77°－W	[長方形]	(1.25) × 0.82	15	外傾	平坦	人為	－	
29	B 3 a6	N－21°－E	[長方形]	(1.42) × (0.72)	28	外傾	平坦	人為	－	
30	B 3 b5	N－80°－W	長方形	1.56 × 0.80	30	外傾	平坦	人為	－	SK31→本跡
31	B 3 b5	N－75°－W	[長方形]	1.61 × 0.98	13	外傾	平坦	人為	－	本跡→SK30→SK32
32	B 3 a5	N－86°－W	長方形	0.92 × 0.70	39	外傾	平坦	人為	－	SK31・33→本跡
33	B 3 b5	N－7°－E	[長方形]	(0.75) × 0.68	10	外傾	平坦	人為	－	本跡→SK32,TM7
35	B 2 j4	N－87°－W	円　形	0.60 × 0.55	12	外傾	凸凹	自然	－	SI2→本跡
36	B 3 j3	N－22°－E	楕円形	1.52 × 0.91	45	外傾	凸凹	自然	－	TM3→本跡

(3) 溝　跡

溝跡１条を確認した。平面図については，全体図で示す。

第１号溝跡（第61・72図）

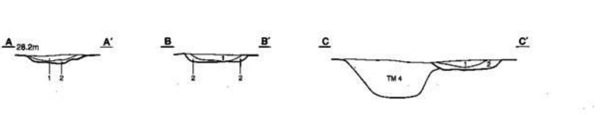
位置　調査区南東部のＣ３b7～Ｃ３j1区で，台地の平坦部に位置している。

重複関係　第４号墳の周溝を掘り込んでいる。

規模と形状　北部と南部が調査区域外にのびているため全長は不明であるが，北東方向（N－30°－E）に直線状に約43m延びている。規模は上幅0.8～1.3m，下幅0.5～0.9m，深さ８～14cmである。底面は皿状を呈し，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土　２層からなる。レンズ状に堆積しており自然堆積と考えられる。

土層解説
１　黒　褐　色　ローム粒子微量
２　灰　褐　色　ロームブロック少量



第61図　第１号溝跡土層図

遺物出土状況　土師器片45点（椀７，坏２，坩５，高坏19，甕12）が北部から南部にかけての覆土上層から出土している。接合関係にある破片も見られるが，いずれも摩滅しており混入したものと考えられる。

所見　第４号墳の周溝を掘り込んでいることから，古墳時代後期初頭以降と考えられるが，本跡に伴う出土遺物がないため，くわしい時期性格は不明である。

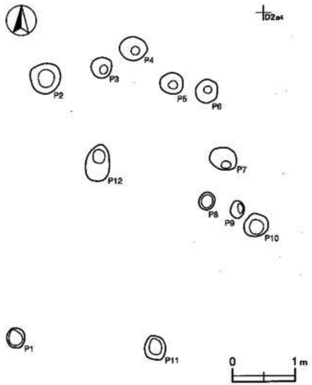
(4) ピット群

第１号ピット群（第62図）

位置　調査区南部のＤ２a3～Ｄ２b3区で，台地の平坦部に位置している。

規模と形状　南北5.11m，東西4.20mの範囲に12か所のピットが確認された。最大のものは長径0.59m，短径0.39mの楕円形で，深さは33cmである。最小のものは長径0.27m，短径0.23mの楕円形で，深さは25cmである。

覆土　すべて１層である。柱痕や抜き取り痕は確認できなかった。



第62図　第１号ピット群実測図

P１土層解説
1　灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P２土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P３土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P４土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P５土層解説
1　黒　　　色　ローム粒子微量

P６土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P７土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P８土層解説
1　黒　　　色　ローム粒子・炭化粒子微量

P９土層解説
1　黒　　　色　ローム粒子微量

P10土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量

P11土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

P12土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

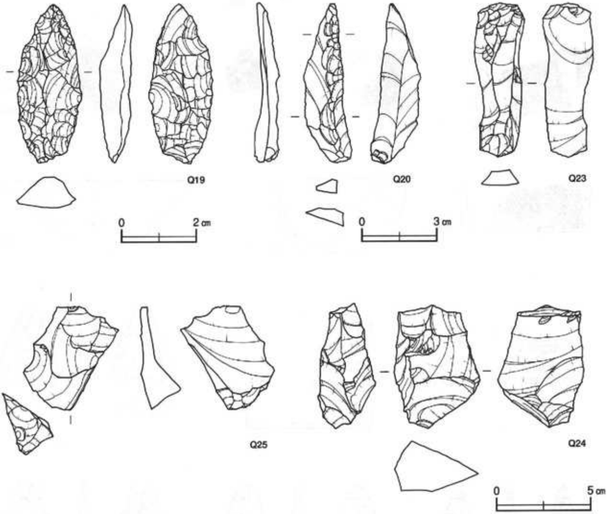
所見　ピット間の配列に規則性がなく，建物跡や柵跡を想定することができなかった。また，出土遺物もなく時期性格は不明である。

ピット群計測表

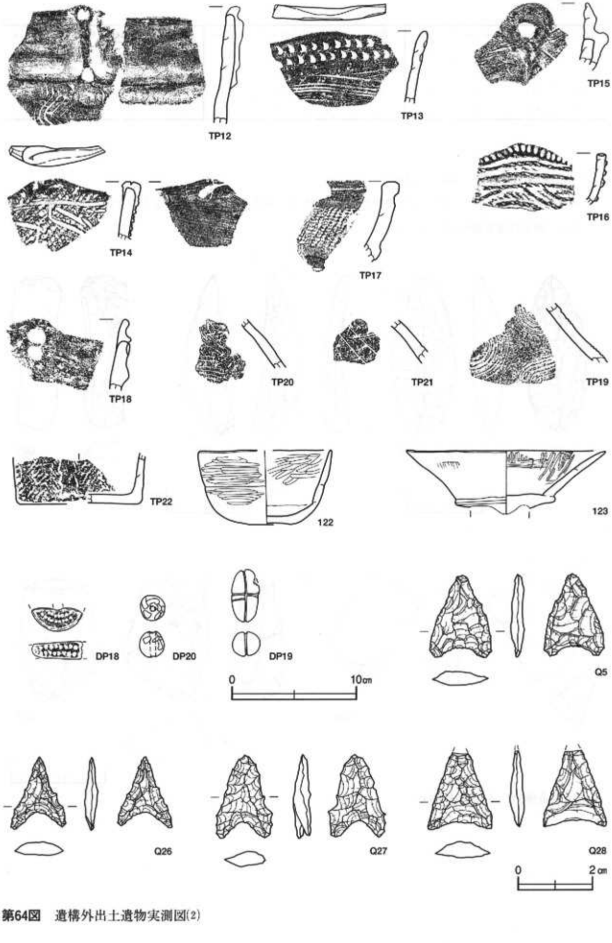
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P 1	33	30	25	P 5	36	34	36	P 9	27	23	25
P 2	50	49	－	P 6	38	35	35	P 10	40	37	22
P 3	32	32	64	P 7	46	33	33	P 11	41	36	17
P 4	44	36	63	P 8	28	26	26	P 12	59	39	33

(5) 遺構外出土遺物（第63～65図）

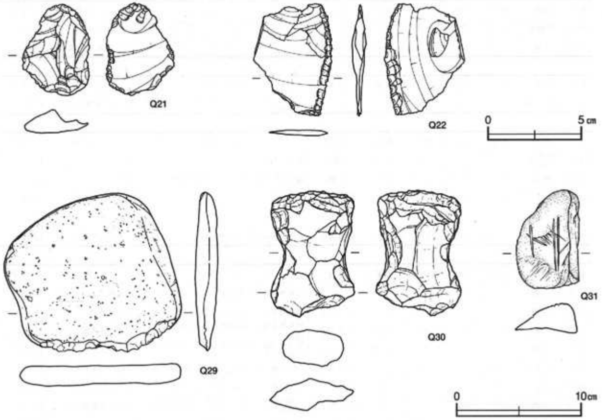
調査区内の表土中から出土した遺物や遺構に伴わない遺物のうち，特徴的なものを抽出して記載する。なお，解説は遺物観察表で示した。



第63図　遺構外出土遺物実測図(1)



第64図 遺構外出土遺物実測図(2)



第65図　遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表（第63～65図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP12	縄文土器	深鉢	[25.4]	(9.3)	－	石英・長石・雲母・小礫	橙	良好	口縁部から頸部にかけて縦横に隆帯を貼り付け刺突文施文　胴部には縦方向に波状沈線を複数列施文	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18
TP13	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁に沿って半截竹管文を２重に施し下部は貝殻状痕文を横方向に交互に施文	TK1周溝覆土中	5%未満 PL18
TP14	縄文土器	深鉢	－	(4.6)	－	長石・雲母	にぶい橙	良好	波頂部に横位隆帯を貼り付け　単節ＲＬ縄文を地文とし沈線と竹管状の円形刺突文により文様描出	PG1P1覆土中	5%未満 PL18
TP15	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	波頂部に円形の突起を配置しその下に縦方向にらせん状の粘土紐を貼り付け	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18
TP16	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口唇部キザミ　単節ＬＲ縄文を地文とし横位に粘土紐を貼り付けその上に縄文を施す	TM6周溝覆土中	5%未満 PL18
TP17	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	石英・長石・小礫	暗灰黄	良好	口縁直下に単節ＲＬ縄文を施文　その下に横方向に隆帯貼り付け	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18
TP18	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	波頂部に円形刺突文とその下の横位に貼り付けた隆帯上にも円形刺突文を穿つ	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18
TP22	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	[10.0]	石英・長石・雲母小礫	にぶい黄橙	普通	縄文を横方向に回転施文　縦方向に結節文を施文	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
TP19	弥生土器	壺	－	(4.7)	－	石英・長石	にぶい橙	良好	平行沈線による渦文	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18
TP20	弥生土器	壺	－	(3.7)	－	石英・長石	褐灰	普通	平行沈線による渦文	TM1周溝覆土中	5%未満
TP21	弥生土器	壺	－	(3.4)	－	石英・長石	にぶい橙	良好	平行沈線	TM1周溝覆土中	5%未満 PL18

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法及び文様の特徴	出土位置	備考
122	土師器	椀	[10.4]	6.0	3.6	長石・雲母	橙	良好	口辺部内外面体部外面横方向のヘラ磨き　体部内面摩滅により調整不明　内外面輪積痕	SD1上層	50%
123	土師器	高坏	15.8	(5.1)	－	雲母・赤色粒子	橙	普通	坏部内面横方向にハケ目後縦方向にヘラ磨き　外面ハケ目痕あり　外面摩滅により調整不明	SD1上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP18	紡錘車	(1.9)	(4.0)	1.4	(8.5)	石英·長石·金雲母	ナデ　上面竹管状工具による刺突文　側面ヘラ状工具による刺突文　下面ナデ調整	SI 8 覆土中	PL18
DP19	土錘	4.2	2.2	1.9	16.6	石英·長石·雲母	ナデ　十字にヘラ状工具による線刻　ヘラ状工具痕	TK 1 周溝北部 覆土中	PL18

番号	器種	長さ	幅	孔　径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP20	球状土錘	2.0	2.0	0.5	7.3	粘土	ヘラナデ後ナデ　中央部片面からの穿孔後ナデ調整	TK 1 周溝覆土中	PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q19	槍先形尖頭器	4.2	1.8	0.8	4.9	黒曜石	両面調整	表土	PL19
Q20	彫器	6.32	2.0	1.0	8.5	玉髄	縦長剥片を素材として1側縁を調整	表土	PL19
Q23	剥片	8.2	2.7	0.9	23.3	硬質頁岩	縦長剥片	TM 8 周溝覆土中	PL19
Q24	石核	6.5	4.6	3.1	70.6	硬質頁岩	石刃剥離時にできる剥片	表土	PL19
Q25	剥片	5.5	5.0	2.1	23.5	硬質頁岩	石刃剥離時にできる剥片	C 3 a1 区表土	PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	石鏃	2.15	1.6	0.35	1.3	チャート	凹基無茎鏃　両面調整　基部の抉りは浅い	SI 6 覆土中	PL19
Q26	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.6	チャート	凹基無茎鏃　両面調整　基部の抉りは深い	B 2 区表土	PL19
Q27	石鏃	2.2	1.5	0.4	1.0	珪質頁岩	凹基無茎鏃　両面調整　基部の抉りはやや深い	TM 1 周溝覆土中	PL19
Q28	石鏃	(2.0)	1.7	0.4	(1.14)	チャート	凹基無茎鏃　両面調整　基部の抉りは浅い　先端部欠損	SI12覆土中	PL19
Q21	石匙ヵ	4.85	3.5	1.22	17.1	瑪瑙	押圧剥離による周縁調整で刃部作出	B 2 f5 区表土	PL19
Q22	石匙ヵ	5.96	4.1	0.7	19.5	チャート	押圧剥離による周縁調整で刃部作出	B 2 f5 区表土	PL19
Q29	片刃礫器	12.6	14.0	1.85	406	石英斑岩	片側縁調整　刃部片面調整　端部1側縁に研磨痕	TM 6 周溝覆土中	PL19
Q30	石斧	9.9	6.7	2.8	230	凝灰岩	刃部と頭部の両面に調整痕	表土	PL19

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q31	砥石	(7.7)	(5.0)	(2.3)	100.2	砂岩	2面に研磨痕及び溝状痕	表土	PL20

第4節　ま　と　め

当遺跡における最初の生活痕跡は，旧石器時代の遺物に見ることができる。槍先形尖頭器，彫刻刀形石器や縦長剥片，石核などが表土中や古墳の周溝及び住居跡などから出土している。中でも槍先形尖頭器は，透明度が高い黒曜石製であることから長野県との交流をもうかがい知ることができる。

縄文時代の主な遺構は後期の竪穴住居跡1軒と土坑3基であるが，口縁部に刻みのある無文の土器片や押圧剥離痕のある片刃礫器，石匙の未製品2点など縄文前期の遺物も出土している。

弥生時代の遺構は確認できなかったが，足洗式期（中期後半）の弥生土器片3点と土製紡錘車1点が出土している。旧明野町域で出土している遺物は主に二軒屋式期のものであり[1]，中期後半の資料としては初出土である。このことは，弥生文化が比較的早く波及したことを示すものである。

古墳時代の遺構は，前期から中期初頭にかけての住居跡16軒と中期後半から後期初頭にかけての古墳8基が確認されている。継続的に営まれた集落の廃絶後同じ場所に古墳が築造されている。これらの古墳は，規模がほぼ均一で古墳時代後期になって盛んに形成される群集墳の初源的な様相をもつ[2]と考えられる。周辺では中根十三塚遺跡や山王堂遺跡及び館野遺跡なども本跡同様に観音川と大川に挟まれた低台地に位置し，ひとつの文化圏を形成していたととらえられており，当地域内での該期集落の変遷を考える上でも好資料を提供しているといえる。

中世以降には第1号墳を利用して塚が築造されている。塚は周溝を伴い，土橋状の高まりを持つことから行き来ができる構造であったことが予想できる。また五輪塔が出土していることから，供養塔の役割を担っていたと考えられる。

当遺跡での住居の特色と土器の様相及び初期群集墳の形成の発端となった第1号墳に焦点をあて，若干の考察を加えてまとめとしたい。

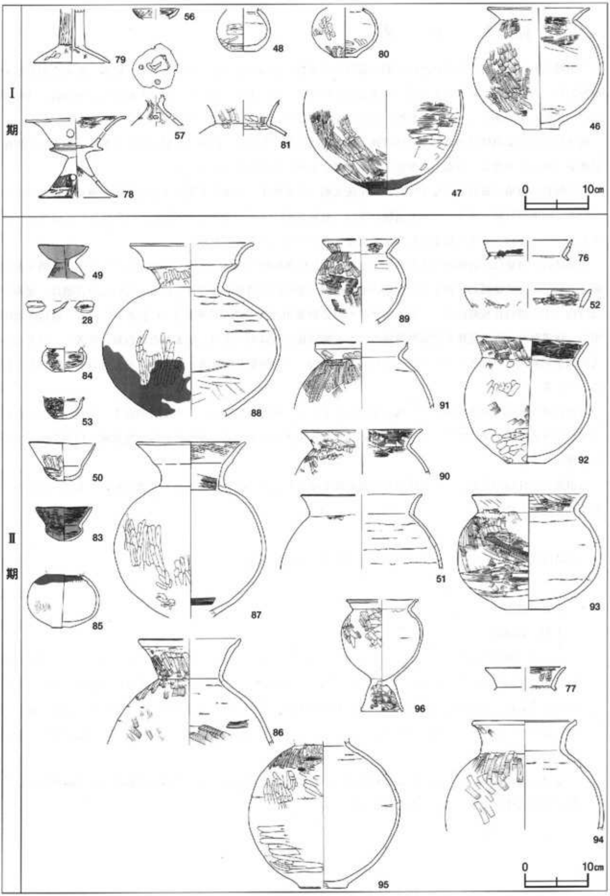
1　古墳時代前期から中期への過渡期にあたる集落の特色と課題

(1)　土器の様相

Ⅰ期（第66図）

器台は，器受部が小形のもの（56），脚部に5孔を穿つもの（57），受部下半に稜をつくり，受部と脚部に3孔を穿つもの（78）が出土している。(78）と同様な例は，善長寺遺跡（結城市小田林）の第4号・第25号住居跡（古墳時代前期）出土の装飾器台形土器にも見られ，受部下半に陵をつくり，受部，脚部に3孔を穿っている[3]。このことから県西方面の人々が，他の地域と活発な交流をしていた様相もうかがえる。

甕（46）は，体部中央付近に最大径を持ち，球状を呈している。また，内・外面にハケ目調整を行い，特に外面は体部下端にまでハケ目を施している。



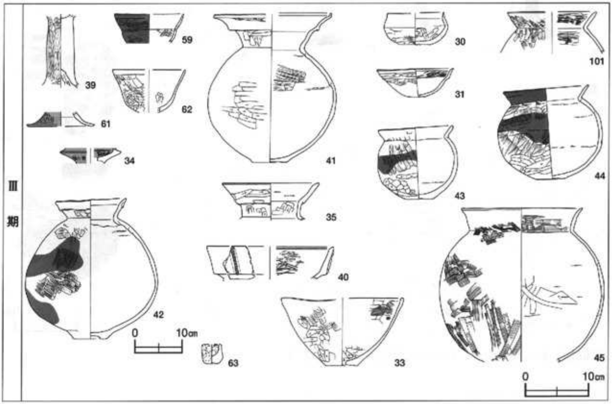
第66図　鍋山東原遺跡における古墳時代Ⅰ・Ⅱ期の土器群

Ⅱ期（第66図）

器台は，断面がX状を呈している（49）。（53）の坩は，小形で細かい磨きが施されている。また，この時期の小形坩（50・83）は，長い口辺部が直線的に外傾するのが特徴であり，（83）は内面まで丁寧な磨きが施されている。壺は有段口縁のものが多く，段部のはっきりしたもの（88），段部がわずかに突出したもの（87），段部がはっきりしなくなったもの（86）が見られる。段部の形状から古い時期のものと新しい時期のものが混在している様相がうかがえる。甕は口辺部の器形がバラエティーに富み，口縁部の径が広く，口辺部から頸部にかけて「く」の字状を呈するもの（89・90・92・93），外傾した後やや内側に向かって段をつくり立ち上がるもの（52・76），やや外傾しながら立ち上がり口縁部でラッパ状に開くもの（77・94）に分けられる。なお，台付甕（96）は，この時期をもって当遺跡では見られなくなる。

Ⅲ期（第67図）

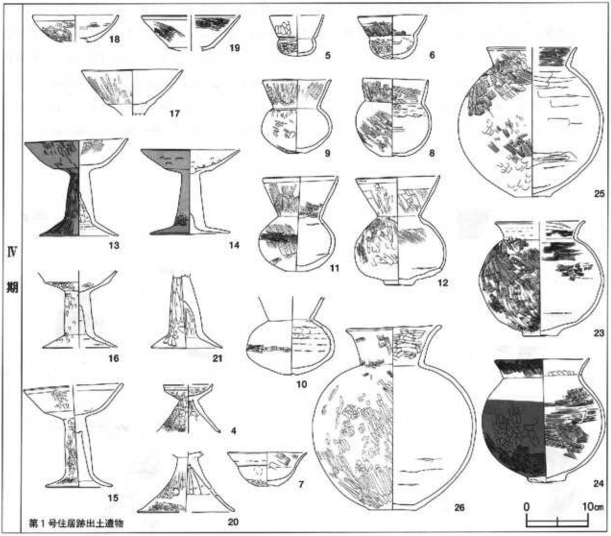
小形坩（59・62）は，頸部のくびれが緩やかになる傾向が見られ，ハケ目や削り・ナデによる調整が多くなる。また，椀が登場し口縁部が内彎しながら立ち上がるもの（30）と，頸部に段を持ちながら口縁部が外傾して立ち上がるもの（31）の2種類が見られる。有段口縁壺は口縁部につまみ上げがあり，段部のはっきりしたもの（41）と段部がはっきりしなくなるもの（35）が見られるが，この時期をもって当遺跡から姿を消す。折り返し口縁を持った壺（42）は体部が下膨れ状を呈し，東海地方の影響を受けている可能性がある。甕は，全体にハケ目がしっかり残るもの（45）と体部下端に削りを施したもの（43）・（44）が見られ，いずれも体部の形状は球状を呈している。この時期の土器類は，樫村編年の0期に該当すると考えられる[6]。



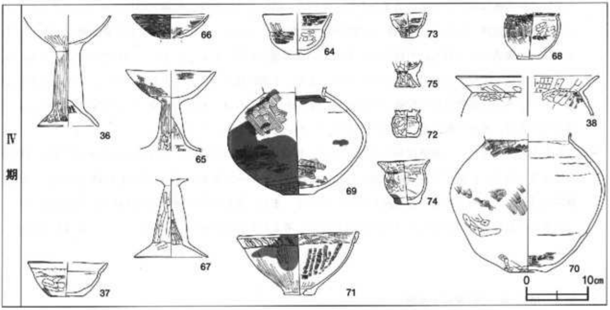
第67図　鍋山東原遺跡における古墳時代Ⅲ期の土器群

Ⅳ期（第68・69図）

器台（4）・(20）は，器受部に対して脚部が長くラッパ状に開くのが特徴である。小形坩は長い口辺部が直線的に外傾する古い様相を持つもの（5），口辺部と体部の長さが同じもの（6），体部に対し口辺部の長さが短くなるもの（64）が混在する。また中形の坩（8～12）が半数以上を占めるようになる。椀（7・37）は，体部上半部でやや内彎し頸部を境に外傾しながら立ち上がる形状に特色が見られる。高坏は脚部が中実柱状のもの（36）が残るほか，脚部はエンタシス状の膨らみをもち裾部は「ハ」の字状に広がるもの（13・21・67）と脚部が低脚化したもの（16・65）が混在している。甕は体部中央部が張り出し，そろばん玉状を呈するもの（69）・(70）や頸部径の広いもの（38）が見られるようになる。この時期の土器類は，樫村編年のⅠ期に該当すると思われる。なお，第1号住居跡から坩，高坏など多くの土器が出土している。東海地方の影響を受けている可能性が高い坩（12）も含まれ，その坩や高坏などは古い様相を呈するものがこの時期に混在している。



第68図　鍋山東原遺跡における古墳時代Ⅳ期の土器群(1)



第69図　鍋山東原遺跡における古墳時代Ⅳ期の土器群(2)

⑵　本跡にみられる住居の特色

出土土器及び住居跡の形態を基準として各住居の廃絶時期をⅠ期～Ⅳ期に区分し，次のように表7と図70に特色を示した。表7は，主に内部施設の特徴をまとめたものである。複数炉をもつ住居跡と，炉を1つ又は持たない住居跡があることや貯蔵穴がコーナー部に位置していることなどに住居の特色を見いだし，A（複数炉を持つ住居），B（炉を1か所持つ住居），C（炉を持たない住居）の3類に分類した。さらに，その中でも貯蔵穴の数や柱穴の数で1～4類に細区分した。なお，旧明野町域では前期の住居跡についての報告事例が少ないため，分類は本跡のみでの検討に留める。

表7　古墳時代前期中葉から中期初頭の住居形態の特色

分類	細分類	特徴＼廃絶時期	Ⅰ期（4世紀中葉）	Ⅱ期（4世紀後半・後葉）	Ⅲ期（4世紀末）	Ⅳ期（5世紀初頭）
A類	1類	複数炉	SI7（大形住居ヵ） SI10（小形住居）		SI3（大形住居） SI6（小形住居）	SI5（小形住居）
	2類	複数炉＋貯蔵穴1か所			SI11（中央部に高まりを持つ）	SI1（東海系の土器が出土）
	3類	複数炉＋貯蔵穴2か所			SI4（小形住居） （中央部に高まりを持つ）	
	4類	複数炉＋柱穴3か所	SI15（SI14と柱穴の数，主軸方向に類似性あり）			
B類	1類	炉1か所＋貯蔵穴1か所		SI8		SI12
	2類	炉1か所＋貯蔵穴2か所		SI2（小形住居） SI16		
	3類	炉1か所＋柱穴3か所	SI14（北陸系の土器が出土）			
C類		柱穴のみ検出		SI9 SI13		

※複数炉とは，炉が2か所以上を指す。また，床面積が50㎡以上のものを大形住居，20㎡未満のものを小形住居とする。

傾向としては，各期とも4～5軒を1つのグループとした集落と考えることができる。また，Ⅰ期（4世紀中葉）にはA類が多く，Ⅱ期（4世紀後半・後葉）になるとB類とC類のみになり，Ⅲ～Ⅳ期（4世紀末～5世紀初頭）にかけて再びA類が主流となる傾向が見られる。炉や貯蔵穴以外では，第4号住居跡

と第11号住居跡は床の中央部に高まりを持っている。第11号住居跡は，貯蔵穴の位置や床の高まりの範囲が中根十三塚遺跡[3]の第5号住居跡（中期中葉）に類似している。Ｉ期の第14・15号住居跡は近接しており，住居の構造でも主軸方向や柱穴が3か所という共通点が見られる。しかし，第14号住居跡はＢ類に属するとともに，土器の様相に違いが見られる。また，Ｉ期にはＡ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ２に該当する住居がなく，当遺跡ではⅡ期以降に貯蔵穴を設置する傾向が認められる。分類の結果，炉や貯蔵穴の増減など生活スタイルは，変化を繰り返してきたことをうかがい知ることができる。

特色ある住居及びその配置関係に着目すると，Ⅲ期に大形の集会場的[5]な第3号住居跡やⅣ期には坩や高坏を多く出土した第1号住居跡が見られる。各時期のグループ構成では，小形の住居跡がみられ，Ｉ期，Ⅲ期には大形・中形・小形の住居跡がそろっている。また，各住居跡の配置から住居間に広場があったことが想定され，個人の住居と公共的な役割を持つと考えられる住居がセットになっていた可能性も考えられる。

2　第1号墳についての検討と課題

40m級の規模を誇る第1号墳を中心に，径14～24m級の円墳で群集墳を形成している。いずれも墳丘部は削平を受け周溝が確認されただけである。主体部は地山を掘り込んだ形跡がないことから，竪穴系の埋葬施設であった可能性が高い。周溝から出土した主な遺物は，土師器の赤彩された坏・坩と，須恵器の坏蓋，坏身や高坏の破片（いずれも陶邑編年のＴＫ47形式に相当）[7]などを中心に埴輪片，石製紡錘車等が出土している。ここでは，初期群集墳の主墳と考えられる第1号墳について若干の考察を加えたい。

(1)　旧表土出土の遺物について

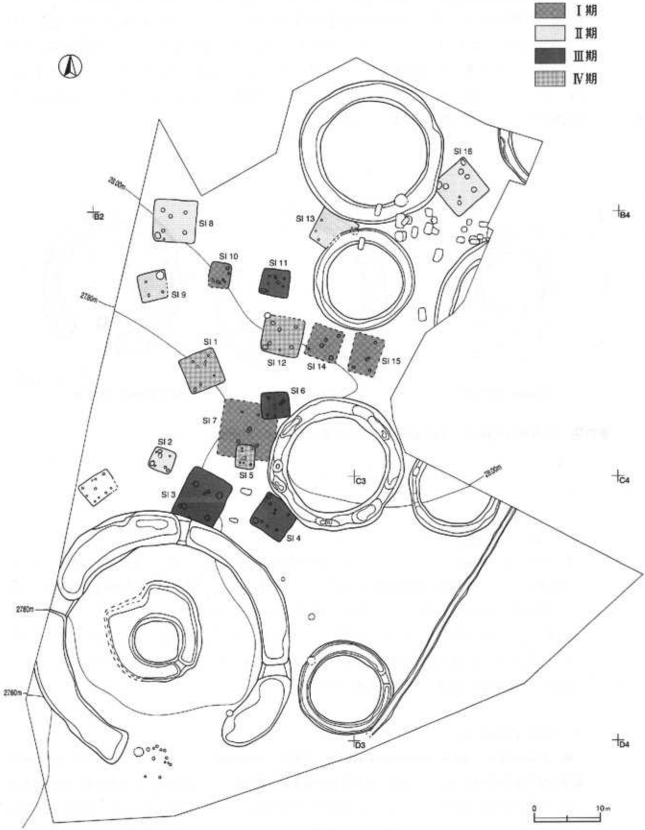
わずかに残っていた第1号墳の旧表土上面からは，逆さに置いた甕の底部の上に同一個体の体部を被せた状態の土師器甕が出土しており，ハケ目調整痕や形状から4世紀後葉から5世紀前葉のものと考えられる。その上層からも甕や高坏の破片が出土していることから，古墳築造の前に旧表土に土器を並べ祭祀を行った可能性も考えられる。県内では，5世紀後半代の古墳である杉崎コロニー186号墳（旧内原町）において，旧表土に石製模造品や土器を並べて直接盛土を行った痕跡があることが報告されており，古墳築造に先立って行われた祭祀の跡であると考えられている[8]。第1号墳出土の土器類には約半世紀の時期差があるが，当遺跡の第1号住居跡からは時期差の大きい土器が共伴していることから考えて，旧表土出土の土器は第1号墳に伴う土器であると考えられる。

(2)　周溝の形状から想定される古墳の形状について

①　周溝が途切れている古墳について

当遺跡の第1号墳は円墳として報告しているが，周溝の南部が途切れている。このように周溝が全周せずに一部途切れている形状であることから，そこに造り出し（張り出し）などがあった可能性も考えられる。

長峰遺跡（竜ヶ崎市）では，周溝が一部途切れている（報告書ではブリッジを残していると表現）古墳時代後期の古墳が11基報告されている[9]。これらの古墳は，第27号墳（箱式石棺）を除いて，いずれも埋葬施設が確認されておらず，形状はすべて円墳として報告されている。図71には，これら11基の古墳の中でも特に規模が大きい第1号墳を掲載した。また，中台遺跡（つくば市）の第32号墳（円墳として報告，



第70図　鍋山東原遺跡住居跡変遷図（古墳時代前期中葉～中期初頭）

後期)[10]や南羽鳥正福寺遺跡（千葉県成田市）の第２号墳（不整な円形を呈す円墳，後期初頭ヵ)[11]などにも同様の特徴がみられる。特に南羽鳥正福寺遺跡の第２号墳では，ブリッジ部分に墳丘のわずかな張り出し（高さ0.5m）が確認されていることから，造り出しがあった可能性が考えられる。当遺跡の第１号墳は，途切れている周溝先端の壁が外傾しながら立ち上がっており，意図的に周溝を巡らせていないように考えられる。第１号墳は先にも述べたように墳丘がないため判断できないが，南羽鳥正福寺遺跡の第２号墳同様に造り出し（張り出し）があった可能性もある。

第71図　県内外の周溝の一部が途切れている古墳の類例（一部改変）

② 造り出し付き円墳について

帆立貝式古墳と総称しているものには，後円部に短小な前方部が付く「帆立貝式前方後円墳」と円丘部に造り出しの付く「造り出し付き円墳」がある[12]。ここでは，前者を「造り出し部長が円丘部直径の３分の１，造り出し部幅２分の１以下」，後者を「造り出し部長が円丘部直径の５分の１以下，造り出し部幅２分の１以下」という基準[13]に当てはめて考えたい。当遺跡の第１号墳は周溝が浅く，墳丘の盛土を優先させると造り出し部（前方部）を大きく造るだけの土量を確保することが困難であることが分かる。よって後者の造り出し付き円墳として第１号墳を考えたい。

③ 初期群集墳の形成について

帆立貝式古墳は，４世紀末から５世紀初頭頃に登場し，５世紀後半には中小の円墳多数とともに初期群集墳を構成する類例が多く見られる。高崎情報団地遺跡（群馬県）では，帆立貝式古墳４基と円墳20基からなる初期群集墳が報告されている。その時期は５世紀後半から６世紀初頭と考えられており，円墳の直径は約６～21mで，それに対して帆立貝式古墳は墳丘の長さが約33～45mと倍近く大きい[14]。茨城県の杉崎コロニー古墳群（旧内原町）では，前方後円墳５基と円墳23基で群集墳を形成している。その中の87号墳は６世紀初頭に位置づけられる古墳であり，後円部の径24.5mの帆立貝式古墳である。栃木県では５世紀末を中心に，塚山西古墳・塚山南古墳を始めとして全長30～60m規模の帆立貝式古墳が多く出現すると

ともに，大形古墳が姿を消していく傾向が挙げられている。埼玉県では，後期に40m以下の前方後円墳が群集墳の主墳として築造される例が多く見られ，その主体になっている帆立貝式古墳も多い[15]。以上のことから帆立貝式古墳には，5世紀後半から初期群集墳の主墳として築造されるケースが多く存在することが分かる。

以上のことから，当遺跡は初期群集墳の形成時期とされる5世紀後半～6世紀前半にかけて，第1号墳を中心に大川，観音川に挟まれた低台地上に形成された初期群集墳であり，主墳としての第1号墳は造り出し付き円墳であった可能性も考えられる。第1号墳の周溝の形状に着目し，造り出し付き円墳の可能性を示唆したが，周溝が途切れている部分に造り出しの痕跡が残る類例をもっと集めることで，第1号墳の形態もさらに明らかになると考えている。また，第1号墳は土橋状の高まりを3か所持っていることから，墳丘と周溝外を行き来するための施設を持っていた可能性が考えられる。

註

1）明野町史編さん委員会『明野町史』1985年7月

2・14・15）石野博信　岩崎卓也　河上邦彦　白石太一郎「古墳時代の研究」第11巻「地域の古墳Ⅱ東日本」雄山閣　1990年9月

3）和田雄次　中澤時宗　桜井一美「一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2（結城地区）本田遺跡　善長寺遺跡　小田林遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第51集　茨城県教育財団　1989年3月

4）古墳時代の土器の年代観について，樫村宣行氏の編年に基づいた。
- 樫村宣行他「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』5号　1999年5月
- 樫村宣行「和泉式土器編年考－茨城県を中心として」『研究ノート』第5号　茨城県教育財団　1996年6月

5）野田良直「主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　中根十三塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第154集　茨城県教育財団　1999年7月

6）石野博信「古代住居のはなし」『吉川弘文館』1995年5月

7）須恵器の年代観については，田辺昭三氏の編年に基づいた。
- 田辺昭三「須恵器大成」角川書店　1995年7月

8）内原町史編さん委員会『内原町史』通史編　1996年3月

9）中村幸雄　後藤義明「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19　長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集　茨城県教育財団　1990年3月

10）吉川明宏　新井聡　黒澤秀雄「（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集　茨城県教育財団　1995年3月

11）宇田敦司「千葉県成田市　南羽鳥遺跡群Ⅰ」『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書』第112集　1996年3月

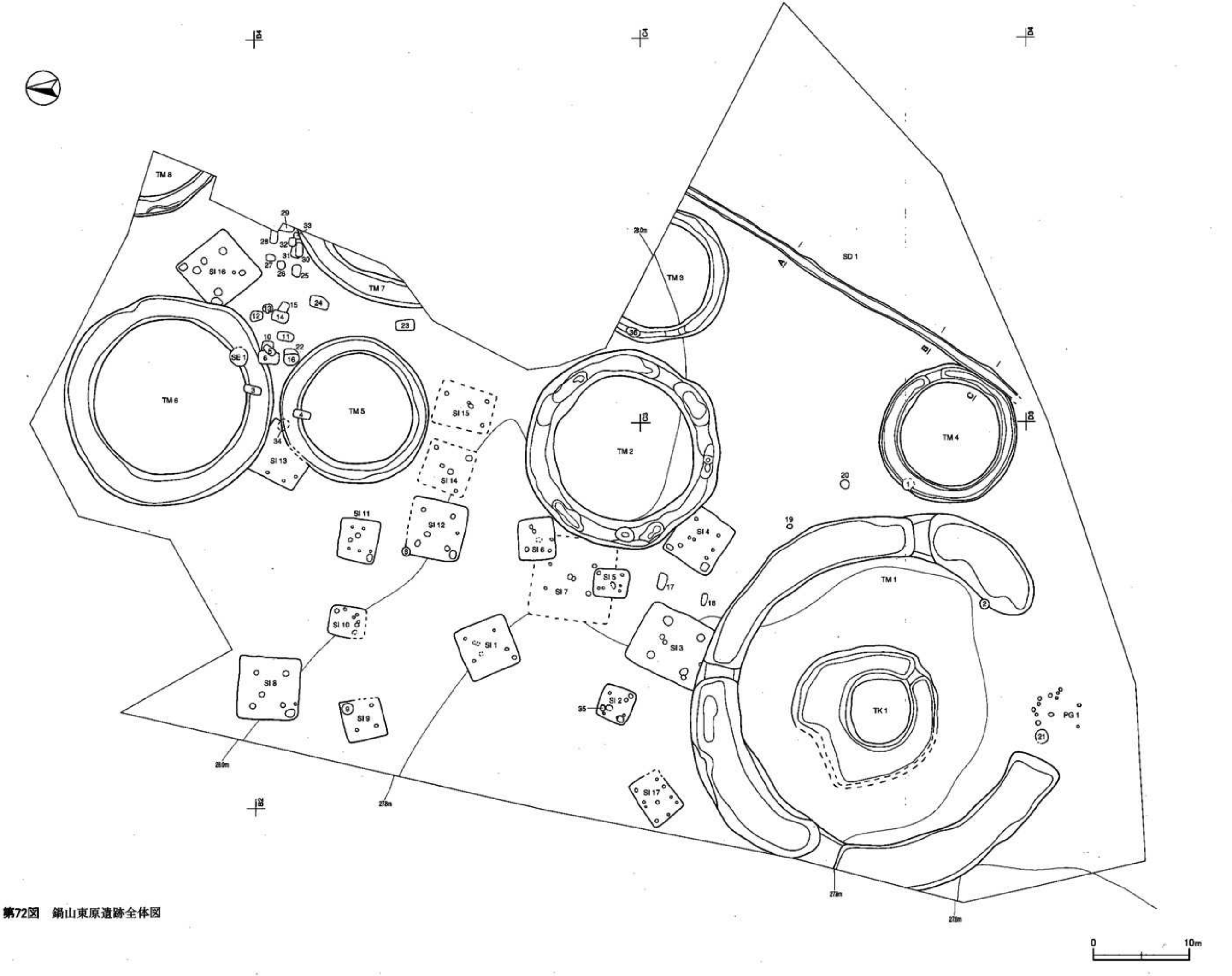
12）宇島和男「初期群集墳と帆立貝式古墳」『第11回特別展　帆立貝形古墳を考える』かみつけの里博物館　2003年10月

13）帆立貝式古墳の基準については櫃本誠一氏の考えに基づいた。
- 櫃本誠一「前方後円墳における前方部の諸形態」『古代学研究』150　古代學研究會　2000年9月

参考文献

- 明野町史編さん委員会『明野町の遺跡と遺物』1983年7月
- 後藤孝行「一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　石岡別所遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第244集　茨城県教育財団　2005年3月
- 江幡良夫　黒澤秀雄「二の沢A遺跡　二の沢B遺跡（古墳群）　ニガサワ古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集　茨城県教育財団　2002年3月

・小竹茂美　浦和敏郎「戸崎中山遺跡　霞ヶ浦環境センター（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第218集　茨城県教育財団　2004年３月
・浅野和久「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　実穀古墳群・実穀寺子遺跡１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集　茨城県教育財団　1999年３月
・東日本埋蔵文化財研究会「古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－」第Ⅱ分冊－東日本編Ⅱ－関東地方1993年３月
・「茨城の常滑Ⅴ」『研究ノート９号』茨城県教育財団　2000年６月
・樫村宣行　土生朗治　白石真理「茨城県における５世紀の動向」『東国土器研究』５号　1999年５月
・茨城大学人文学部考古学研究室「常陸の円筒埴輪」2002年３月
・東北・関東前方後円墳研究会「第６回東北・関東前方後円墳研究会大会－中期古墳から後期古墳へ」2001年１月
・大塚初重　小林三郎　熊野正也「日本古墳大辞典」『東京堂出版』1992年５月
・千葉隆司「小田氏の仏教と中世墓」『婆良岐考古第27号』婆良岐考古同人会　2005年５月



第72図　鍋山東原遺跡全体図

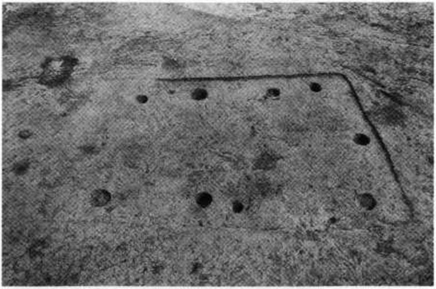
写　真　図　版

第１号住居跡出土遺物

遺　跡　全　景

遺構確認状況 1

遺構確認状況 2

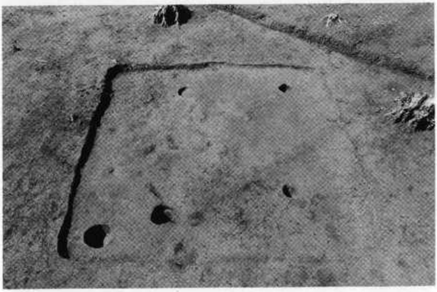


第 17 号 住 居 跡
完　掘　状　況

第 17 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第 19 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

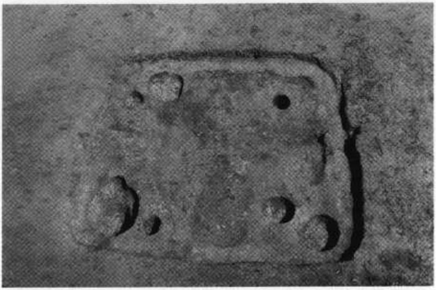
第 34 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 住 居 跡
完　掘　状　況

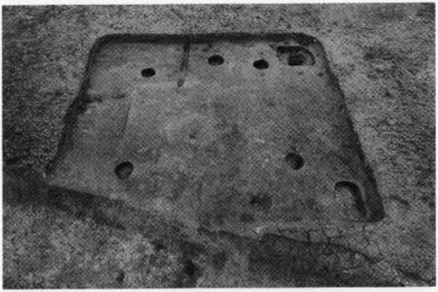
第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第 1 号住居跡
遺物出土状況



第 2 号住居跡
完　掘　状　況

第 3 号住居跡
完　掘　状　況



第 4 号住居跡
完 掘 状 況

第 6 号住居跡
遺物出土状況

第 8 号住居跡
完 掘 状 況

第 11 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 16 号 住 居 跡
完 掘 状 況

第 16 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第　1　号　墳
完　掘　状　況

第　1　号　墳
遺物出土状況

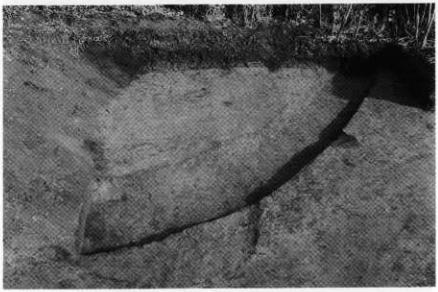
第　1　号　墳
遺物出土状況

第　2　号　墳
遺物出土状況

第　3　号　墳
完　掘　状　況

第　4　号　墳
完　掘　状　況

第 5 号 墳
遺物出土状況



第 8 号 墳
完 掘 状 況

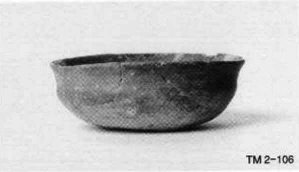
第 8 号 墳
遺物出土状況

第 1 号 塚 跡
完 掘 状 況

第 1 号 塚 跡
遺 物 出 土 状 況

第 1 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

TM 1-100


TM 2-106

TM 2-105

TM 2-107

TM 3-111

TM 5-114

TM 4-112

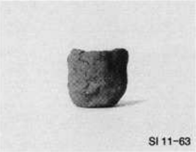
TM 8-119

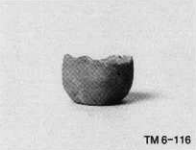
TM 6-117

TM 6-118

出土土器（古墳時代）

PL 12


SI 11-63


TM 6-116

SI 12-73

SI 12-72

SI 12-74

SI 1-27

SI 3-31

SI 1-7

SI 3-30

SI 5-37

SI 1-5

TM 4-113

出土土器（古墳時代）

SI 8-50

SI 16-83

SI 1-8

SI 1-9

SI 1-10

SI 1-11

SI 1-12

TM 2-108

出土土器（古墳時代）

PL 14

SI 1-4

SI 14-78

SI 1-13

SI 1-14

SI 1-15

SI 1-17

SI 12-67

SI 16-96

出土土器（古墳時代）

SI 6-43

SI 12-68

SI 12-71

SI 6-44

SI 12-71

SK 19-2

SK 19-1

出土土器（縄文、古墳時代）

SI 6-41

SI 12-69

SI 6-42

SI 16-88

SI 1-26

SI 16-87

出土土器（古墳時代）

SI 1-23

SI 1-25

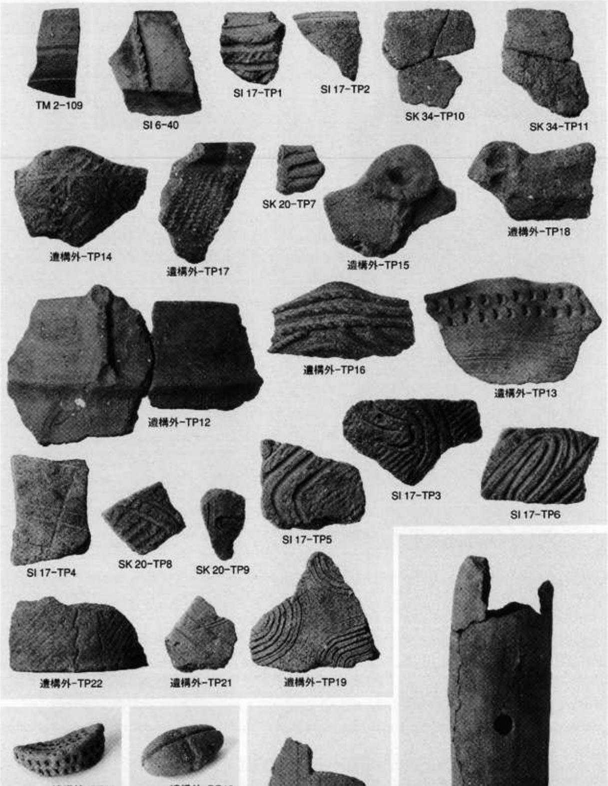
SI 7-46

SI 16-93

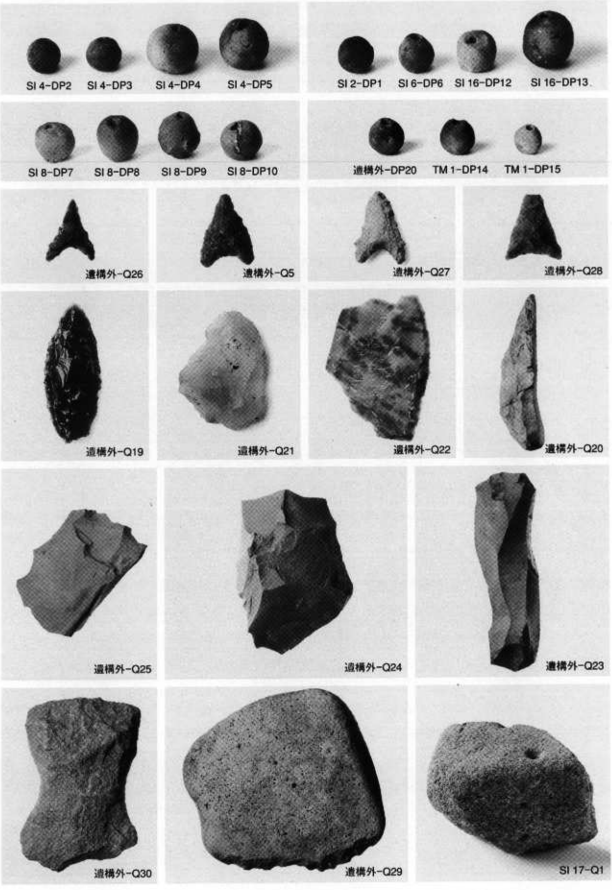
SI 16-91

SI 16-92

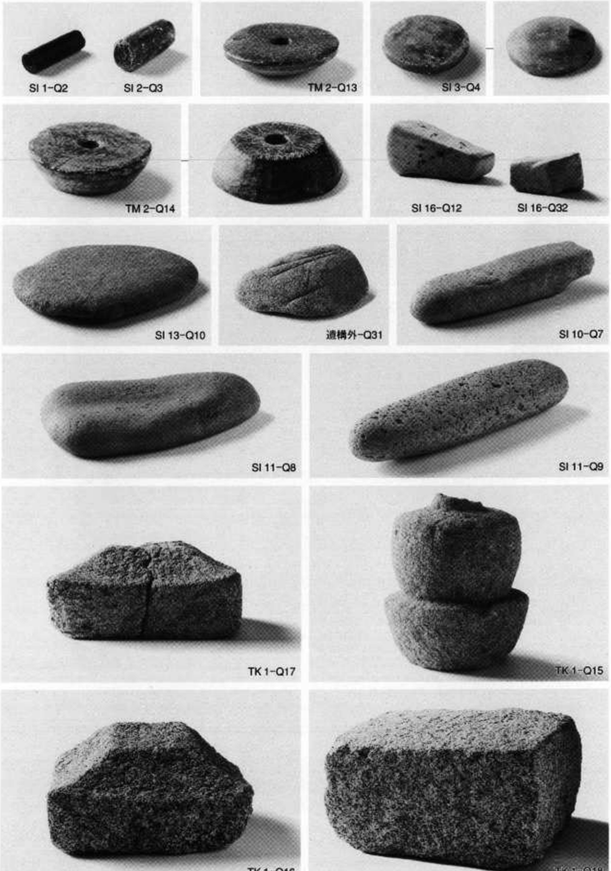
出土遺物（古墳時代）



出土土器、土製品、金属製品


SI 4-DP2
SI 4-DP3
SI 4-DP4
SI 4-DP5
SI 2-DP1
SI 6-DP6
SI 16-DP12
SI 16-DP13
SI 8-DP7
SI 8-DP8
SI 8-DP9
SI 8-DP10
遺構外-DP20
TM 1-DP14
TM 1-DP15
遺構外-Q26
遺構外-Q5
遺構外-Q27
遺構外-Q28
遺構外-Q19
遺構外-Q21
遺構外-Q22
遺構外-Q20
遺構外-Q25
遺構外-Q24
遺構外-Q23
遺構外-Q30
遺構外-Q29
SI 17-Q1

出土土製品，旧石器，石器


SI 1-Q2
SI 2-Q3
TM 2-Q13
SI 3-Q4
TM 2-Q14
SI 16-Q12
SI 16-Q32
SI 13-Q10
遺構外-Q31
SI 10-Q7
SI 11-Q8
SI 11-Q9
TK 1-Q17
TK 1-Q15
TK 1-Q16
TK 1-Q18

出土石器、石製品

茨城県教育財団文化財調査報告第266集

鍋山東原遺跡

つくば明野北部工業団地地内
埋蔵文化財調査報告書

平成18(2006)年3月20日 印刷
平成18(2006)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
印刷 (有)川田プリント
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53
TEL 029-253-5551